

家久公 年間不詳

附錄 舊記雜錄 卷廿三

「家久公御譜年間不知冊中」

家久詠歌遺藁集序

嘗聞動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、慰武夫心者、無如和歌、故我朝名將志士、自古好此道者不為不多矣、夫人處世諒不能無為、思慮易遷哀樂相變、感激以逐發言詞、可以述懷可以發憤、於是其志善不善可見、其人賢不賢可

知、蓋知其賢、則親之、知其不賢、則遠之、見其善、則思齊焉、見其不善、則內自省、則雖誠意正心修身齊家治國平天下之學、亦何異哉、是以、如吾島津氏繼統之主、世學此道不疎、就中曩祖忠久、講武之暇學富和漢之才、以故 將軍實朝卿、建曆三年二月二日、撰擢、以為學問所和漢故事談輩、而竟開薩隅日三州五百年來之基業、是忠久有德所致也、上總介忠宗最工詠歌、所詠和歌、載在于新後撰續千載和歌集等、爰修理大夫貴久之顯考日新齋者、師學桂庵玄樹禪師、而通內外典籍、武威振四隣、文德被國人且以能和歌、聞乃冠以呂波四十七字、而詠四十七首和歌、以丐添削於宗養法師、宗養不轉換一字、却書其側太加褒辭、加旃備 近衛准三后高覽、則作跋文稱美焉、是普世人所知也、貴久亦克居業、嫡嗣義久武威鎮撫九州、政務之餘力好詠歌、因受古今集之傳於 近衛前久公、能究蘊奧、天正十五年、義久許客于攝之大坂、將歸國、時憂留別令愛、詠別袖之和歌、示細川玄旨、玄旨深感其哀情、報以和歌、乃以義久所詠、達 大閤秀吉公聽、

則憐之、遂免質留龜壽姬、父子共得還國、是非化人倫和歌之德乎哉、此外在洛之日所詠吟和歌、秀逸者多、五岳名衲爭和其末字、其詩僉見翰林五鳳集、義久麾下將帥如川上久隅・喜入久正・新納忠元・上井覺兼等、○亦共能和歌及連歌、國人亦競好之、是上所好者不令下好之、如風草形影、自然之理也、以可見六義之風乎、兵庫頭義弘好之不淺淺、而雖如斯上數主之詠歌不多聞何乎、是依無集錄也、抑中納言家久者、不啻施武名於異朝、從蚤年慕祖先之風、深嗜數島之道、頗有所得、花朝月夕每遇佳景、必一詠一吟以述懷、慶元之間、妻由公事宦遊于京師、上交雲上之貴族、下會花下之吟客、互詠吟贈答不知幾篇乎哉、若夫元和五祀五月三日侍 智仁親王之會席、而題寄道祝詠和歌、又是一時之勝事也、雖然、無集錄、則竊恐不傳善事之後世、幸今方補續家久之譜缺如、家久之吟藁秘藏在于文庫者、若于於是傍羅曲探所得之者、亦若于併共臨寫之、由次編集、分部類以爲六卷、名曰家久詠歌遺藁集、儻一披此集吟詠、則家久之仁義雅風不瑛言、而可

知、猗歟、武將而兼文武、如家久者、爲武將者之、所可追慕也、覲、此集傳萬萬歲、而爲後代之一鑑、因序矣、
寶永六歲次己丑(五月)薤寶中浣吉日

凡例

一和歌及連歌記年號月日者、僉追年序載本譜、今又載于此集、雖爲重出、一以嫌脫其部類、二以爲如本譜散在于各卷、而不便急卒考索也、

一於此集文字、行行不均、或有大小、或有正歪散斜、而與尋常歌書異者、尊家久之手書、不違其趣、用臨寫以編載也、且家久之詠而用他筆者、只用摸寫、以故其字畫自件件、

一凡有家久之諱者、或短策或草稿之類、而皆家久之手書用臨寫者也、讀者其思之、

940 「正文在藤崎半右衛門」

試筆

家久

あら玉の雪より明て氏の戸の

國ゆたかなる春はきにけり

立歸る花の春しるうくひすの

千里もいまや初音聞らん

「正文在喜入五郎兵衛」

試筆

家久

とし越て千とせをいわふことの葉に

つもれる雪ハゆたかなりけり

發句

あら玉のみきりは千世の宿り哉

「正文在島津市之助忠祖」

試筆

豊なる世に二たひの春の來て

今年とやいはんけふ

「正文在新納左京忠倚」

試筆

中納言家久

よろつ代を雲ゐの春にあたらしき

霞の衣たちそかさぬる

發句

空にミつ東や光けふの春

「正文在宮之原越右衛門」

試筆

中納言家久

よろつ代を雲ゐの春にあたらしき

霞の衣たちそかさぬる

發句

空にミつ東やひかりけふの春

「正文在長崎源助」

試筆

家久

とし越て天つみ空もときめける

光あまねき春の明ほの

若みつをむすへはしるし筆の海に

老せぬかけをうつしてそ見る

「正文在石神十郎兵衛」

試筆

家久

「二首共前ニ同シ」

「正文在東郷藤兵衛」

元日

家久

花鳥の音もいかばかりとし越て

さかゆく春の色こめてけり

發句

日のもとや光を四方の春の色

「正文在花舜軒」

試筆

家久

「歌、發句共前ニ同シ略ス」

「正文在島津筑後忠置」

元日

家久

そのかみのあまつひつきの跡とめて

道し有世は久かたの春

發句

長閑なる宿りや千とせけふの春

仙齋

「正文在河野次左衛門」

試筆

中納言家久

昔日「本マ」の天津日月の跡とめて

みちし有世や久堅の春

發句

同

長閑成やとりや千とせけふの春

「正文在仁禮正膳五」

試筆

家久

あら玉のとしを待えて花鳥に

心ときめく春のそら哉

ことふきのしらへも春にあひ竹の

雲みに千世の音をそたのしむ

若水の聲すむ影や朝か、見

「正文在谷山長右衛門」

試筆

中納言家久

あら玉の光はしるきみちのくの

「本マ、」 「年トアリ外御同歌有り」

年にをくる、春のけしきを

發句

としと、もに春待梅のつほミ哉

「正文在島津内藏」

試筆

家久

住よしの年ふる松もあらたまの

春にわかへんことの葉のすゑ

めくミある世の長閑さやけふの春

「正文在文庫」

試筆

中納言家久

あら玉のひかりはしるきみちのくの

年にをくる、春のけしきを

「正文在島津市之助忠祖」

發句 元日

家久

あら玉の宿りや千とせけふの春

「本マ、」

いそげとやこそそのたつ春の宿の梅

「正文在島津市之助忠祖」

歌

初春のあまつひつきの跡とめて

いはふ心そとしにまされる

いくとせのかきりハあらし筆の海

けふこゝろむる大和ことの葉

「正文在村田與三左衛門」

あたらしきとしにをくれてたつ春も

霞て四方はのとかなりけり

一夜明てこゝろもはなの朝哉

千とせ咲花もけふ見る春日哉

家久

暮て行年をうら見も又ゑミの

ひらける花のはるや祝ハん

「正文在木脇次郎右衛門」

若菜の二首とりあへず

家久

〔舟カ〕
舟とむる浦のけしきも春めきて

いその若菜をつめるけふ哉

あまの子に袖うちつれて舟もらひ

浦めつらしき若菜をそつむ

〔正文在島津中務久輝〕

〔短冊〕
若菜

いくとせもつみはあかしな七種の

老せぬ若菜袖になれつゝ、家久

〔正文在島津内膳久兵〕

わかな

家久

としことに雪満分來て天下

つむにたえせぬわかななるらん

賤か身のうきも忘れてわかなつむ

田面いろめく春ゆたか也

子日

けふことに心も野邊にひかれ行

小松のかけや千代を見すらん

子のひして松の千年を吾か家の

ためしにひきてうへやをかまし

〔正文在高崎甚五左衛門〕

〔朱カキ〕
〔春歌拾五首之内〕

春雨のたえくつたふ忍ふ草

しのひかねたる軒の玉水

〔正文在國分正八幡宮〕

〔短冊〕
立春

四方にミつひかりうらゝにあまつ空

はなの春たつけふにも有哉 家久

〔右同〕
子日

二葉より千代のためしを高砂の

まつに小松の初子日せん 家久

〔右同〕
霞

たくひやハみどりの色も残りなく

霞たなひくしの、めの空 家久

「短冊」

かすしらぬ年ハ來るともけふことに

仙齋

まいる 若菜つみつゝ萬代やへん

家久

はつ音や春をさそひ來ぬらむ

「正文在本田次郎右衛門」

家久

色よ香に神や宿り木梅花

「正文在文庫」

春

家久

いつのまに春立きぬと名にめてゝ

花の梢もさくらしま哉

「正文在堀甚左衛門」

なきかけの霞む外山もことの葉の

春

色香や法のはなさそふらん

「正文在島津勘解由久當」

家久

初春

天の戸やあけそめしより遠近の

霞たなひく四方の山々

久かたのそらも長閑にうくひすの

「正文在文庫」

梅か、を袖に待えし千代の春

雲かすミ梅か、ひたすにほひ哉

「正文在文庫」

神かきや梅香、もれぬ

こむるにほひ哉

神垣やうくひすこむる梅の宿

「正文在文庫」

家久

神かきや梅香、もれぬにほひ哉

木「本マ、」

若みとり咲そふ梅の枝すゑ哉

「正文在村田伊左衛門」

家久

雪に梅いろを結やいと柳

「正文在下木屋町岩本宗左衛門」

咲そめしわか木の梅のゆくすゑを

「短尺」

きみか千とせにかけてこそ見ぬ 家久

「正文在武仁兵衛」

梅

山里は雪つもらせてむめの花

はるをまてとや咲にほふらん 家久

「正文在米良恕兵衛」

梅花盛

さくやこの花の盛にむれて来る

袖は千とせの春もかきらし 家久

「正文在池田六左衛門跡」

梅花盛

家久

さくやこの花のさかりにむれて来る

袖は千とせの春もかきらし

「正文在中原茂右衛門」

「短冊」
とりあへす一首侍ぬ

手をふれし雪の木すゑの梅香、に

ちとせの春をかきしてそ見ん 家久

「正文在南雲新助」

「短冊」
おまん様

おましな色をも香をも見る人の
まいる

心からにや手折梅かえ 家久

「正文在森源七」

「短冊」

梅

冬木よりあらはれてまつ咲やこの

はなの梢はなミならぬこそ 家久

「正文在島津中務久輝」

「短冊」

いく春もかさしの袖にとめこかし

梅のにほひを忘れすもとへ 家久

「正文在種子島彈正」

色に香よ霞にもる、梅か枝の

ひらく朝にかほる春風 家久

「正文在二渡伊左衛門」

けに手折袖に春待詠めこそ

なをさりならぬむめの一えた

かうはしき梅の立枝のあらはれて

春のとなりの宿もさかふる

家久

「正文在三原次右衛門」

「短冊」

海上の梅花めつらしく一首侍りぬ

このもとハいつくなるらむめかれしな

浪のおりくかさず梅かえ 家久

「正文在福山平右衛門」

梅

家久

くれなるに八重咲むめのいかな〇れは

色にけたるゝにほひなるらん

咲にほふまかきの梅の下かけハ

なをさりならぬまとひなりけり

のきちかき梅のさかりハ春ことに

なれまさりぬるもろ人の袖

花の色も見る人からと心して

八重咲いつるくれなるの梅

雲霞のとけき四方の空はれて

梅か、清きにはのいけ水

なそへなき袖になれくる鶯の

はつ音にちらせ庭の梅かゑ

「正文在新○村休右衛門」

「短尺」
うくひすもふり出てなけ紅の

むめ香ゝにほふ花のさかりに 家久

「正文在遠矢伊右衛門」

「短冊」
さき匂ふ花もみとりの色にしも

枝に青柳梅は紅る 家久

「正文在島津市之助忠起」

「短冊」
さき匂ふ花もみとりも色々に
に「本マ、」

枝は青柳梅は紅る 家久

「寫正文在今井次右衛門」

鶯宿梅

鶯の春待宿の梅かえを

をくるころハ花にも有哉 家久

「正文在高崎甚五左衛門」

「朱カキ」
「春歌拾五首之内」

明残る月よりきなくうくひすの

こゑもたへなる木のま也けり

「正文在黑葛原源左衛門」

梅か枝にすたく砌の鶯も、
「本マ、」

家久

なをさりならぬことの葉の末

妙にしも春くることにこゝら啼

法をとなふる庭のうくひす

「正文在島津新八」

一えたの梅のうくひすはなやかに

ほころひ出よ千聲百聲

「正文在林甚五兵衛」

「短冊」
幾とせの梅かゑにしやうくひすの

宿にかハラぬ初ねなりけり 家久

「正文在島津中務久輝」

木すゑより散くる雪はくれなるの

むめに色そふみきり成けり 家久

「正文在市來新左衛門」

「色紙」
老て又かへりもそするうくひすの

ふるすあらずな春の谷風

「正文在島津市之助忠昶」

「短冊」
見るからに霞むけしきのとを山は

またきも花におもひこそやれ 家久

「正文在肝付五郎兵衛」

庭前花

家久

天津雲朝戸ハ花のさかり哉

花にこそ横戸かほる砌かな

山々のはなは砌の一木哉

雲は花にほひ玉しく砌かな

うつしうへて千代の初花みきり哉

「正文在島津市之助忠昶」

「短冊」
山くや千世の花園春の宿 家久

「正文在本田新助」

家久

久方の空に見さりし雲かすミ

匂ひや花の梢なるらむ

萬代の春をしたひてもろ人の

花を砌に契りてそ見る

「正文在島津中務久輝」

「短冊」
ちらはいかにくやしからまし春雨に

さゝて待みる花のさくら戸 家久

「正文在伊勢兵部貞榮」

「短尺」
いにしへも今もあかなきさくら花

おもかへりせぬ春にあふ哉 家久

「正文在島津中務久輝」

「短冊」
見るまゝに昔なからの花のいろ

かにめて、しも折ぬ日そなき 家久

「正文在奥山勘右衛門」

「短冊」
いく度も來てや詠めん咲のほる

花のすゑ葉の枝あまたなり 家久

「正文在島津中務久輝」

夕附日うミ山かけてみわたせは

はなや霞そさかひ成ける 家久

「正文在佐佐木勘右衛門」

散さしといとひし庭の櫻はな

さかりをとへぬ色にうつろふ 家久

「此御詠哥島津勘解由久當ニあり略ス」

「正文在高崎甚五左衛門」

詠めよや光長閑にをくる日に

山の櫻はさかりとをしれ 少將

「正文在大河平源助」

うつし植て馴し千もとの花さかり

あかぬ色香は春やしらまし 家久

「正文在石原次郎右衛門」

雲とみし花のさかりハ木のもとに

ちらぬもつもる雪の明ほの

花さかぬかたもなミ木にみよし野、

山路やけふの宿り成らん

「正文在新納十郎」

一枝の花はありとも言の葉の

なさけをめてぬ春はあらしな 家久

「短冊」

長閑かなる花に怨ことしたに

くる、はおしき春の空哉 家久

「正文在安藤善助」

ななき日もよしや忘る、花さくら

詠めあかなき□代の春哉 家久

「正文在阿多嘉左衛門」

咲ミちむさかりとへとや折朶の

はなのまたきに情しるらむ 家久

「正文在大馬場休右衛門」

色もけに見る人さへやおりかさす 家久

花のにほひになる、衣手

春

春ことにさき散花は誰しかも

心のゆきてをしまさらめや

淵

ふちせにもうつしてみはや花さかり

ちらさぬ浪を面かけにして

「正文在種子島伊右衛門」

家久

君か代を松にちきりて櫻はな

さかり久しき木かけをや見ん

さ、浪のかゝるとみえし梢より

うつろひそむる山さくら哉

「正文在藤井孝左衛門」

惟新様

をしなへてなかめさらめや千里まで

雲にまかへる花のさかりを

家久様

櫻糸に手折のミかは匂ひ来る

花の木すゑをともになかめん

同

しら雲の八重たつをちも春くれは

はなもこゝにしみよし野の山

なかめつゝ千とせやこゝにをくらまし

かすミのほくコトのさくら戸の陰 紹嘉

みよし野、花をミきりに移し來て

雲の八重たつ山をこそ見れ 同

萬代もおなしさかりの花の色を

うつしてこゝにみよし野の春

重種

「正文在宮内喜兵衛」

家久

春風のつけこし花のにほひより

見ぬ色深き木陰をそ思ふ

「正文在有川治兵衛」

中納言家久

うつし植て馴し千もとの花盛

あかぬ色香は春やしらまし

白妙に咲散はなのみね越て

雲の浪たつ梢なるらん

歸るへきおりとやさそふ夕附日

かすみに匂ふ花の下かけ

梢より散かふ花の長閑さや

こてふのはさみたれ來ぬらん

山かせも治れる世の時しあれハ

花の梢ハ咲も残らす

「正文在島津市之助忠起」

「短尺」
梢より散かふ花の長閑さや

こてふのつはさみたれ來ぬらん 家久

「正文在飯牟禮權左衛門」

「短尺」
おしとたにいはれさりけり櫻花

ちるをみるまの心まとひに

「正文在高崎甚五左衛門」

春歌十五首

家久

山もとはいつく成らん見わたせは

雲の八重たつ朝かすミ哉

「正文全上」

「朱カキ」
「春歌拾五首之内」

思ひやるみきりハまたき色なから

外山のさくらさかり成らむ

たつね入花にしおりのとを山ハ

こゝろつくしの春の日くらし

「正文在島津内藏」

庭に絲さくらをうつしうへ侍けるに、おもしろく花の

咲待ければ、霞をくミもろ人の袖ふる山もいかハかり、

いつくの名所もさらなり、東の春ことにつくし萬よのた

めしたのしミのたのしミと一首よミ侍ぬ、

ことの葉もさなからなひく青柳の

絲に櫻の花を見るかな 家久

とふ人の袖の色より明ほの、

けふ時めける花のさくら戸 忠元

うつしうへてなれも千とせのいゑ櫻

花のさかりハあかしと思ふ 久貞

二月廿七日

「正文在富田清六」

「短尺」

絲櫻

朝露のたましく庭に咲花の

い□かしこき春にあふ哉 家久

「正文在島津市之助忠起」

思ふにもいふにもあまりかさしぬる

さくらは袖の物にやあら南

家久

花のさかりなるまゝ

紹嘉

「正文在喜入休右衛門」

「短冊」 庭のさくら一枝をくり申候まゝ一首、

はもし
まいる

久方のあまの羽ころもいくかさね

花の夕はへ手折ひさくら 家久

「正文全上」

「短冊」

花の 思ふにもいふともあまりかさしぬる

さかりなるまゝ、 さくらハ袖の物にやあら南

紹嘉

家久

「短冊」 池邊花

ちらさしの木すゑをひたす池水に

しからミとめよ花のしら波 家久

「正文在土持平右衛門」

かけひたす青葉さくらの木まより

夕ゐる浪の花は幾とせ 家久

「正文在島津市之助忠起」

池邊花

家久

治れる時しも花のかけ見えて

なみも音せぬ池の面かな

ちらさしの木すゑをひたす池水に

しからみとめよ花のしら浪

みどりこき花のうへこす白浪の

かけてにしきをあらふ池水

花似雲

引のこす雲かとはかり朝またき

花の陰よりあくるさくら戸

かさなれる雲のはたての遠山ハ

花に心をつくす明ほの

松隔花

春ハ猶ふかみとりそふ松かえも

はなのさかりはめかれさりけり 虎壽丸

立ならふ松の木陰にさく花は

ちとせの春をなれや來ぬらむ

春をまつ木陰ハ千世のこゝろして

山のかひよりミゆる初花

(各点ハ島津氏世録正統系図ニヨリ補フ)

「正文在河野造酒之丞通行跡」

「短冊」

庭櫻

心してけふ咲にほふさくらはな

ちよの春するよすかなりけり 家久

「正文在高田茂太夫」

庭前櫻

東かたおもひこそやれ八重さくら

花の木かけの袖のまとひを 忠直

返哥

よしやさハ人傳ならて東路の

花のまとひを來てや語らん 家久

大空は霞める月につくし方

はな咲かほる宿りゆかしも

いせつる

「正文在脇元助左衛門」

「短冊」
返歌

つくしかた人傳ならて木もとに

來てや詠めむ八重さくら花 家久

「正文在島津筑後忠置」

「短冊」
返歌

よしやさハ人傳ならて東路の

花のまとひを來てや語らん 家久

「正文在伊集院嘉左衛門」

色も香もあるしまふけにをのか名を

なおり出たる花さかりかな 家久

「正文在阿蘇越右衛門」

「短冊」
咲そめぬ梢と見しも散てうき

山櫻 世にまかせたる山さくらかな 家久

「正文在頼娃左京久甫」

「短冊」
白妙に咲ちるはなのみねこえて

くものなミたつ梢なるらむ 家久

「正文在中神七右衛門」

不散花ノ風

家久

ちりもせずなひきあひたる花ふさハ

風のみたせる梢なるらむ

「正文在文庫」

あかなくに散も「本ノマ」にし花の名残さへ

なをあまり有春のくれ哉

「正文在島津勘解由久當」

家久

みわたせハ風ものとけき春の海の

みきりをひたすいり江なるらん

かけひたす青葉さくらの木のまより

夕るる浪の花は幾とせ

「正文在二階堂與右衛門」

「短尺」
夕なきのかすむ汀に月落て

さなから浪の花の海原 家久

「正文在佐佐木勘右衛門」

「夕なきの云く御同哥也」

「正文在家村造右衛門」

梅柳

家久

色ごとに梅の匂ひの時し有

いとも霞になひく青柳

浅みとり袖にしかけてかほる香の

風により来る絲柳哉

「正文在島津市之助忠純」

「短冊」
とりあへず返事なから一首、

かちき
まいる

一枝に手おれる花のもゝとせを

なれて詠めむかさし成けり 家久

「正文在島津備中久茂」

春風

梅かゝを吹来る風のにほひより

千さとのほるをしらせぬる哉

春風の吹そめしより見ぬ花の

さかりをいとふ木すゑなるらむ

家久

「正文在相良與(三)左衛門」

「短冊」

野ゆうのほとおもひやり一首、

春雨の露の若草ふみ分て

つむやつはなの袖そゆかしき 家久

「正文在喜入休右衛門」

「短冊」

春めつらしき

雪さそと思ひやり

紹嘉

ふりはへていかにやみらん春の宿

花かこそ思ふ雪かとおおもふ 家久

「此御同詠島津市之助忠純ニ在リ」

「正文在伊勢八右衛門」

「短冊」

春ふかきけしきの森にたち馴て

あきまで蟬の聲や聞まし 家久

「正文在頼娃左京久甫」

「短冊」

見ぬ色の木すゑもさそな花さかり

春にをくれぬ音つれそ待

「正文在島津市之助忠規」

「短冊」

先ほどハよしめける傳聞すてかたく一首、

見ぬ色のきそな砌の花さかり

春にをくれぬ音つれそ待 家久

「正文在藤源七」

「短冊」

ぬきかへて見はやたひく春のきる

霞の衣花の色かに 家久

「正文在島津中務久輝」

「短冊」

うつろひし花の名残の木すゑより

春雨のふる空やなかめん 家久

「正文在高崎甚五左衛門」

「朱カキ」

「春歌拾五首之内」

永き日もいつかやよひの夕暮と

おしむハかりに春を過らん

「正文全上」

「朱カキ」

「春歌拾五首之内」

あハれ也花には惜き名残さへ

歸るこし路や天津かりかね

「正文全上」

「朱カキ」

「春歌拾五首之内」

いとひても暮る物から山ふきの

花こそ春のかたミなりけれ

「正文全上」

「朱カキ」

「春歌拾五首之内」

春ふかき木すゑにかゝる藤浪の

はなにごゑしてにほふ山かせ

「正文全上」

「朱カキ」

「春歌拾五首之内」

うすくこく色にある岩つゝし

「本マ」

いわぬハかりの花のかけ鼓

「正文全上」

「朱カキ」

「春歌拾五首之内」

たくひやハ咲ぬる桃の花も實も

時めく春のかさしなかな

「正文在相良權大夫」

「短冊」
紅に八重咲桃のみちとせも

けふにかはらぬ花の色かな 家久

「正文在伊集院主水久明」

「短冊」
くれて行春の名残の一枝は

千本のはなのかさし成けり 家久

「正文在野村源助」

詠めよや春の名残のみなと川

浪のはな咲かくる藤かえ 家久

「正文在島津中務久輝」

「短冊」
とくをそく待日ハあれとけふに咲

花のこゝろのふかミ草かな 家久

「正文在市来新左衛門」

「短冊」
春ことに八重山ふきの藤つゝし

袖をつらねて花を詠めん 家久

「正文在三原次右衛門」

「短冊」
しハしとて詠る庭の藤かつら

花のしなひのさかり久しも 家久

「正文在文庫」

家久

幾千とせ庭に藤か枝はなの松

月花にかすまぬにはの外山かな

「正文在島津中務久輝」

「短冊」
え

春雨の露の名残に咲つゝし

けさ猶まさる花の色かな 家久

「正文在帖佐次左衛門」

「短冊」
躑躅

こきうすき岩まゝの岩つゝし

外にはめてぬ花の色かな 家久

「正文在島津中務久輝」

「短冊」
え

けふことに詠よとてや岩つゝし

いわぬもしるき花のいろく 家久

「正文在宇都興左衛門」

「短冊」

つゝし盛なるまゝ二首侍ぬ、

こきうすき岩まゝくの岩つゝし

外にはめてぬ花の色かな 家久

「正文在島津中務久輝」

「短冊」

幾千しほそめて色こき萬世の

はるになれてやつゝし咲らむ 家久

「正文在有川興左衛門」

松有春色

家久

いく千とせ松にこまつの色そへて

さかへ久しき君か代の春

色も今霞にもるゝ松か枝の

みとりや千代のためしなるらん

いろかへぬ松のうは葉ゝ萬代の

若みとりそふ春のけしきか

「正文在伊勢八右衛門」

「短冊」

見せはやとまたせくくてはつか草

花のさかりハけふにそ有ける 家久

「正文在島津中務久輝」

「短冊」

まちくし心くらへのかひそある

八千よの椿花さきにけり 家久

「正文全上」

「短冊」

惜餘春

一とせにひとたひ花の咲春を

たれか惜ぬ人はあらしな 家久

941

「家久公御譜年間不知」

「正文在家村源左衛門」

「口切」

ゆふたちの跡は

嶺晴月杳連

捲簾秋意足

暖酒社遊禪

玄碩

一卜

貞昌

かつくも落る紅葉の木のもとに

安綱

しはしか程はやすらへる阡

重位

分のほる山ははるけき袖ならし

家久

さし捨てし裳をける柴船

元綱

晩來勞渡遠

玄碩

燈幽惱旅眠

一ト

夢教風使駭

貞昌

敷わひけりな夜はの小筵

家久

間近くもなくハあなかまきりくす

元綱

や、夕かけの月に憐

安綱

楓軒涼氣過

一ト

竹榻水聲潺

玄碩

山かけの住家はみるに清かれや

重位

棒後意何情

貞昌

時めける花をみやこの春の空

家久

興隨揚柳天

一ト

檐温鶯語緩

玄碩

影さやかにもひかり遷ふ

元綱

むら雨ハそ、きく、て過けらし

安綱

人けもうとくみゆる荒小田

家久

水枯流較冷

貞昌

樓霽月猶鮮

玄碩

鴈影帶風連

一ト

みねより峯に雲ぞ懸れる

重位

雨はた、みるか内にも降めぐり

家久

すゑはるかなる里の中川

安綱

岩尾半塵顯

玄碩

山腰小路穿

一ト

鐘幽知遠寺

貞昌

鐘内煮甘泉

玄碩

埋火のあたりや馴もまさるらん

家久

數喫愛茶煙

貞昌

松籟塵心斷

一ト

世をのかれたる人の賢さ

重位

をこなひは朝な夕なにをこたらて

元綱

かり寝のまくらむすひ摺ふ

重位

ひめをく法のみちや傳ん

家久

思郷眠不得

一ト

遙なる雪の太山を思ひやり

安綱

對月意難宣

貞昌

花飛争後光

玄碩

待暮は哀なりけり虫のこゑ

家久

費吟消永日

貞昌

忍ふ草をやつミも捐まし

元綱

貪醉賞新年

一ト

滿拭萬行淚

貞昌

こゝろむる筆やすさミの友ならん

家久

なくもさひしき山鶻

家久

たのしむ宿はよハひ延なり

重位

いにしへの夢は跡なき柴の庵

重位

遊必江頭月

玄碩

松は木高くたち駢ふなり

安綱

冷淡池上漣

貞昌

住吉やいはひ置たる神さひて

元綱

三
葉零林影少

一ト

鑿耕禱太平

一ト

叢裏社盟堅

玄碩

願聞呈瑞鳳

玄碩

燒火かとみえて暮れはとふ螢

元綱

山翔欲竄鳶

貞昌

袖も涼しきみなと江の船

家久

木葉ちる森の下風吹落て

家久

山近きかたより風の吹出て

安綱

うら枯はつる草ぞ眩る、

重位

前蜀在欄前

玄碩

玉飛欣爲友

一ト

猿叫行宮欄

貞昌

暮をかけつゝ猶小たか畷

元綱

里とをきかた野の末や廣からん

安綱

ともに立まう袖ぞ聯る

元綱

喰霞養拙全

玄碩

長歌呼萬歳

一卜

出し世のうさを忘るゝ花のもと

重位

おさまれる代の例をそ牽

重位

長閑にすくる風は荃し

家久

宴花遊有以

貞昌

四 槇の戸をひらき置たる朝ほらけ

祐昌

そのゝこてふのみたれてそ翻

安綱

送別儀未乾

貞昌

春景隨風散

一卜

玉章に深き心をあらハして

元綱

旅窓過隙遣

玄碩

愁情胸裏填

一卜

望歸行客喜

貞昌

陰晴湖上鏡

玄碩

足とき馬にうつ捨る鞭

家久

羽風も寒き鴛の員々

元綱

「奥切」

霜重青山老

一卜

空清明月圓

貞昌

942 「正文在調所伊右衛門」

草々の露や露とし深からん

家久

家久

秋のしくれそさなく旋れる

重位

□ 經も消のほる露の蓮哉

高峯邊聳首

一卜

白雨すくる庭の池水

重高

しけるこすゑをしたふうつ蟬

家久

雲間もる月ハ盪に影おちて

祐昌

入かたに成日の影ハ靜にて

重位

□ つらなりかりわたる聲

久賀

刈残し田面の原のすゑとをミ

くれてかへさをいそく方々

□た、雪けもよほす風ならし

冬木のなかの松のむらたち

ほのかなる西日ハ雲にかた分て

床はなれつゝひはり啼なり

里人のうち列出る春の野に

霞める露のあたし草むら

長閑なる朝けの月に霜とけて

岩根の水のきよきむろの戸

山しなや求入るとふ宮所

わつかにつゝくミちのかたハラ

五月雨は日數ふるより晴わたり

暮ぬるまゝに螢みたるゝ

思ひたえまたしとするもさすかにて

文のかへしをいつか見てまし

咲方に打つればやの花の友

久元

忠俊

忠政

忠通

重位

元綱

執筆

家久

重高

祐昌

久賀

久元

忠俊

忠政

忠通

重位

元綱

さえつりてたつとりくゝの聲

分二わくる山の下道春更て

落あひてゆく水の一筋

さるまくや底ふかくらしミなど川

さしおほひたる竹のむらくゝ

すみ家もや焼火のかけにしらるらん

かしこき人の跡とひし暮

月にこそさすか心をすますらめ

すりかきしけき露の玉琴

ことの葉の色あさからぬましハりに

忍ふすかたもはかなしつのため

□(あ)やしとやとかめて犬のほふるらん

雨よりの□いつる月のかけ

はるくゝとたひたつ袖のいそかれて

□」をカとくれさきたちうかふ江のふね

□れし嵐や吹もすさみけん

○くはし□松のした庵

重高

家久

久賀

其阿

忠俊

久元

忠通

忠政

元綱

重位

家久

重高

其阿

久賀

久元

忠俊

忠政

世の外は□月のミをよすかにて

忠通

□かなしきさをしかの聲

重位

□言ふ夕山本の秋ふけぬ

家久

□ろなからのとしをふるさと

重高

□いなら□たれる宮仕へ

元綱

943 「正文在調所伊右衛門」

たもと涼しくひらく眞木の戸

久賀

秋近き砌の池の水澄て

忠俊

風にかた□る浪のうきく□

□

あらましくふり來て過る雨の跡

忠政

夕日ほのめく雲の一村

重高

聲くにつれてねくらの鳥

祐昌

枝もしけ木の立つ、俱かけ

忠通

かさなれる岩ほ傳ひの道遠ミ

元綱

いかにすむらんおくふかきさと

重□

たゆむともあらず嵐のし□して

執筆

うかへる舟のあとほるか也

家久

すゝろにも日かすへにけり旅衣

久賀

月を心の友とこそみれ

忠俊

長き夜ハさらに目覺しかちなれや

久元

と絶もをかすきりくすなく

忠政

竹牆の葎の下葉なひきあひ

重高

侘て住家やあらしはつらむ

祐昌

道はたゝあるかなきかの山隠れ

忠通

はらひもあへぬ袖のしら雪

元綱

風あらし志賀の花その分まよひ

重位

むら／＼かすむ浦の明ほの

久賀

浪の上惜む名残のかり啼て

家久

しはしやすらふ眞砂地のすゑ

久元

あつき日をいかにしてかハ送らまし

忠俊

ふくもまはらになれる篠のや

重高

山ちかミ音もそひぬる野分して

忠政

きゆる跡よりまよふ雲霧

忠通

月ハヤ、出にし影もうすかれや
 たつもむかしの秋ならぬ空
 定めぬやうき身の露のをき所
 涙なからの袖のはかなさ
 たまさかに待うる中も引別
 旅のやとりとすめる一むら
 つかれたる駒に秣やかひぬらん
 水のあさみハマつぬるむめり
 うす^{うら}らひも日かりさすよりとけわたり
 田面かつくすき返しぬる
 みるくも麓のさとの明はなれ
 うつれる月のきよき小倉野
 雲晴てゆふ置露や萩すき
 吹かハリたる秋かせのをと
 幾度かかへりみやこの方ならん
 分ならしぬる關路はるけし
 水上もすめる清水のなかれきて

祐昌
 重位
 元綱
 家久
 久賀
 忠俊
 久元
 忠政
 重高
 祐昌
 忠通
 元綱
 家久
 久賀
 重位
 久元
 忠俊

すたく螢はみたれとふなり
 夏ハた、明なからなる窓のまへ
 わかる、袖の名残あるそら
 言の葉の契をかハす花のもと
 長閑きくれのまりの場人
 三
 一とをりそ、き捨たる春の雨
 かすかに残る日影さひしも
 釣舟はわかさとくくに漕かへり
 晋そへつ、もよするしら波
 風さそふ芦の葉分に汐満て
 幾むら鳥かたちさくハく覽
 あら小田の末よりすゑのあせ傳ひ
 ふむあと絶すつ、くほそ道
 かけをける契の程は淺からて
 かた時とてもおもひわすれね
 そなたにも見るやと月に指むかひ

重高
 忠政
 家久
 祐昌
 忠通
 元綱
 重位
 久賀
 忠俊
 家久
 忠政
 久元
 重高
 忠通
 祐昌
 重位

「正文在調所伊右衛門」

物のけしきのしるきをこなひ
 名にもれぬ中のうらミハ淺からて
 待にと絶の有はつれなし
 いひなしに人の心やかハるらむ
 隣へたつるかけの竹墻
 枝たハむ砌の外も花のやと
 春にもあらぬ雪の梅か香
 さえかへる谷の下水かすかにて
 三
 作ともなき岩のはさま田
 暮ことに鳴立聲は物さひし
 むらのあたりにすさむ秋かせ
 をきこほす露の草々打なひき
 雨より後の月のさやけさ
 堪て住庵りのうちのね覺して
 焼もほのかになれか蚊遣火
 一夏のすくるこそた、程なけれ

久賀
 其阿
 忠俊
 久元
 忠通
 忠政
 家久
 重位
 元綱
 重高
 其阿
 久賀
 久元
 家久
 忠政
 忠通

「正文在調所伊右衛門」

深山のおくを立出ぬめり
 まれにとふ心のうちは忘れず
 しはし別れをしたふかたらひ
 涙こそさらにひかたき袂なれ
 松に梅千世やかさぬる神の前
 かすまぬ風になひくしらゆふ
 空ハまた去年のけしきの雪散て
 かつく青む野人の遠近
 澤水の流れの音は絶々に
 作り残せる田面はるけし
 暮かゝる山のはつかに月出て
 露かとはかり時雨せしあと
 すすひきて軒もる風ハひや、かに
 かきほつたひに散やあきのは

重位
 忠俊
 重高
 元綱
 家久
 忠俊
 忠政
 日説
 忠増
 忠通
 尙演
 政貞
 員綱
 重位

「正文在調所伊右衛門」

夢想

仁義欲開口

みちしある世の秋ぞ儘

もる人も月に戸さゝぬ關こえて

歸則鴈來池

霧霽漸佳境

里群儘至岐

早田よりおくて田かけて殖わたし

立ならふ竹一むらハみとりにて

明はなれたるすゑの川水

遙にもよはふこゑするわたし舟

片山もとや住家なるらむ

みれはいま焼火の影のほのめきて

かせのまにくほたるみたるゝ

□來し□より□も□に

康清

景明

忠俊

忠政

日説

忠増

忠通

家久

宗佑

嶺南

玄碩

貞昌

元綱

ふりつゝきたる五月雨の比

響ウくる瀧津なかれのすゑ遠ミ

棧危樵子脚

亂岸雲五七

ねくらにつれて鴉とひ之

月更る森の下風吹おちて

むすひもとめぬ露の道芝

浅「本マ、」冷霜影忍履

妝晚下熏惟

梳髮掩明鏡

たゝ一ふしをうたひ貽せり

ともなへるなさけにしはし酔臥て

旅の名こりに留ぬる騏

逢花忘日暮

愛柳到塔堦

和氣懷氷泮二

あさり捨つゝねふる白鷺

久充

重長

頼景

宗臺

執筆

家久

宗佐

嶺南

玄碩

貞昌

元綱

久充

重長

頼景

宗臺

玄碩

家久

村遠き荒田の原のあせつたひ

宗佐

藝簡學能知

嶺南

扶節感盛衰

嶺南

會話灯挑盡

玄碩

越てこそおほゆる山の高きなれ

元綱

至尊座却昇

宗臺

分雲跡幾窺

貞昌

打つる、行衛は同じ車にて

元綱

雨はれて嵐のをとも過けらし

重長

かしこき袖をしたふ怡

家久

軒端をつたひすかく蜘蛛

久充

いとけなく手習ことの淺からず

重長

又秋驚葉落

宗臺

切磋日勵師

貞昌

片月滿林虧

賴景

照花春夜月

嶺南

人道慮天識

嶺南

胡蝶のねたる露の玉障

久充

儒窓映雪孜

玄碩

三
霞衣多濕錦

宗臺

冬籠りこすまへ袖の朝ほらけ

家久

旅席幾催臘

賴景

春待あへすにほふ梅か枝

宗佐

稀にしも問くる人になれくくて

家久

百喜聲何日

貞昌

結盟双枕支

玄碩

空はほのくうちかすむ時

元綱

別をしさそふハつらき鐘のこゑ

政徳

おもほえず□年やはやからん

久充

なミたの露そ袖に齎める

元綱

なへてそいはるめくる厄

重長

獨歩黄昏月

貞昌

薰琴民與樂

賴景

折待えつ、うき玉祠

重長

山淺知幽寺

頼景

剝盡健陽力

宗臺

峰尖聳嶮崖

嶺南

仰瞻洛泔者

玄碩

乗る舟のよるへを波に定かね

久充

影たかく澄のほる月にうちむかひ

重長

闇深奈暝遅

宗臺

えらふに秋のうたそ寅む

家「マ、」

さひしさや軒にしたゝる夜るの雨

元綱

四 擁書胸霧散

貞昌

かたしきわふるまくら悲

家「本マ、」

寄信故郷辭

嶺「マ、」

ウ せめてさは文のかへしもありねかし

重長

わけつゝもたとるハ京都の山邊にて

元綱

戀意愈添思

貞昌

いくすちならしみちそ伺

政徳

吾髻亂情緒

嶺南

仙栖雲鬢鬢

玄碩

誰愆陷奈聲

宗臺

漁蒚水漣漪

宗臺

ゆるされぬ罪のむくひはいか計

久充

更靜砂鷗睦

頼景

一瞬劫三祇

玄碩

何忙社燕姿

貞昌

あまをとめ袖のかさしも妙にして

家「マ、」

またきさく花はみきりの色々に

家

さき散花やみよし野の蓉奇

元綱

すゑ葉みたる、青柳の絲

元綱

おりくゝに春のあらしやすさむらん

政徳

返す日のみちの往來やしけからん

政徳

篇外費吟鷗

頼景

溝洫倦民疲

嶺

「朱カキ」
「從是以下左右之裏」

諸人のすゝみなれたる月のもと

久充

ならず扇にいつも追む

舞殿好翻袖うら

后宮屢彈琵琶

待君終夜淚

たゆるおもひのまはら歌つ

物やミもおこたる折に成けらし

あひみそめにし身は無爲

松續子孫翠

時もすなほに國ぞ治る

御一

家久

嶺南

宗佐

玄碩

貞昌

元綱

久充

重長

貞昌

玄碩

頼景

家

元綱

政徳

嶺

重長

一句

十一句

十一句

四

十

十

十一

八

重長

頼景

宗臺

政徳

執筆

二三 二三 二三

□ □ □

二三 二三 二三

二三 二三 二三

一

十

九

九

五

一

947 「正文在大山平七」

雪の、や花に分入袂かな

月さえ残る道のや□らひ

春近くなるかと鴈のこゑハして

すたれをまけは静なる空

露おもきみきりの竹のうちなひき

霧吹なかつすゑの河風

江を遠ミ船さし留る秋の暮

山のかたへに鐘ひ、くなり

歸りぬる木こりの袖やいそくらむ「本マ、」

残る日かりのかすか成かけ

家久

重長

久晴

利昌

祐辰

尙演

久元

元綱

立頼

家久

「口切ル、」
「正文在石神十郎兵衛」

白雪はかつくくにも消残り

今朝までの鹿の子かる野ハはるかにて

ふむとも見えす茂る草く

柴橋ハ跡たらしくになりけらし

ふりつゝきたるなか雨のころ

引むすふ楨の戸ほそハ絶かたみ

つれなきを待たくれの袖

身にしめてたのむつかひハいわけなし

更行月をしたふうたゝね

あかなくも秋のはしめにましわりて

たひくふしも汲る□つき

さく花を尋ぬる□遠□や

駒をすゝ□ていそく□の

手放せる朝鷹□の野□廣□

□はれ行かたはしつけし□

重長

久晴

利昌

祐辰

家久

□

久晴

家久

祐辰

利昌

元綱

久元

重長

久晴

はらふもあはれ袖のお地髪

身は如何に戀のやつれをしのはまし

御杖にまさるおもひなにも

鈴鹿路を分る名残のあさからて

暮かゝりたる山かせのすゑ

いさゆふや松の葉わけの月ならん

霧まよひぬる遠かたのそら

衣うつをとにしらるゝ里つゝき

我ならてまた人や待らむ

うかれ女のあた成はたゝならひにて

市の假屋に立ぞ馴ぬる

こり出る眞柴のミちの程ちかミ

幾かへりとかさし渡しふね

爰かしこ里よりさとや廣からん

こゝらしは啼夕つけのこゑ

相坂の關をいまはた越過て

袖に觸ぬる志賀の山風

久洪

重國

重位

惟貞

祐辰

久徳

久賀

重位

忠通

久慶

利昌

忠清

重位

久賀

重國

久法

久慶

あへすしもうつろふ花の色はおし

忠通

暮行春をいかに留めん

惟貞

八重に立雲に名残の鴈の聲

久徳

明わたりたる田つらはるけし

重位

家久一句

久徳九

久慶九

重位十三

久賀九

祐辰六

重國九

利昌六

忠通十二

久篤一

久洪十

惟貞八

忠清七

「正文在肝付甚兵衛」

賦何道連歌

かめにさす菊は仙人の住家哉

家久

千とせの松の秋風の音

重長

晴わたる雲間に月のほのめきて

祐辰

いくつらならしおつるかりかね

利昌

おく廣き田面のすゑや續くらん

貞親

なかれもはやき波の海はら

家久

さしくたす舟は見るく遠さかり

重長

浦のあらしの吹出るところ

祐辰

そことしもわかぬ夕の鐘の聲

利昌

旅のやとりをもとめぬる袖

家久

越しかたの山路の雪や深からん

重長

ふす猪の床ハ爰にかしこに

貞親

荒小田はかよふ人けも稀にして

利昌

置露ふかき月のあハれさ

家久

長き夜をめ覺かちにや明すらん

祐辰

袖冷ましくおもふかね言

重長

馴ても秋になりたるうかれ妻

家久

浪路はるかにへたて行舟

利昌

俄にも山の嵐やすきむらん

貞親

さしもやられぬ柴の戸の内

祐辰

色も香も花の籬はたえかたミ

家久

小蝶のねたる露の朝床

重長

950 「正文在伊地知藏之丞」

ことの葉もにほふや花の

「本マ、シ」
家

石の辨

なをさりならぬ庭の夏山

巻あくる簾に月の影見えて

翅ならふる鴈の一つら

紹嘉
貞守
家久

951 「正文全上」

青白畫松雪

山もと水のさむき漪

秋更るなかれの月に舟うけて

霧晴江色寄

千林楓似錦

萬里杏招厄

人つとふ宿は(九五二号)
「あつまれる袖は」霞に明はて、

いつるひかりの長閑なる比

▽
○
△
村鳥や聲する方にあさるらん

貞 家 春 安 爲 尙 忠 重 利

かよひ馴にし竹のした達

誓深連理契

恩厚合歡嬉

かしこきや國のたすけと成ぬらん

道しある世につかへぬる時

九重のうちなをつとふこし車

舜日政熙と

十雨帶風靜

殘秋涉苑躑

吟身飄冷袖

月にたハふれ情くミ知

歸るさを忘暮しつ花のもと

不絶砌黃鸝

▽
○
△
春景誘遊窮

友もしたしくよむ歌ハ誰

つくりそへてけふ祝言の折ならし

はこふミつきのたえぬ差

久 安 貞 春 家 爲 尙 安 貞 忠 重 尙 爲 利 久 祐

しつかなる波に出入湊ふね
 ミつしほはやく月そ移ろふ
 物換秋將暮
 渾濛霧蓋涯
 豈量天地理
 只察古今治
 おこたらす廻るハかりの使にて
 廣きかたへの野へのミち芝
 行人鞋狻倦
 老妾釵頭衰
 ウッ
 ミるにさへ鏡のかけハはつかしミ
 立よるも又いさきよき池
 岩たゝむ砌の瀧のなかれいて
 よとめるかたは水そ漸れる
 鴛恨朝陽薄
 虫添秋夜悲
 里くぐに更て擣ぬるあさ衣

春 家 安 貞 尙 爲 忠 重 貞 安 利 久 家 春 爲 貞 祐

愛月獨眠遲
 深隱避塵慮
 をしへの道をしたふ法の師
 ともし火のつねにみえぬる寺のうち
 生松琴韻颯
 花前春興滿
 梅下暗香隨
 三
 またきより開く朝戸の年越て
 ふりもたまらぬあは雪の堀
 召霽青山近
 初秋紅暑遺
 天邊新鴈叫

尙 安 忠 重 爲 貞 安 久 利 尙 貞 爲 光久 家久 貞昌

952 「正文在伊地知藏之丞」

松雪宿花鶴
 春まつ峯に月いつる空
 越ゆかん冬の山路の雲晴て

植節吟景濃

安心

雲林秋氣爽

「本ノマ、」

村涯流水潔

尙純

ミるかうちよりはるゝうす霧

久元

浦外彩霞汎

爲善

二
流いつる水上とをく明過て

忠張

あさな／＼ミす捲袖ハのとかなり

久元

わたせる舟の綱手をう拍

久春

梅のほひをさそひくる風

忠張

市人歸路急

尙純

こゝろをもあらためたる年越て

久春

國相正朝功

爲善

幾久しさもいわふ老か躬

重將

徳盛鳳將降

安心

るひ廣くさかふる人やたゝならん

祐昌

はこふミつきのゆき、忠しき

祐昌

いて入しけき興津うら鱸

利昌

道のへにたてる車の數おほみ

重將

鴉使掉歌駭

安心

つとふ物見はたえぬ大宮

家久

鯉教書信通

貞昌

庭火焼ひかりはこゝにかしこにて

利昌

誠敦尤感范

爲善

夜蘭祭已終

貞昌

奢譽益〇情崇

尙純

すみのほる月の行衛やしたふらん

光久

おろかなる身をしる罪やいかならん

家久

秋色顯山嵩

尙純

法のをしへの寺の缸

光久

唧と草頭蟀

爲善

經卷對宵永

貞昌

呬と芦底鳴

安心

管絃然月濛

安心

いかはかり眞砂のミちのとをからん

久元

やとりをいそぎいつる囃ほの

とりあへず酌さかつきの名残あれや

臨別歎無窮

拂又淚痕滿

難面もたゝおもはるる中

つもりぬるうらミをいつか語らまし

さすらふ袖にをく露の玳

月寄謫居思

ひとり秋行旅「本ノマ、」そ仲る

わかれつゝ跡に物おもふ比なれや

隔雲西復東

尋花忘世慮

種抑愛天工

驚のミきりをちかミ聲そへて

さかきにつゝく里豊なり

なひきあふ水の烟の立のほり

奢擧益憎崇

忠張

久春

爲善

貞昌

重將

家久

利昌

尙純

光久

祐昌

貞昌

安心

爲善

忠張

久元

重將

尙純

おろかなる身をしる罪やいかならん

程ふりつゝもむをそ忠まふ

けちめなく國のゆくゑハ治りて

民抔樂秋豊

酌月村と酒

953 「正文在伊地知藏之丞」

倭漢之誹諧

驚のなこやかになく初音哉

林暖好遊申

永日興存外

みるにおとろく空のかミなり

可恐松木下

つねに聞ぬる所冷まし

秋霜龜足往

夜月曩頭巡

長旅にひへの入「本マ、」者大事なり

家久

久元

忠張

安心

貞昌

家久

貞〇昌昌

爲善

光久

安心

久元

貞昌

爲善

利昌

かうそさんをハたえず嗜む

醫道者の大きんちやくハミちなれや

顧吾伊達倫

亂時何様働

飛車かくきやうをつかひこそすれ

左右懸王手

立入事のしけききん中

諸國よりおさまるミつき夢^{「マ、」}あへて

響看戲月人^{「マ、」}

江を遠ミかさぬる酒の秋のふね

鼈傳笛聲頻

聞樂心成蕩

はれやかなりし御座のよそほひ

霞ぬる瓊物やたゝつとふらん

目出度唯春

祝只賞餅汁

上戸ともこそおこす述懐

重頼

家久

貞昌

爲善

光久

貞昌

利昌

重頼

安心

久元

爲善

貞昌

重頼

利昌

爲善

貞昌

光久

度く喧嘩すること咲しけれ

ものをもしらぬ人のよりあひ

唐南蠻界姦^{「本マ、」}

長^{「本マ、」}崎^{「本マ、」}船集津

綾にしきひらうとしらかの参るらん

堪羨福盈隣

まつしきハ身の程を□引かまへ

茶うすはかりの數寄のよそほひ

月にたゝ石をきりぬる江戸のはゝ

身にしめつゝも普請する人

樂寧奈草臥^ウ

老のあはれにのほる一坂

箱根患視足^{要「本マ、」}

橋なき川を渡るくやしき

さどのはうよく杖にすかるらん

童子ともものなふる咲しき

利昌

重頼

爲善

貞昌

光久

安心

久元

家久

光久

重頼

貞昌

利昌

爲善

重頼

光久

忠直

955

「正文在藤井孝左衛門」

正月十一日

家久

改年之吉兆幸甚と、仍爲此等之祝儀、五明貳本・眞羽一尻
杉原十帖到來、喜悅之至候、猶永日中嘉祥可申加候、恐
と謹言、

954

「正文在伊地知藏之丞」

念の入たる冬のふるまひ
能のよき鷹ハ鳥をや取ぬらん
天下太平晨

利昌
重頼
蠅妙
貞昌
爲善
家久
利昌

練者謀無極
亡敵喜歸陣

爲善
貞昌

七月のおとりの庭の人おほミ
はやり小歌の袖はうろひ「本マ、」
はく「く」

家久
利昌

956

（本文書八九五一号文書ノ一部ト同文ニツキ省略ス）

「短冊」
風によふねさめの袖の花の香に
かほるまくらの春の夜の夢

957

「家久公御譜年間不知冊中」

「家久墨蹟臨寫集序」

夫書者六藝之一、而自天子以至於庶人無不學也、古人曰、
書文字如攻城、以心爲元帥、以氣爲副帥、以意爲馬、以
左右手足指腕股腿爲士卒、以筆爲矛、以龍硯象管豹囊筆
架界方類爲器械、以机案爲城池、以蔡帑剡藤爲戰場、而
元帥心對机案城池、湛然不動、降命於氣帥、氣帥領令淬
筆鋒於墨水、馳意馬於帑場、指揮手足士卒、而一時盡筋
力、衝突拘曳勤濯縱橫峻疾遲澀一舉而成功、當措筆期、
如捷軍奏凱、楮國立平治、是草書之妙、而文字形勢有似
騰蛟起鳳古松藤羅人獸金玉者、其變態不可極、於是萬物
完備而如國用充足、相似爲書之道、如斯則韜畧亦不在于

茲乎哉、爲武將者講武之餘暇、必可使心游此藝也、是以
吾 中納言家久者、自成童志此道、師照高院如雪親王、
而學草書及倭字之筆法、文祿年間師於朝鮮國、在于泗川
新寨之日、有脫戰袍之暇、則雖夜挑燈帷幄之下、而時習
之、遂得能書之名、后學 近衛三貌院之筆痕、踵又作一
家、平素乘輿而所揮毫之詩箋畫贊倭歌短冊等、士大夫之
家傳以所笥藏者、今盡臨之爲二卷、名之、曰家久墨蹟臨
寫集、以備辨眞鷹之照鑒、云爾、
寶永五祀龍集屠維赤奮若、南呂吉辰、

958 「正文在田中五右衛門」

御文跡肝をつふ□我事□御座ま□具候、御かくし候
はんならハ、志くミ可申候、但まことに候哉、菟角心
實に御ほれ候と又かくし候ハんどの御狀、誓詞奉待存候、
かしく、

959 先日ハ御たつねのよし、晝寤を仕候て御歸之由、何とて

御おこし候ハす候哉、無御情候、ひまならハ夜をかけて
まち申候く、かしく、

960 何とて此中ハ御ふミも不被下候哉、八幡くいな人にて
候、かしく、

961 ひとひ申候ことく、ふつつともはや此程いやと申候ニ、
輪廻したる御文あさましく候、文を給候共御返事も申間
敷候、其分御心得なるへく候、かしく、

962 内く如申候、いかに御申候共、知音ハいやにて候、あら
くはなし可申候、かやうに申候へハ、此みちの傾城と
御申候て、御惡口のよし、さやうに御申候共、貴殿一人
にからまされ候てハ、いやく心實を見付候人にはなし
申度候、身を捨候共、久からぬ夢の世にて候、かしく、

963 唯一人ふせりい申候、徒然さ中くにて候、はやく待

申候、語申度事むねかいたく候、何とてそなた是程あひ

くちにて候也、吾なからいな事候へく候、かしく、

「右ノ如キ宛モナク月日御名モナキ御文多シ略ス」

964

「正文在島津兵庫久住家臣新納仲左衛門」

「短尺」

先ほどは
ひとしき傳 ミぬ色のさそな砌の花さかり

聞すてかたく 春にをくれぬ音つれそ待 家久

一首

「短尺」
ちりうせぬ紅葉やかさし歸るさの

袖待えたる錦成らむ 家久

「短尺」

としくにかはらぬ色を冬の森の

霜 うへに置そふ庭の朝霜 家久

「在包紙」

仲左衛門尉殿

「正文在川上式部久重」

くれ竹の色もかはらて瑞籬の

久しき世より緑なるかな

「正文在福島玄佐」

かしこきも住てふ奥のその、竹

鳥もねくらやふしよかるらん

「正文在隅州山田土中馬軍兵衛」

家久

たにふかき梅のこすゑも春をまつ

心とすあるさかり成けり

晴くもる雪けの空もさえくくて

ことふきや猶そふるさかつき

昨日めいてひのあまりに一首をくり申候、かしく、

965

「正文在加治木本誓寺」

「短尺」

昨日ハ花いれ送り 月雪のあかなき色も忘れしの

給ひ候まゝ一首

雲与老人 こゝろのはなをかさしてや見む

「短尺」

身にしめる法の教のあはれてふ

さなから驚のミ山成けり 家久

扱此短册ハ、往年そこの國の名大主家久公御ミつからの御哥、御ミつからの御筆ニテ、聖人運譽に饋り給りぬと、予若年の砌在し人のよりくかたれりけるを聞侍りし、彼秦の皇儒を埋ミしにも、詩のミ人の唱え傳えて世に残り侍りとかや、それハ人の此中にと、まる、是ハ愚耳底に收覺え淺からず、秘してむそちひとつの今まで侍し、爰に予嬉しく思ひ侍るハ、かゝる物うらミの境に長く「本マ、」しく、六十餘れるまでなからへ侍るを恨にのミそおもひ侍ける、爰に何哉らんかやらん、もしほ草哉らん、書あつめたる物を、つくく見おりにけれハ、咲きこそきゆとも消め、露の間もあな浦山し朝顔の華、予かことく、花咲ぬ身のなからへこそあやなき事なれと、思ひおれりけるに、此たひ鷺のミ山と詠給ひし御ことのはを、靈鷲院に納侍る事、是ひとつ予長生の徳ぞと、初てよろこひの眉毛をゆるかし侍るものなり、予きのふにもミまかり侍らハ、誰の人か此御ことの葉を貴院に送りまいらせむ、あな嬉しく、ときに寛文十三のとし弥生中の七日なら

し、

宗清寺
〇(花押)
一譽(判)

本誓寺靈鷲院

樂譽大和尚様

「本ノマ、」
ふもなく候、かしく、

966 「正文在田中五右衛門」

いまから千日千夜御かよひ候ハ、かならずく同心可申候、さやうに候ハすはいやく、かしく、

「右ヤウ宛カキ月日なき同ヤウノ文数拾通 皆田中五右衛門ニ在トアリ、略ス」

〔表紙〕

光久公 年間不詳

附 錄 舊 記 雜 錄 卷 廿 四

967

〔十二番箱四拾卷中〕

今度爲御移徙御祝儀、御衣桁一竿、御膳之具一組、并綿三百把被差上之候、目錄之通遂披露候處、念之入候段、被思召御機嫌候、此由可相傳之旨、依上意如此候、恐々謹言、

阿部豊後守

四月十三日

松平薩摩守殿

忠秋〔判〕
◎〔花押〕

968

『御文庫拾貳番箱四拾卷中』

爲 上使以水野藤右衛門、御鷹之鶴被遣之候、仰之趣委細可爲演說候、恐々謹言、

十月三日

阿部對馬守

重次〔花押 259〕

松平薩摩守殿

阿部豊後守

忠秋〔花押 260〕

松平薩摩守殿

阿部豊後守

阿部對馬守

969

『御文庫拾貳番箱中』

〔本文書八九七号文書ト同文ニツキ省略ス〕

「御文庫拾貳番箱中」

(本文番八九〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

「御文庫拾二番箱中」

今度就 臺徳院様御遠忌、輕罪之族被成御赦免候、然者於國々在く所々、存此趣可放免旨、被 仰出候、可被得其意候、恐々謹言、

正月廿四日

阿部對馬守 ◎〔花押〕
重次〔判〕

阿部豊後守 ◎〔花押〕
忠秋〔判〕

松平伊豆守 ◎〔花押〕
信綱〔判〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

阿部對馬守

「寛永九年台徳公薨ストアリ」

「御文庫拾二番箱中」

御札致拜見候、松平下總守死去之儀、其元相達、公方様御機嫌之御様躰就無御心元、被差越使者候、念之入候段達 上聞候、恐々謹言、

六月九日

阿部豊後守 ◎〔花押〕
忠秋〔判〕

松平伊豆守 ◎〔花押〕
信綱〔判〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

「御文庫拾二番箱中」

大炊頭就相果申候、誓願寺へ御參詣、殊更香奠御持參、忝奉存候、併何方へも御斷申入付、返進仕候、病中御尋、相果申候刻も、御光儀過分至極奉存候、忌明罷出候節、以參上御禮可申上候、恐惶謹言、

七月廿日

利隆◎(花押)
[判]

(本文書ハ「旧記雜録後編五」二五三号文書ト同文ナリ)



松平薩摩守様

人々御中

利隆

土井遠江守

975 「御文庫十二番箱三拾九卷中」

974 「御文庫拾二番箱三拾九卷中」

猶以琉球之鶉之義、被仰遣候間、頓而可參之由、奉

得其意候、

尊書致拜見候、然者、内々御當地ニ而被仰候唐之白鷄一

番并硫黄・蜜漬之壺、被成御進上候、松平伊豆守被遂披

露候、私儀も御前有合承候處、一段◎(爾字)御機嫌被思召御仕

合共御座候、右之鷄當年も子をはやし申候へ共、子をハ

其元ニ御置被成候由、是又達 御耳候、委曲各方可被申

入候間、不能一二候、恐惶謹言、

八月廿三日

酒井讚岐守◎(花押)
忠勝[判]

松平薩摩守様

尊報

一筆致啓上候、然者姫君様御祝言廿一日、天氣迄能相濟
申候間、御心安可被思召候、依之爲御祝儀、御有三種并
諸白梅二荷被贈下候、寔以御懇意之段、忝奉存候、委曲
嶋津中務殿可被申達候間不能一二候、恐惶謹言、

九月晦日

酒井讚岐守◎(花押)
忠勝[判]

松平薩摩守様

人々御中

976 「御文庫拾二番箱四拾卷中」

昨日火事之砌、増上寺江出家來候儀、被聞召、御機嫌之

御事候、此由可相傳旨、依 上意如此候、恐々謹言、

二月朔日

阿部對馬守◎(花押)
重次[判]

阿部豊後守[◎]〔花押〕
忠秋〔判〕

松平薩摩守殿

977 其方分國牧馬二疋^{鹿毛} 被差上之候、遂披露候之處、思召

御機嫌候、此由可相傳之旨、依 上意如此候、恐々謹言、

六月廿四日

忠秋[◎]〔花押〕

阿部豊後守

忠秋

松平薩摩守殿

978 「御文庫拾二番箱四拾一卷中」

御札令拜見候、

公方様御氣色之御様子被承度付、被差越使者候、一段御

機嫌能被成御座候間、可御心安候、然者、琉球縮布并御

肴・泡盛被差上之候、遂披露候處、念之入候段、御満足

被思召候、猶使者可令演說候、恐々謹言、

八月廿日

阿部豊後守[◎]〔花押〕
忠秋〔判〕

松平薩摩守殿

979 「御文庫拾二番箱四拾一卷中」

御使殊更琉球酒一壺遠路被下置、誠以忝奉存候、公方

様頃者、別而御機嫌能被爲成御座候、先書申上候、其以

後も御數奇御座候而、細河三齋・松平肥前殿・立花立齋

・酒井讚岐殿御茶被下候付、旁以御心安可思召候、其元

御無事ニ被成御座候由、乍恐目出度奉存候、自然此表似

合敷御用等御座候者、可被仰付候、恐惶謹言、

霜月十八日

永井監物[◎]〔花押〕

松平薩州様

人々御中

980 「十二番箱四十一卷中」

爲歲暮之御祝儀、御小袖五并御破魔弓、目錄之通被獻之候、遂披露候之處、御機嫌能御座候、恐々謹言、

十二月廿九日

阿部豊後守 ◎〔花押〕
忠秋〔判〕

松平和泉守 ◎〔花押〕
乘壽〔判〕
「シレス」

松平薩摩守殿

981 「御文庫拾二番箱四拾卷中」

御札令拜見候、今度仕合能御暇被遣之忝之旨、得其意存候、海陸無事に國元被相着之由珍重候、示預之趣、達上聞候之處、早々念入候段、御機嫌之御事候、恐々謹言、

七月十六日

阿部對馬守 ◎〔花押〕
重次〔判〕

阿部豊後守 ◎〔花押〕
忠秋〔判〕

松平伊豆守 ◎〔花押〕
信綱〔判〕

松平薩摩守殿

982 今度仕合能被遣御暇、道中無事到于國元依被相着、使者并端子廿卷・琉球酒二樽・御肴、被差上之候、右之趣達上聞候之處、早々念之入候通、被思召御機嫌候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

七月廿五日

阿部對馬守 ◎〔花押〕
重次〔判〕

阿部豊後守 ◎〔花押〕
忠秋〔判〕

松平伊豆守 ◎〔花押〕
信綱〔判〕

松平薩摩守殿

▽ ◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

阿部對馬守

△

983 「御文庫拾二番箱卅九卷中」

尙々今度被仰付候船、五百石方上之舟候ハ、早々

御取崩可被成候由、讚岐守殿被仰候付、左様ニ御心

得可被成候、右之儀、御公儀沙汰ニテハ無御座候旨、

讚岐守殿被仰候間、御心安可被思召候、以上、

一書致啓上候、先以當御地弥相替儀無御座候間、御心安

可被思召候、然者酒井讚岐守殿被仰聞候者、今度於其元

船數多御作り被成候由、相聞申候、若御法度方大キ成船

御作り候ハ、早々御取崩可被成候、御定之通之船共御

座候者、不苦候間、其儘御置可被成候、最早只今迄出來

之外、船御作り候儀、御無用ニ可被成候、來春御參勤之

時分、御老中へ御内談候て、其以後御用候ハ、船御作り

可被成候、右之談御公儀沙汰ニ而ハ無御座之由、讚岐守

殿被仰候間、左様ニ御心得可被成候、此儀御隱密可被成

候、猶期後慶之時候、恐惶謹言、

九月六日

松平河内守

定頼 (花押35)

松平薩摩守様

人々御中

984 「御文庫拾二番箱三拾九卷中」

一筆致啓上候、然者同名備後守嫡子誕生仕候爲御祝儀、

御着三種并諸白兩樽、如目錄被贈下候、誠御懇意之段、

忝奉存候、尙期後音之時候、恐惶謹言、

五月十五日

酒井讚岐守

忠勝 (花押)

松平薩摩守様

人々御中

松平薩摩守様

尊報

酒井讚岐守

忠勝

985 尊書致拜見候、仍同名備後守嫡子誕生仕候付、三種二荷

如目錄被贈下候、誠以遠路之處、御懇意之段忝奉存候、

猶期後音之時候、恐惶謹言、

七月廿日

酒井讚岐守

忠勝 (花押)

松平薩摩守様

尊報

「御文庫拾二番箱四拾卷中」

進上之琉球竊遂披露候處、念之入候段、御機嫌被思召候、
此由可相傳之旨 上意候、將又、彼鶯雌雄見知候人、爰
元ニ不有之間、國元へ被申遣、重而可有言上候由、示預
候、不及其儀候間御無用候、恐と謹言、

九月十三日

忠秋〔判〕
◎〔花押〕

阿部豊後守

忠秋〔花押260〕

松平薩摩守殿

返と、院御所さま一たんと御きけんよく御ほんふく
あそはし候ま、御心やすく覺しめし候てめてたくか
しく、

松平薩摩守殿
阿部豊後守
忠秋
人と御中
異國之大船、奥州并九州筋漂海上之由、從其所と注進候、
然者、重而者揚陸地事可有之候、度と如被 仰出、弥領
内浦と入念、常と可申付之旨、上意候、被存其趣、自然
陸地江上候者、相捕之様子可被申上候、恐と謹言、

十月廿日

阿部對馬守
重次〔花押259〕

院御所さま御しゆもちニつき、わきと御ししやしん上候、
此よしひろう申あけ候へは、御きけんの事候ておはしま
し候、院御所さま御しゆもち、はやく御へいゆふあそ
はされ、一たんと御きけんよく御ほんふくあそはされ候
ま、御心やすく覺しめし候やうに申せとの御事ニてお
ハしまし候、御ねん入御ししや御しん上候とて、御きけ
んの御事ニて、よく心え候て申せとの御事ニておハしま
し候、めてたくかしく、

權大なこん

より

松平

さつまの守殿

まいる
申給へ

989

猶以今日御登城之儀、必御無用ニ可被成候、御紙面

之趣可申上候間、御心易可被思召候、以上、

尊書致拜見候、然者今日於御本丸、御能就 仰付可被致

登城之旨被仰出候付、爲御禮昨日被成御出仕候由奉得其

意候、然共此中少被成御煩候故、ひたひ者御そり不被成

候而も不苦候哉と、土大炊方へ被得御内意候處、今日者

先く御宿ニ御座候而被成御養生可然之旨被申入之由尤ニ

奉存候、御紙面之趣具ニ可達 上聞候間、緩くと御養生

可被成候、委曲面上之節可得尊意候間不能具候、恐惶謹

言、

九月十二日

忠勝 (花押 289)

酒井讚岐守

薩摩守様

尊報

忠勝

990 御札令拜見候、今度伊東大和守・秋月長門守領内之沖ニ、

吳國船二艘漂泊之後、其方領分於岸良之海上、石火矢少

と放之、行衛も不知候由、委細示預之趣、達上聞候、入

念注進之段、御機嫌に被思召候、恐々謹言、

十一月朔日

阿部對馬守

重次 (花押 259)

阿部豊後守

忠秋 (花押 260)

松平薩摩守殿

991 「御文庫拾五番箱七拾九卷中」

一筆令啓達候、公方様弥御機嫌能被成御座候間毎日子

登城無用之由被 仰出候、可被得其意候、御病後候之間、

明日之御目見も御座有間敷候、恐々謹言、

六月十四日

信綱 (花押)

「宛切ル」

松平伊豆守

992

於公家相應之事候者可承候、匂袋三調合候間送候也、
遙久絶書信疎遠之事候、度と上洛候處、無對面遺恨候、
其邊弥以靜謐候哉、雖無指事候、幸便之條令啓候也、

六月廿五日

(花押284)

松平薩州

993

「御文庫拾五番箱七拾九卷中」

仙洞御腫物之事、弥以御平癒候、公家之大慶可有推量候、
書裏之趣以御次可申入候、可心易候、兼又單五・帷五・
大刀一腰・馬代黄金拾兩、令祝着候、猶使者可有口上候
也、

五月十二日

(花押284)

薩州拾遺
(侍從)

(本文書ハ「旧記雜録附録」二七六号文書ト同文ナリ)

994

「御文庫拾二番箱三十八卷中」

猶以又十郎殿へも別紙を以可申入候へ共、乍慮外御
同前ニ申進之候、以上、

一書致啓上候、來ル八日之晝、於園御茶進上申度之由、
申入候處ニ、御出可被成之通一段忝存候、又十郎殿御同
道被遊、必奉待候、先爲御禮捧一書候、恐惶謹言、

八月三日

祐慶(花押266)

伊東修理太夫



嶋津又三郎様

人々御中

祐慶

995

「御文庫廿一番箱五拾五卷中」

上御屋敷水繩覺
表御門之方

一御屋地ヨリ馬場地

壹尺六寸下り

一御屋地ヨリ長屋地

三寸下り

裏御門之方

一 御屋地ヨリ馬場地

貳尺貳寸下り

一 御屋地ヨリ長屋地

三寸下り

一 鍋嶋孫平太殿屋敷

此方御屋敷地ヨリ三尺程相下り候、大跡見及申候、

一 御屋地壹尺七八寸堀候得者水出申候、

八月十二日

996

「御文庫廿一番箱五拾五卷中」

一 松平肥前守殿御隠居ニ付而御知行割之事

一 高八十萬石 筑前守殿

一 高廿萬石 御隠居分

一 高二萬五千石 淡路守殿

一 高七千石 飛彈守殿

御城御作事御手傳

水戸様

伊井掃部殿

松平隱岐守殿

同名越中守殿

同名美作守殿

同名能登守殿

青山大藏殿

内藤伊賀守殿

本多下總守殿

岡部美濃守殿

木下淡路守殿

松平主殿助殿

織田左衛門佐殿

右之外御小身之衆餘多御座候、

一 御城なをり、石垣惣別東堂大學頭殿被爲望候、

一 道三之跡四ニ被爲成候、御息被相繼候、

一高五萬石水戸右京様、是者松平中書殿御息女ニ御縁組

松平陸奥守殿

ニ而、加茂之家御繼被成由候、

一角石五十

御加増取之衆

一角脇五十

一高壹萬石

朽木民部少殿

一平石二百

一高千五百石

齋藤攝津守殿

一くり石二百坪

御加増千六百石

中根壹岐守殿

松平伊與守殿

一高千二百石

加増三千石

一材木一萬本

一高七百石

小出越中守殿

松平土佐守殿

加増二千六百石

安西甚兵衛殿

一松板千枚

加増千三百石

今度御普請ニ付而之御進物

相良壹岐守殿

一材木一萬本

尾州大納言様

一角石十

一赤かね貳萬貫目

一緑青二千斤

一角脇十

一漆五百貫目

一間似合千間分

一平石五百

尾州大納言様

松平長門守殿

一角石十五

松平長門守殿

尾州大納言様

松平長門守殿

松平長門守殿

尾州大納言様

松平長門守殿

一角石十五

松平長門守殿

一角脇十五

一鐵一萬貫目

松平安藝守殿

一鐵貳萬貫目

毛利内記殿

997 「御文庫三番箱八卷中光久公」

一端午之祝儀云々 五月三日「全前」「墨印」 五通

薩摩少將殿宛

一重陽之祝儀云々 九月七日「同墨印」 五通

同斷

一歳暮之祝儀云々 十二月廿七日「同墨印」 三通

同斷

一端午云々 同斷 拾壹通

薩摩中將殿宛

一重陽云々 同斷 拾壹通

同斷

一歳暮云々 同斷 拾壹通

同斷

「右同文同印同宛故略ス」

一端午之祝儀云々 五月三日「墨印」「全上」 拾三通

薩摩少將殿宛

一重陽嘉祝云々 九月七日 同斷 拾四通

同斷

一歳暮之祝詞云々 十二月廿七日 同斷 拾四通

同斷

「右三行全文略ス」

998 「御文庫三番箱六卷中」

猶以使者不上ニ付、從江戸之狀、庄内ニ一度、船中

ニ一度來着候へとも、最早國許立候て、以後之到來

ニて候間、致すへきやうも無之候故、中途より使者

進上候て補躰ニ候、不依此儀、何篇國之噺等も如此

大形ニてハ咲止たるへく候處、得與可申候間、能々

被入念候やうにと存、申下事候、以上、

態以一筆申下候、仍當年我等在國にて致越年候間、江戸

へ年始之使者可致進上之由、各へ申渡候之處、入間敷と

談合仕候由、被申候て相止候、就其、江戸之仕合無調法

ニ可罷成與、爰許之衆茂存仕、惡仕合候由申候、笑止千

萬候、漸跡ニ成候て、自中途申上候筈者、不合儀ニ候へ

とも、兎ニ角與事濟候、是者調りたるにてハ無之候、先

年茂嶋津大和・嶋津左近將監など、年頭之使ニ爲被參儀

候之處、畢竟其許老中之談合不相達、越度ニ存候、自今

以後、堅被書付置候て、公儀方之時宜、聊不關やうに可

被申付候、少茂不可有油斷候、爲其如此候、謹言、

三月廿六日

光久〔花押〕
御判

北郷佐渡守殿

嶋津筑前守殿

山田民部少輔殿

北郷佐渡守殿

▽◎

嶋津筑前守殿 光久

山田民部少輔殿

7

△

999 「御記録所御文書御朱印享」

川邊山目通 上様

被爲在思召候、永く支配拜領被申付候、仍而如件、

三原左衛門印

寛文二年寅十一月 町田監物印

酒匂長兵衛殿江

1000 「御文庫三番箱六卷中」

國中支配近日可致首尾之由、被申越之段相達、令祝着

候、乍大儀萬端入念急度埒明候様ニ可被申付事、專要候、

猶藏人可述候也、

卯月廿九日

光久〔花押〕
御判

嶋津筑前〔久頼〕殿

新納右衛門(久松)ら

嶋津筑前ら

新納右衛門ら

光久

〔本文書ハ「旧記雜錄邊録」一八三四号文書ト同文ナリ〕

1001 「御文庫三番箱六卷中」

先刻者御見廻忝候、久々ニ而得御意本望存候、別而御氣色も能御達者御座候而目出度存候、何様心静可申承候間、萬々期其節入候、恐惶謹言、

三月廿五日

光久(花押)判

松平薩摩

永井監物様

人々御中

光久

1002 一筆令啓達候、然者明廿六日、弥各申請候間、貴様御氣

色於御快氣者、朝六時分より御出待入可申候、爲御案内如此御座候、恐惶謹言、

三月廿五日

光久(花押)判

松平大隅守

酒井伊豫守様

人々御中

光久

1003 「御文庫三番箱六卷中」

猶以有馬表之儀、如何相濟候哉、承度候、其元御家老衆方大隅守所へも御注進候、承付たる由申候て、此方御年寄衆へも以早打申入候、新儀共候ハ、弥御隣方之儀ニ候間、可被仰通儀頼入候、以上、

今度者俄ニ御暇出申、御國へ御下向御満足察入候、誠目出度存候、此等之段爲可申入用使札候、仍御太刀一腰・馬代黄金一枚、小袖十令進入候、聊表御祝儀計候、恐惶

謹言、

松平薩摩守

霜月廿五日

光久〔花押〕

細川肥後守様

人々御中

〔本文書ハ「日記雜錄後編五」二二六号文書ト同文ナリ〕

1004

〔御文庫三番箱六卷中〕

昨日午之刻、飯嶋之沖ニ大船見得候、申之刻天草げすの前を通り候、帆柱餘多見得申候、當領分出水浦遠見番之者見申候由、只今亥之下刻ニ申來候、定而おらんたにても可有之候へ共、先承懸御注進申入候、相替儀共候ハ、互可得御意候、恐惶謹言、

六月五日

松平薩摩守〔花押〕

光久〔判〕

高力攝津守様

人々御中

1005

〔御文庫三番箱六箱中〕

以上

用一筆候、本田仲左衛門尉儀、於評定所隱密之儀承付申

出候、然者手の惡なと候より巨細之儀者被差置、先題目

老中衆被承候儀を、誰人之口より仲左衛門尉承候處を、

肝要ニ被致穿鑿被相究候而、可被申上候、岩切彦兵衛付、

其外之衆との間之往來之儀者、かまひ有ましく候、評定

所之儀洩候事、いかさま申付可有之候間、云口を仲左衛

門尉有様可申出候、自然押隠し於不申者、曲事之旨可被

申付候、右之穿鑿最被仕、於不相達者、老中之内方仲

左衛門尉へ注進被仕候覽と可存候、左様可有心得候、謹

言、

十二月三日

光久〔花押〕

北郷佐渡守殿

穎娃左馬守殿

山田民部少輔殿

北郷佐渡守殿

穎娃左馬守殿

山田民部少輔殿

光久

1006 已上

其方之義、雖爲豐州懷之養子、少知行之故、當時者其方爲私分、別ニ知行不相分之由、聞及候之間、黃門様へ伺御意、我等藏入之内五百斛進之候、田坪字等別紙有之、雖爲少分先可有領知候也、恐々謹言、

七月十九日

光久(花押314)

(島津忠廣・市正)
寶壽院

(本文書ハ「旧記雜録後編五」八四三号文書ト同文ナリ)

1007 八月十五夜 光久

雲開景好廣寒棲 倒醉嫦娥三五秋
謾向晴空投寶鏡 奪光令得世間遊

九月十三夜

聞說哦詩九月天 嫦娥孤棲正堪眠
粧成玉匣開新鏡 剩見今宵冷眼筵

1008 猶々代官致すものとも念を入られ、無調法之者於有

之者、被替御尤候、以上、

其許之儀、去秋之耕作、例年より茂物成出來之由、被申越、仕合候事候、弥以念を入られ、此中之いかたに相替候ても、可然儀者、無口能被改候、將又配當之儀、度々被申越候、重而尋ニ不及候間、早々被取付候て可然候、爲其如斯、謹言、

二月廿日

光久(花押314)

新納右衛門佐殿

1009 當分其許之儀心遣候、就其諸法度之様子、新納右衛門佐

へ任せ置候間、可被申付儀、少も不可相背之旨、右衛門佐へ被致談合、其方前右在江戸之衆へ可被申渡候、勿論右衛門佐へも、何篇念入無遠慮可有下知由、被申合可然候、爲其如此候、恐々謹言、

四月十九日

光久（花押³¹⁴）

北郷式部太輔殿

（本文書ハ「旧記雜録後編六」一九〇号文書ト同文ナリ）

1010 改曆之嘉祥珍重ニ候、先以此方奉始 黃門様、家中無吳

儀候間、可易心候、仍小袖一重并一種一荷進之候、誠祝儀之驗計候、恐々謹言、

二月四日

光久

式部太輔殿

1011 追而申候、今度 上使御國廻之儀、諸國へ不審成牢人共

爲被抱置様儀御沙汰共候而、左様之儀御糺之爲にてもや

候ハん與、各被思召候間、其元心持可入との御事にて候、就其、硫磺嶋之儀、被仰遣候、惣別御國中少も此方より

斟酌かましき儀者入間敷由、御意候間、可有其御心得候、

以上、

1012 爲改年之嘉祥、使者被差越、殊太刀一腰・馬一疋到來、

誠遠境迄被入念候段、欣悅之到候、猶北郷佐渡守可申候、謹言、

正月八日

光久（花押³¹⁴）

伊集院右衛門佐殿

1013 爲年首之嘉祥被差越使者、殊太刀一腰・馬一疋到來、於

遠路被入念候段、欣然之到候、尙新納右衛門佐可申候也、謹言、

正月廿八日

光久（花押³¹⁴）

伊集院右衛門佐々

1014 急度致啓上候、然^{◎ハ}者^{◎ハ}嶋原之儀ニ付、九州衆不殘今月十

二日ニ御暇被遣、從^{◎ハ}御城直ニ被^{◎ハ}打立候衆も御座候、大

略十二日之夜半被^{◎ハ}打立候、我等儀^{◎ハ}とかく被^{◎ハ}仰出候

間、翌朝以伊勢兵部少輔、御年寄衆^{◎ハ}江^{◎ハ}得御意候處^{◎ニ}、十

三日之晝程^{◎ハ}御城江被^{◎ハ}召寄御暇被^{◎ハ}下候、即十四日之曉打

立申候、駿河府中迄十六日之晩罷着候處ニ、晝程の大兩
 ニ而阿部川以外出來申、渡〇不罷成候ニ付、十七日ハ
 此地へ致滯留候、渡り御座候ハ、夜中ニ成とも打立可
 申候、大名衆皆くから尻にて人をもつれす上り之躰ニ候
 間、我等年若ニ而緩く與仕候而者、江戸之聞得いか、ニ
 候間、從矣許供之者三人程馬にて召〇列、から尻にて大
 阪迄罷上へき由之覺悟候、就夫はや御國之人數之儀、有
 馬表之上使方爲被申越由、御年寄衆方被仰候、定而可
 罷渡候、於大坂承合、いまた御國之人數、有馬へ不參候
 ハ、如其元早く罷下、人數召〇列尤ニ候、又有馬へ人
 數參候ハ、直ニ彼表へ參候へと、御年寄衆方被仰聞候
 間、致其覺悟候、我等出陳仕〇上ハ、御國之衆不殘可
 罷立候、就御馬〇しるし、今度申〇受、高麗以來之御佳
 例ニ持せ申度候間、被仰付可被下候、委細之儀〇者、伊
 勢兵部少輔其〇元家老衆江可申遣候間、不能詳候、誠惶
 誠恐敬白、

薩摩守

正月十七日
 光久〇御判
 進上 黃門様

(本文書ハ「旧記雜録後編五」二一九三号文書ト同文ナリ)

1015 「御文庫拾三番箱五拾五卷中」

新年之御嘉瑞千祥萬福逐日重疊、不可有盡期候、抑此等
 之爲御祝儀、太平布五十疋・蕉布五十端・燒酎十壺致進上
 之候、猶御慶事奉期後音之時候、誠恐誠惶敬白、

正月十一日
 琉球國司 尙質〇判〇花押

進上 光久尊公

1016 「御文庫拾三番箱五拾七卷中」

新年之御嘉瑞珍重多幸、不可有盡期候、抑此等之爲御祝
 儀、大平布五十疋・蕉布五十端・燒酎十壺致進上之候、猶
 餘者奉期後慶之時候、誠惶誠恐敬白、

琉球國司

1018

〔御文庫拾二番箱四拾三卷中〕

肇年之御慶賀珍重々、逐日不可有際限候、此等之御祝詞

進上 光久尊公

▽◎

琉球國司

尙賢

△

正月十一日

琉球國司

尙賢◎〔花押〕

進上 光久尊公

1017

〔御文庫拾二番箱四拾三卷中〕

肇年之御嘉慶珍重々、逐日不可有際限候、此等之御祝儀爲可申上、捧使翰候、仍奉准恒例、太平布五十疋・蕉布五十疋・燒酎十甕致進上之候、猶御吉瑞重而可得 尊意候、誠惶誠恐敬白、

正月十一日

琉球國司

尙賢◎〔花押〕

正月十一日

尙賢◎〔花押〕

進上 光久尊公

1019

〔御文庫拾二番箱四拾卷中〕

當年之御嘉慶珍重多幸、逐日不可有際限候、此等之御祝言爲申上〔本マ、レ〕、使節差上候、仍奉准恒例、太平布五十疋・蕉布五十疋・燒酒十甕奉進上候、猶御吉事永春中可得 尊意候之間、不能詳候、誠恐誠惶敬白、

進上 光久尊公

▽◎

琉球國司

尙賢

△

正月十一日

琉球國司

尙賢◎〔花押〕

進上 光久尊公

爲可申上、捧使候、仍奉准恒例、太平布五十疋・蕉布五十疋・燒酒十甕致進上之候、御吉瑞重而可得◎〔關字〕尊意候、誠惶誠恐敬白、

▽◎

琉球國司

進上 光久尊公

尙豐

△

1020 「御文庫三番箱七卷中」

爲端午之佳慶、帷子單物數十到來歡覺候、尙酒井雅樂頭可述候也、

五月三日

○ (家綱)

薩摩少將殿

▽◎ 薩摩少將殿 △

1021 爲重陽之佳慶、小袖五到來歡覺候、猶酒井雅樂頭可述候也、

九月七日

○ 「墨印」「全上」

薩摩少將殿

▽◎ 薩摩少將殿 △

(本文書ハ「旧記雜錄追録一」五一五号文書ト同文ナリ)

1022 爲歲暮之佳祥、小袖十到來喜覺候、委曲酒井雅樂頭可述候也、

十二月廿八日

○ 「墨印」「全上」

薩摩少將殿

(本文書ハ「旧記雜錄追録一」五三二号文書ト同文ナリ)

▽◎ 薩摩少將殿 △

1023 「御文庫三番箱六卷中光久公」

爲歲末之佳祥、小袖十到來怡思召候、猶土井大炊頭可述候也、
(利勝)

十二月廿八日

○ (家光)

薩摩侍從殿

▽◎ 薩摩侍從殿 △

1024

「三番箱六卷中」

爲季陽之佳兆、小袖五到來怡思召候、委曲土井^(利勝)大炊頭可述候也、

九月八日 ○ (家光)

薩摩侍從あ

「外ニ端午云々拾三通、重陽云々拾壹通、歳暮云々拾壹通、惣而墨印、薩摩侍從殿宛書、同文故略ス」

1025

爲歳暮佳事、小袖十到來悅思召候、猶土井^(利勝)大炊頭可述候也、

十二月廿七日 ○ 「墨印」「全上」

薩摩侍從あ

薩摩侍從あ

1026

「御文庫廿一番箱五拾五卷中」

先刻示被下候通、堀田加賀殿御草簡進之候キ、來ル

十日方廿日迄内、得御意可申入候、從其元右之段、

拙子式ニも被仰下候旨、今晚ニても御使者被進之候

者、猶以忝可被思召候、以上、

御書拜見并新敷鷹壹羽拜領、忝致頂戴候、近日數寄を仕

候者、斷理可致候、忝旨 御前可然御取次奉仰候、猶以

參上御禮可申上候條、不能詳候、恐惶謹言、

二月六日

◎ (花押) 判

ノ

北郷佐渡守様

御申上

一齋 山道與

1027

「御文庫貳拾壹番箱五拾四卷中」

猶々出雲殿方も預御音問候、此返書被遣可給候、以

上、追而東鑑之儀ニ付、度々御斷畏入候、何事も

期面上候、以上、

一昨日者、御書物場ニ罷在、隙入候砌ニ而、早々及御報

候、先以今度之御下向、乍御大儀目出度存候、然者御見
せ候二册致一覽候、さてく慥成御證文共驚人候、殊ニ
此方へ可被遣置候由、別而過分不淺候、何様御際明候節、
以面談御禮可申達候、先年御越候御家之記録ニ而、貴久
以來之儀、今度之御書物ニ書入候、恐惶謹言、

三月廿九日

判

弘文院

嶋津圖書様

人々御中

春齋

1028 「御文庫廿一番箱五拾四卷中」

以一翰令啓達候、然者此邦、先國司尙質跡職之儀、拙者
江被仰付候、誠以[◎]御高恩不淺、生々世々難述謝詞奉存
候、就夫、奉對

薩州府君、毛頭不可奉疎意存之旨、黑葛原周右衛門尉殿
檢者頼入、靈社之神文仕差上申候、此等之段可然之様、
可預御披露候、恐惶謹言、

五月十五日

琉球國司

尙貞[◎] (花押)

御老中

御老中

尙貞

琉球國司

△ (本文書ハ、「旧記雜錄追録」一三二八号文書ト同文ナリ)

1029 「十三番箱中」

猶以進物之書立注別紙差越候、以上、

松平薩摩守息又三郎・嶋津但馬守息又四郎儀、達 上聞
候之處、御次而次第
御目見可仕之由、被仰出候之間、被得其意、右之旨可被
相達候、以上、

六月廿六日

松伊豆守[◎] (信綱)

神尾備前守殿

△ (本文書ハ、「旧記雜錄追録」一八四三号文書・一八四六号文書ト同文ナリ)

1030

「御文庫拾二番箱四拾七卷中」

「口書」

新納右衛門様

松能登守

家來之者方迄之御狀令披見候、然ハ今日之仰渡之儀、稻葉淡路守今度氣違、無科者共餘多致成敗、其上城中なども圍申候通、上方方御注進在之候間、早と可被仰付旨被思召候へとも、對公儀御恨無之者ニ候間、御奉書被遣早と罷下、右之趣具ニ可致申分之旨被仰出候處、御奉書彼地へ不致着以前ニ致自害候故、無其儀被思召候、右之趣何もニ可申聞候之旨、上意ニ候故、今日御老中急度被仰渡候、恐と謹言、

九月朔日

定政◎〔花押〕

1031

「十二番箱四拾五卷中」

爲年始之御祝儀、被差越使者、殊御太刀一腰・馬代黃金拾兩被獻之候、遂披露候之處一段之仕合候、猶使者可爲演說候、恐と謹言、

正月十一日

阿部豐後守◎〔花押〕

忠秋〔判〕

松平和泉守◎〔花押〕

乘壽〔判〕

松平薩摩守殿

松平和泉守

松平薩摩守殿

阿部豐後守

1032

「御文庫拾二番箱四拾四卷中」

爲年頭之御禮被差越使者、殊御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之候、遂披露候處、一段之仕合候、恐と謹言、

正月十三日

阿部對馬守◎〔花押〕

重次〔判〕

松平伊豆守◎〔花押〕

信綱〔判〕

松平薩摩守殿

松平伊豆守

松平薩摩守殿

阿部對馬守

1033 御札令拜見候、舊冬爲使者以嶋津筑前被申上候之處、

仕合好御服拜領之義忝被存候之由、得其意候、依之爲御禮、重而被差越使者候、念之入候段、達上聞候、恐

謹言、

正月廿六日

阿部對馬守

◎(花押) 重次(判)

阿部豊後守

◎(花押) 忠秋(判)

松平伊豆守

◎(花押) 信綱(判)

松平薩摩守殿

▽◎

松平伊豆守

松平薩摩守殿

阿部豊後守

阿部對馬守

(本文書ハ「旧記雜録追録」一二四号文書ト同文ナリ)

1034 「御文庫拾五番箱七拾八卷中」

任嘉例城中改年之御祝儀令申入候序、啓一輪候、在府弥可爲康健候、此邊無恙候、折節調合之薰物一香合可被試候、猶使者附口上候也、

春陽初一

(近衛基熙) (花押285)

松平薩摩守殿

1035 明日増上寺御參詣之儀、後住未被仰付、其上彼地賑之内

ニ候故、紅葉山御佛殿へ被爲成候間、各彼地不及參詣候、恐々謹言、

正月廿三日

阿部對馬守

◎(花押) 重次(判)

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

阿部對馬守

1036 「御文庫拾五番箱七拾八卷中」

昨日者御使者、殊鴨二番被爲懸御意、誠過分至極奉存候、

猶奉期拜額之刻、御禮可申上候、恐惶謹言、

二月六日

(花押 358)



松平薩摩守様

人々御中

村越七郎左衛門尉

正重

1037

「御文庫拾五番箱七拾九卷中」

御書忝拜見仕候、殊雁一羽被下候、誠以忝拜受仕候、早
く以參御禮可申上候處、此中御城ニ晝夜相詰無其儀候、
さかり申候刻、致伺公御禮可申上候、恐惶謹言、

二月六日

瑞室判 (花押)



薩州守様

尊答

龜法印

「詳カナラス」

瑞室

1038

「十二番箱四拾六卷中」

御札令拜見候、兩上様御機嫌之御様躰被承度之由、得

其意候、増御氣色能被成御座候間可御心安候、依之被差
越使者、御樽肴被獻之候、遂披露候之處入念候段御滿悅
之御事候、恐々謹言、

二月十四日

阿部豊後守判 (花押)

忠秋判

松平和泉守

判 (花押)

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

松平和泉守

阿部豊後守

1039

「御文庫拾二番箱四拾九卷中」

御狀令拜見候、如承意改年之御慶珍重候、

兩上様弥御機嫌能被成御座與、目出度被存候之旨、得
其意候、御平安之御事候間、可御心安候、因之被差越使
者、御樽肴被獻之候、念之入候段、及 上聽候之處、御
滿悅被思召候、委曲使者可令演說候、恐々謹言、

二月廿三日

阿部對馬守[◎](花押)
重次^判

松平伊豆守[◎](花押)
信綱^判

松平薩摩守殿

▽◎

松平[◎](薩摩守殿)

松平伊豆守

阿部對馬守[△]

1040 御札令拜見候、改年之慶儀玆重候、兩上様弥御機嫌能被

成御座候間、可御心易候、隨而爲御祝儀、被差越使者候、

入念候段、可令言上候、尙、使者可爲演說候、恐々謹言、

二月廿三日

阿部豐後守[◎](花押)
忠秋^判

松平和泉守[◎](花押)
乘壽^判

松平薩摩守殿

御札令拜見候、去比 大納言様御不例之處、早速御快然

之儀、目出被存之旨、得^{◎其}(御)意候、依之、被差越使者候、

右之趣達^{◎高}(上)聽候之處、被入念候段、御機嫌之御事候、

猶、使者可令演說候、恐々謹言、

三月二日

阿部對馬守[◎](花押)
重次^判

阿部豐後守[◎](花押)
忠秋^判

松平伊豆守[◎](花押)
信綱^判

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守

阿部對馬守[△]

1042 御札令拜見候、去比 大納言様御不豫之處、早速御本復

之儀相達、目出度被存之由、得其意候、依之被差越使者

候、弥打續御機嫌好被成御座候間、可御心安候、被入念候之段令言上候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

三月二日

松平和泉守 (花押) 乘壽 (判)

牧野内匠頭 (花押) 信成 (判)

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

牧野内匠頭

松平和泉守

△

1043

「御文庫拾二番箱四拾四卷中」

御札令拜見候、九條攝政殿薨去之儀相達、御機嫌之御様躰被承度付而、被差越使者候、入念候段、御次而之刻、可及 上聽候、恐々謹言、

三月五日

阿部對馬守 (花押) 重次 (判)

阿部豊後守 (花押) 忠秋 (判)

1044

「御文庫拾二番箱四拾四卷中」

御札令拜見候、先日龜松殿、御虫氣之趣相達、御様躰被承度由、尤之事候、早速御本復被遊候間、可御心安候、入念示給之段、及 上聽候、恐々謹言、

三月六日

阿部對馬守 (花押) 重次 (判)

阿部豊後守 (花押) 忠秋 (判)

松平伊豆守 (花押) 信綱 (判)

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

阿部對馬守

△

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守

阿部對馬守

△

1045 「御文庫拾二番箱四拾五卷中」

御札令拜見候、去比、大納言様、少く御虫氣之儀相達、御様躰被承度付而、被差越使者候、早速御本復之御事候間、可御心安候、被入念示給之趣令言上候、委曲使者可爲演說候、恐く謹言、

三月六日

松平和泉守 ◎ (花押)
乘壽 [判]

牧野内匠頭 ◎ (花押)
信成 [判]

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

牧野内匠頭

松平和泉守

△

1045 御札令拜見候、兩上様御機嫌之御様躰、被承度付而、被差越伊勢兵部少輔、砂糖漬三壺・鏗節一箱被獻之候、右

之通遂披露候之處、使者、御前江被 ◎ (關字) 召出、入念候之

段、御滿悅之旨、被 ◎ (關字) 仰出候、委曲兵部少輔可爲演說候、恐く謹言、

三月六日

阿部對馬守 ◎ (花押)
重次 [判]

阿部豐後守 ◎ (花押)
忠秋 [判]

松平伊豆守 ◎ (花押)
信綱 [判]

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守

阿部對馬守

△

1047 「御文庫拾二番箱四拾三卷中」

1048

「十二番箱四拾五卷中」

御札令拜見候、大納言様、少々御虫氣之處、早速御本復之義相達、目出度被存之由、得其意候、因茲、被差越

御狀令拜見候、龜松殿去比御不例之處、早速御本復之旨

相達、目出被存之由、得其意候、因茲被相越使者候、念入候段、達 上聞候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

三月六日

阿部對馬守 ◎(花押)

重次 [判]

阿部豐後守 ◎(花押)

忠秋 [判]

松平伊豆守 ◎(花押)

信綱 [判]

松平薩摩守殿

▽ ◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守

阿部對馬守

△

1049

「御文庫拾二番箱四拾五卷中」

使者候、入念候段、令言上候、恐々謹言、

三月七日

松平和泉守 ◎(花押)

乘壽 [判]

牧野内匠頭 ◎(花押)

信成 [判]

松平薩摩守殿

▽ ◎

松平薩摩守殿

牧野内匠頭

松平和泉守

△

御札令拜見候、大納言様、先日御虫氣之儀相達、御様躰被承度之由、得其意候、因茲、被差越使者候、早速御本復御事候之間、可御心安候、入念之段、及 高聽候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

三月七日

阿部對馬守 ◎(花押)

重次 [判]

阿部豐後守 ◎(花押)

忠秋 [判]

松平伊豆守
信綱〔判〕◎〔花押〕

松平薩摩守殿

松平伊豆守

松平薩摩守殿

阿部對馬守

△

1050 御狀令拜見候、大納言様、御不例早速御本復之儀、目出度被存之旨、得其意候、因茲、被差越使者候、右之趣及高聽候之處、被入念候段、御機嫌之御事候、猶使者可令演說候、恐と謹言、

三月八日

阿部對馬守
重次〔判〕◎〔花押〕

阿部豐後守
忠秋〔判〕◎〔花押〕

松平伊豆守
信綱〔判〕◎〔花押〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守

阿部對馬守

△

1051 「十二番箱四拾六卷中」

御札令拜見候、公方様少と御頭痛氣付而、正月廿四日増上寺 御佛殿御參詣、御延引之趣相達、御様躰被承度付而、被差越使者候、早速御快然、去月二日〔關字〕◎御參詣之御事候間、可御心安候、入念候段、及上聽候、委曲使者可令演說候、恐と謹言、

三月八日

阿部對馬守
重次〔判〕◎〔花押〕

阿部豐後守
忠秋〔判〕◎〔花押〕

松平伊豆守
信綱〔判〕◎〔花押〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

(阿部對馬守)

1052 「御文庫拾二番箱四拾六卷中」

御札令拜見候、大納言様、少々御咳氣付、年頭之御禮御延引之儀相達、御様躰被承度之由、得其意候、依之、被差越使者候、早速御快然之御事候、可被御心安候、入念示預候之通承届候、御次而之節、可及上聽候、恐々謹言、

三月十一日

阿部對馬守 ◎(花押)

重次(判)

阿部豊後守 ◎(花押)

忠秋(判)

松平伊豆守 ◎(花押)

信綱(判)

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

(阿部對馬守)

1053 「二番箱十五卷」

御使札忝致拜見候、然者、今度、井上筑州・馬場三郎左爰元へ被遣候付、去五日至大坂着、同日之晚日和次第可致出船之由、今日申來候、先以貴様今度者、東目筋御下之由、奉得其意候、將又此表相替儀無御座候間、御心安可被思召候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

三月十三日

山崎權八郎 ◎(花押)

正信(判)

松平薩摩守様

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一七三〇号文書ト同文ナリ)

1054 「十五番箱七十九卷中」

先刻者、御使者忝、殊更赤貝鹽辛壹壺、被爲懸御意、寔

毎度被爲入御念候段、過分至極奉存候、他出仕御使者へも不得御意候、猶伺公仕御禮可申上候、恐惶謹言、

三月十九日

勝正〔判〕◎〔花押〕

林丹波守

松平薩摩守様

人々御中

勝正

1055

〔御文庫拾五番箱七拾九番中〕◎〔卷〕

一筆致啓上候、先刻者、御使者、殊御國之赤貝鹽辛一壺、被懸貴意忝奉存候、則御禮可申上候處、罷出延引仕候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

三月十九日

正直〔判〕◎〔花押〕

兼松弥五左衛門尉

松平薩摩守様

人々御中

1056

昨日者預御使者、殊更九年母壹籠、被懸御意忝奉存候、

御城ニ罷有候故、不能即答候、何も面上之節御禮可申達候、恐惶謹言、

三月廿一日

信成〔判〕◎〔花押〕

牧野内匠頭

松平薩摩守様

人々御中

信成

1057

〔御文庫拾五番箱七拾九卷中〕

昨日者被召寄候、爲御禮預御使者、御慇懃之至存候、折節致他行、不能即答候、何様重而可得御意候、恐惶謹言、

卯月十三日

光尙〔判〕◎〔花押〕

細川肥後守

松平薩摩守様

人々御中

光尙

1058

尊書忝拜見、殊ニ琉球酒一壺・赤貝成物壹壺、被懸御意候、被爲寄思召、過分至極ニ奉存候、先日申上候通、一

圓不得御透御見舞も不申上候、何様伺公仕、御禮可申上候、恐惶謹言、

四月廿日

治判 花押

久世權之助



松平薩摩守様

尊報

1059

「御文庫十五番箱七拾九卷中」

明日御能被仰付候間、可致見物之旨、上意候、五時分登城尤候、恐々謹言、

四月廿一日

阿部對馬守
重次判 花押

阿部豐後守
忠秋判 花押

松平伊豆守
信綱判 花押

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守
阿部豐後守
阿部對馬守

1060

口上之覺

近日、公家衆御暇被遣候間、各發足之儀、從明日當月中者無用ニ可仕候旨、被仰出候、以上、

四月廿一日

松平薩摩守殿

阿部對馬守
阿部豐後守

1061

「十二番箱四拾五卷中」

尙以、六ツ半之時分、可有出仕候、以上、今度參向之公家門跡衆、爲御馳走、天氣能候者、明日御能被仰付候間、可致見物之旨御意候、被存其趣、御登城尤候、恐々謹言、

阿部對馬守

五月七日

重次〔判〕[◎]〔花押〕

松平伊豆守
信綱〔判〕[◎]〔花押〕

松平薩摩守殿

▽[◎]

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部對馬守

△

1062

一筆令啓上候、其元相易儀無御座、公方様弥御氣嫌能可被成御座與、奉存候、我等事、去七日ニ無事ニ在所へ致下着候、御國へも人を進候、無別條之由、御老中申來候、此表相替儀無御座候、尙追而可得御意候、恐惶謹言、

五月十七日

細川肥後守
光利〔判〕[◎]〔花押〕

松平薩摩守様

人々御中

1063

▽[◎]

松平薩摩守様

參

〆
△

〔十二番箱四十六卷中〕

猶以息又三郎方、可有同道候、以上、

明廿日御能被 仰付之間、可致見物旨 上意候、〔被存〕[◎]〔ナシ〕被存其趣、六半時分御登城尤候、恐々謹言、

五月十九日

阿部對馬守
重次〔判〕[◎]〔花押〕

阿部豐後守
忠秋〔判〕[◎]〔花押〕

松平伊豆守
信綱〔判〕[◎]〔花押〕

松平薩摩守殿

▽[◎]

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守

〔阿部對馬守〕

△

1064

「御文庫拾五番箱七拾九卷中」

猶「本マア」々、各被申合必致祇公可得御意候、以上、

先刻者、預貴札候處ニ罷出御報不申上候、然者、明後廿八日之晚、被召寄候儀忝奉存候、必致參上、可得御意候、從是御禮可申上与存候處ニ、却而御報罷成、致迷惑候、

何も貴面可申上候條、不能詳候、恐惶謹言、

五月廿六日

忠重判花押



松平薩摩守様

貴報

酒井壹岐守

忠重

1065

内々致伺公御禮可申上候處ニ、預貴札過分至極ニ奉存候、明後廿八日之晚之儀、必◎御見廻可申上候、早々御請可申入ヲ、他出仕延引令迷惑候、恐惶謹言、

五月廿六日

正友判花押

松浦内藏充

1066

「御文庫拾五番箱七拾九卷中」

松薩摩守様

貴報

正友

一筆申入候、朔日ちかく候之故、明廿八日之御禮無之候之間、不及出仕候、恐々謹言、

五月廿七日

重次判花押



松平薩摩守殿

人々御中

阿部對馬守

重次

1067

一筆致啓上候、先以此御地、兩上様、弥御機嫌能被爲成御座候、然者、貴公様御事、道中御無事ニ御着被成候哉、承度奉存候、先可申上ヲ、御立之刻被仰置候之由候て、御使者、殊あわもり沓かめ、赤貝之成物壺迄、被懸御意、誠御心付之段、別而忝奉存候、何も重而可申上候條、不能具候、恐惶謹言、

向井兵部

六月八日 忠綱◎(花押)

松薩摩守様 人々御中

1068 「御文庫拾二番箱四拾八卷中」

琉球布十端、并御肴一種・焼酎二壺、如目錄被獻之候、
遂披露候之處、入念候之段、御機嫌之御事候、恐々謹言、

六月廿九日 阿部豊後守◎(花押)
忠秋判

松平薩摩守殿

▽◎ 松平薩摩守殿 阿部豊後守 △

1069 「十二番箱四拾八卷中」

今度御暇、當地發足付而、兩上様御機嫌之御様躰、爲
可被相窺之、家來被殘置之候、一段御氣色能被成御座、
公方様爲御城廻兩度被遊 出御候之間、可被心安候、入
念候之通及 上聽候之處、御滿悅之御事候、恐々謹言、

七月六日 阿部對馬守◎(花押)
重次判

阿部豊後守◎(花押)
忠秋判

松平伊豆守◎(花押)
信綱判

松平薩摩守殿

▽◎ 松平伊豆守

松平薩摩守

阿部對馬守
重次判

1070 「十二番箱四十三卷中」

今度 日光御普請就令首尾、爲御祝、明日御能被 仰付
候、可致見物之旨、上意候、被存其趣、五時分登城尤
候、恐々謹言、

七月六日

阿部對馬守◎(花押)
重次判

松平伊豆守◎(花押)
信綱判

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部對馬守

阿部對馬守

△

1071 「御文庫拾二番箱四拾七卷中」

御札令拜見候、兩上様御機嫌之御様子被承度就而、被差越使者候、弥御氣色能被成御座候間、可御心安候、隨而、如目錄色々被獻之候、遂披露候之處、念之入候段、御滿悅之御事候、委曲使者可令演說候、恐々謹言、

七月廿日

阿部對馬守

重次〔判〕◎〔花押〕

阿部豐後守

忠秋〔判〕◎〔花押〕

松平伊豆守

信綱〔判〕◎〔花押〕

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

阿部豐後守

阿部對馬守

△

1072 御札致拜見候、兩上様、御氣色之御様躰被承度付而、被差越使者候、弥御機嫌好被成御座候之間、可被御心安候、將又 大納言様江琉球鶉三籠、并虫籠三被獻之候、右之通遂披露候處、一段之御仕合候、猶使者可爲演說候、恐々謹言、

御札致拜見候、兩上様、御氣色之御様躰被承度付而、被差越使者候、弥御機嫌好被成御座候之間、可被御心安候、將又 大納言様江琉球鶉三籠、并虫籠三被獻之候、右之通遂披露候處、一段之御仕合候、猶使者可爲演說候、恐々謹言、

七月廿日

松平和泉守

乘壽〔判〕◎〔花押〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平和泉守

△

1073 「御文庫拾二番箱四拾三卷中」

一書致啓上候、仍先日者預御使者候處ニ、長崎方罷歸、

御前之隙未明不申候ニ付、何角取紛、以愚札御禮不申上候、如御意、豫州於津羽御局渡海之船破損仕ニ付而、御用御座候半と存知、即狀を取御届申候處ニ、御慰懃成御使忝奉存候、右之仕合故御請遅令迷惑候、何様致伺公可得御意候、恐惶謹言、

八月十四日

正信〔判〕〔花押〕

新見七右衛門尉

松平薩摩守様

人と御中

正信

1074 「十二番箱四拾三卷中」

御札令拜見候、去比 公方様少と御眼氣之處、早速御快然之趣相達、目出度被存之由尤之事候、因茲、被差越使者候、入念候段御次之刻可及 上聽候、恐と謹言、

八月五日

阿部對馬守〔判〕〔花押〕

重次〔判〕

阿部豐後守

〔判〕〔花押〕
忠秋〔判〕

▽
◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守〔判〕〔花押〕

信綱〔判〕

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守

阿部對馬守

△

1075 「御文庫拾五番箱七拾九卷中」

一筆申入候、朔日茂近ク御座候故、明廿八日之御禮無之候間、不及出仕候、恐と謹言、

八月廿七日

重次〔判〕〔花押〕

松平薩摩守殿

阿部對馬守

重次

1076

明朝於二之丸御茶可被下之旨、被 仰出候、被得其意、六時分可有登城候、恐と謹言、

十二月六日

阿部對馬守
重次〔判〕◎(花押)

阿部豐後守
忠秋〔判〕◎(花押)

松平伊豆守
信綱〔判〕◎(花押)

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守

阿部對馬守
△

1077 御札令拜見候、息又三郎御鷹之雲雀拜領之義、忝被存候

由、得其意候、依之、被差越使者候、早々入念候之段、
及 上聽候、恐々謹言、

八月廿九日

阿部豐後守
忠秋〔判〕◎(花押)

松平伊豆守
信綱〔判〕◎(花押)

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豐後守
△

1078 御狀致拜見候、仍而御同名又三郎殿へ去時分、御鷹之雲

雀被成御拜領候之儀相達、忝思召之由、尤存候、依之、
老中迄以使者被仰入候、入御念之趣各申談、可達◎(關字)上聞
候、委曲期後音之時候、恐惶謹言、

九月朔日

酒井讚岐守
忠勝〔判〕◎(花押)

松平薩摩守様
貴報

▽◎

松平薩摩守様
貴報

忠勝

酒井讚岐守
△

〔御文庫拾二番箱四拾五卷中〕

御札致拜見候、兩上様御機嫌之御様子被承度付而、被差越使者候、殊大納言様江砂糖漬之御菓子一箱、琉球酒一壺被獻之候、則遂披露候之處一段之御仕合候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

九月十一日

松平和泉守
乘壽〔判〕
◎〔花押〕

牧野内匠頭
信成〔判〕
◎〔花押〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

牧野内匠頭

松平和泉守

△

〔御文庫拾四番箱六拾四卷中〕

今度右兵衛督所へ御輿入候爲御祝儀、御使者、殊三種三荷饋給、欣然之至候、委曲期後音之節候、恐々謹言、

尾張大納言

九月廿六日

松平薩摩守殿

御宿所

(本文書ハ、「旧記雜錄追録」一、二二〇九号文書ト同文ナリ)

義直〔判〕
◎〔花押〕

〔御文庫拾二番箱四拾六卷中〕

今度就 崇源院殿御遠忌、於増上寺御法事依有之、以使者御香奠被獻之候、即備 御影前候、右之趣及 臺閣御機嫌之御事候、恐々謹言、

九月廿四日

阿部豊後守
忠秋〔判〕
◎〔花押〕

松平伊豆守
信綱〔判〕
◎〔花押〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守
阿部豊後守

△

〔御文庫拾二番箱四拾卷中〕

御札令拜見候、兩上様御機嫌能、公方様去八朔御表
江出御、諸大名御禮有之儀相達、目出度被存之由、得其
意候、依之、被差越使者、大納言様江貴國之御肴一種、
被獻之候、遂披露候之處、一段之御仕合候、猶使者可令
演說候、恐々謹言、

九月廿九日

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

松平和泉守 (花押) 乘壽判

松平和 (果守)

1083 「拾二番箱四拾六卷中」

御札令拜見候、兩上様御機嫌之御様躰被承度之由、得
其意候、依之、被差越使者候、増々御氣色能被成御座候
之間、可御心安候、將又、其國之兩種被獻之候、遂披露
候之處、一段之御仕合候、委曲使者可爲演說候、恐々謹
言、

十月朔日

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

阿部對馬守 (花押) 重次判

阿部豐後守 (花押) 忠秋判

松平伊豆守 (花押) 信綱判

松平 (伊豆守) 豐後守

阿部 (關字) 阿部對馬守

1084 「十二番箱四十八卷中」

御札令拜見候、去比息又三郎江以上使御鷹之雲雀被下
之儀、忝被存之由、得其意候、入念候段、可及台聞候、
恐々謹言、

十月二日

阿部對馬守 (花押) 重次判
松平伊豆守

〔御文庫拾二番箱四拾八卷中〕

松平薩摩守殿

信綱〔判〕〔花押〕

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部對〔馬守〕

御札令拜見候、一兩上様御機嫌好被成御座、公方様、

去月廿七日、御鷹野被爲〔關字〕成之儀相達、目出度被存之由、

得其意候、弥御様躰就被承度、被差越使者候、増々御氣

色能、切々御鷹狩 出御之御事候間、可御心安候、入念

候段、達 高聞候、猶使者可爲演說候、恐々謹言、

十月廿四日

阿部豊後守〔判〕〔花押〕

忠秋〔判〕

松平和泉守

〔乘券〕〔判〕〔信綱〕〔花押〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平和泉守

阿部豊後守

1086 御札令拜見候、公方様、去八月廿七日當秋始而、王子

江御成之儀相達、目出度被存候由、得其意候、依之、被

差越使者候、弥以御機嫌能被成御座、切々爲御鷹狩等所

々江被爲成候間、可御心〔易〕〔安〕候、將又其國之御肴一種被

獻之候、右之通遂披露候處、入念候段御滿悅之御事候、

猶使者可令演說候、恐々謹言、

十月廿五日

阿部對馬守〔判〕〔花押〕

重次〔判〕

松平伊豆守〔判〕〔花押〕

信綱〔判〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊〔豆守〕

阿部對〔馬守〕

1087

「御文庫拾二番箱四拾八卷中」

御札令拜見候、兩上様弥御機嫌能被成御座候之間、可被御心安候、將又、去比 公方様王子御鷹野被爲 成候儀相達、目出度被存之由、得其意候、依之、被差越使者入念候段令言上候、猶使者可令演說候、恐々謹言、

十月廿七日

阿部豊後守

忠秋判

松平和泉守

乘壽判

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

△

1088

「御文庫拾二番箱四拾四卷中」

御札令拜見候、公方様、御不例御快然、九月十七日內之御宮江 御參詣之儀相達、目出度被存之由、得其意候、依之、被差越使者候、右之通及 上聽候之處、入念之段、

御機嫌之御事候、猶使者可爲演說候、恐々謹言、

▽◎

十一月十六日

△

阿部對馬守

重次判

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

阿部對馬守

△

1089

「御文庫拾五番箱七拾九卷中」

一筆啓上仕候、仍拙者義、上方御用隙明、一兩日以前當御地へ致參着候、罷登り候節者、御使者被下忝存候、其節御請申候、急罷登り候故、以參御禮不申上背本意候、高野山へも被入御念預御音問、重々過分奉存候、尤早々

致伺候可述所謝候へとも、御用候て毎日安藤右京殿へ寄

合、不得隙候條、先捧愚札候、何も近日奉期參拜之節候、

恐惶謹言、

極月十二日

春判[◎]_(花押)

松平薩摩守様

御小姓中

春齋方

1090 「御文庫拾二番箱四拾六卷中」

御札令拜見候、其國密柑被獻之候、遂披露候之處、一段

之御仕合候、恐々謹言、

十二月十二日

阿部對馬守判[◎]_(花押)

重次判

阿部豐後守判[◎]_(花押)

忠秋判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

阿部豐後守

阿部對馬守

1091 「御文庫拾二番箱四拾四卷中」

御札令拜見候、公方様、弥御機嫌好被成御座候之間、

可御心安候、將又、其國之密柑二箱被獻之候、遂披露候

之處、一段之御仕合候、恐々謹言、

十二月十六日

阿部對馬守判[◎]_(花押)

重次判

阿部豐後守判[◎]_(花押)

忠秋判

松平伊豆守判[◎]_(花押)

信綱判

松平薩摩守殿

▽◎

松平伊豆守

松平薩摩守殿

阿部豐後守

阿部對馬守

1092 御札致拜見候、兩上様弥御機嫌能被成御座候之間、可

御心安候、將又、大納言様江、其國之密柑被獻之候、

遂披露候之處、一段之御仕合候、恐々謹言、

十二月十六日

松平和泉守
乘壽判花押

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

松平和泉守

1093

〔御文庫拾二番箱四拾六卷中〕

御札令拜見候、兩上様御機嫌好被成御座候儀相達、目出度被存之由、得其意候、寒中付而弥御様躰爲可被相窺、被差越使者候、増々御氣色好被成御座候之間、可御心安候、隨而、於其地留之、鐵炮之鶴一羽被獻之候、右之趣遂披露候之處、一段之御仕合候、猶使者可令演說候、恐々謹言、

十二月廿日

松平和泉守
乘壽判花押

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

松平和泉守

1094

御札令拜見候、兩上様、御機嫌之御様躰被承度之由、得其意候、一段御氣色好被成御座候間、可御心易候、將又、鐵炮之鶴一被獻之候、遂披露候之處、入念候之段、御滿悅之御事候、恐々謹言、

十二月廿一日

阿部對馬守
重次判花押

阿部豐後守
忠秋判花押

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

阿部豐後守

阿部對馬守

1095

〔御文庫拾五番箱七拾九卷中〕

昨日者預御使者候、殊歳暮之爲御祝儀、御國元之せうちう壹壺并鯉一折貳ツ、被掛御意候、誠被入御念、御懇意

之段、幾久別而忝奉存知候、則御返夏可申上處、〔嗣字〕御城

罷有候故延引仕候、猶期面拜之時候、恐惶謹言、

十二月廿二日

忠吉〔判〕〔花押〕

酒井紀伊守

松平薩摩守様

人々御中

忠吉

1096

昨日者御使者、殊鴨四、被懸御意候、御懇情之段、忝奉
存候、早々御禮可申上處、〔嗣字〕御城ニ相詰罷有候付而、致

延引候、何茂期責面之時候、恐惶謹言、

十二月廿二日

〔判〕〔花押〕「文字シレス」

蛭川喜左衛門〔親房カ〕
「シレス」

松平薩摩守様

人々御中

1097

「御文庫拾五番箱七拾九卷中」

猶々、昨日者路次故早々得貴意、御殘多奉存知候、以

上、

昨日者預御使者、猶更御國本之密柑壹籠、被懸御意忝奉
存候、折節御城相詰、御返答不申上候、猶期拜顔之節、
御禮可申上候、恐惶謹言、

極月廿七日

「詳かならず」〔判〕〔花押〕
重勝

松平薩摩守様

人々御中

喜多見久太夫

重勝

1098

昨日者御使者、殊更御國元カ參由候間、密柑壹籠拜領、
遠來と申名物、旁以過分至極、謹而頂戴仕候、早々御受
可申上處ニ、於御城御食被下事之外致沈醉候付而、延引
可預御赦免候、何篇途伺公、相積御禮可申上候、恐惶謹
言、

極月廿七日

正之〔判〕〔花押〕

阿部四郎五郎



松平薩州様
參人と御中

正之

1099

〔御文庫拾五番箱七拾九卷中〕

昨日者御來儀、殊緩く與御咄本望之至候、猶面話之節可
申述候、恐く謹言、

極月卅日

義直◎〔花押〕

尾張中納言



松平薩摩守殿
御宿所

義直

1100

〔拾三番箱五拾卷中〕

爲年頭之御禮、被差越使者、殊御太刀一腰、御馬代黃金
十兩被獻之候、遂披露候處、一段御仕合候、恐く謹言、

正月十五日

阿部豊後守
忠秋◎〔花押〕

松平和泉守
乘壽◎〔花押〕

松平伊豆守



松平大隅守殿

信綱◎〔花押〕

〔慶安四年卯十二月廿五日大隅守ト改ラル、考ニ供ス〕

松平大隅守殿

松平和泉守

松平伊豆守

阿部豊後守

1101

〔御文庫拾三番箱五拾卷中〕

御札令拜見候、寶樹院殿御逝去之儀相達、驚被存之由、
得其意候、依之、被差越使者候、被入念候段、及上聽
候、恐く謹言、

正月晦日

阿部豊後守
忠秋◎〔花押〕

松平和泉守
乘壽◎〔花押〕

松平伊豆守
信綱◎〔花押〕

松平大隅守殿

▽◎

松平大隅守殿

松平伊豆守

松平和泉守

阿部(豊後守)

1102

「御文庫廿三番箱廿三卷中寫」

御札令拜見候、如承意陽春之慶事珍重候、先以 公方様御機嫌能被成御座、年始之諸御禮可有之與、恐悅之旨、得其意候、猶御様躰爲可被伺之、被差越使者候、益御勇健、御儀式如例年首尾好相濟候之間、可御心安候、將又御樽着被獻之候、右之趣遂披露候處、入念候段、御喜色之御事候、委曲使者可令演說候、恐々謹言、

二月九日

久世大和守

廣之

稻葉美濃守

正則

阿部豊後守

忠秋

酒井雅樂頭
忠清

松平大隅守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一〇九二号文書ト同文ナリ〕

1103

「御文庫廿三番箱廿三卷中」

御札令拜見候、先月二日大坂御天守依雷火燒失之趣相達、被驚動候、雖然御殿御櫓等無恙、此段珍重之旨得其意候、入念候通各申談及 臺聽候、恐々謹言、

二月六日

阿部豊後守

忠秋

松平大隅守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一〇九〇号文書ト同文ナリ〕

1104

「御文庫廿一番箱五拾四卷中」

御用之儀可申渡候間、明十三日卯刻過、留守居一人私宅江可參候、以上、

二月十二日

〔久世広之〕

久 大和

松平大隅守殿
留守居中

▽◎

松平大隅守殿

留守居中

△

〔本文書ハ、「旧記雜錄追録」一三六七号文書ト同文ナリ〕

1105 「十三番箱六十卷中」

御札令拜見候、先月十五日 禁裏 院中炎上之儀相達、
被驚存之旨、得其意候、因之被差越使者候、念入候之段、
可及 上聞候、恐々謹言、

二月^{◎廿}〔十〕四日

稻葉美濃守[◎]〔花押〕
正則^{〔判〕}

阿部豊後守[◎]〔花押〕
忠秋^{〔判〕}

松平伊豆守[◎]〔花押〕
信綱^{〔判〕}

酒井雅樂頭[◎]〔花押〕
忠清^{〔判〕}

松平大隅守殿

▽◎

松平大隅守殿

酒井雅樂頭

松平伊豆守

阿部豊後守

稻葉美濃守

〔寛文元年皇宮火トアリ、考フヘシ〕

1106 「廿一番箱五拾四卷中」

歲暮之[◎]〔關字〕御内書可相渡候間、留守居一人、明五日四時分
御城江可參候、以上、

三月四日

〔土屋數直〕
土 但馬

松平大隅守殿
留守居中

▽◎

松平大隅守殿

留守居中

△

〔本文書ハ、「旧記雜錄追録」一六五六号文書ト同文ナリ〕

1107 「御文庫廿番箱五拾四卷中」

端午之 御内書可相渡候之間、留守居一人、明十三日四

時分御城江可參候、以上、

(稻美正則)

稻美濃

六月十二日

松平大隅守殿

留守居中

▽◎

松平大隅守殿

留守居中

△

(本文書ハ「旧記雜錄追録」一三八一号文書ト同文ナリ)

1108

「十三番箱五拾三卷中」

琉球布三卷并燒酎二壺・御肴一種、被獻之候、目錄通遂

披露候之處、入念候段、御機嫌能候、恐々謹言、

六月廿一日

阿部豊後守

◎(花押)
忠秋(判)

松平伊豆守

◎(花押)
信綱(判)

酒井雅樂頭

◎(花押)
忠清(判)

松平大隅守殿

▽◎

松平大隅守殿

酒井雅樂頭

松平伊豆守

阿部豊後守

△

1109

「御文庫貳拾一番箱五拾三卷中」

端午之 御内書可相渡候間、明日四時分、留守居一人御
城江可參候、以上、

七月五日

松平大隅守殿

留守居中

(正則)
稻美濃守

(忠秋)
阿部豊後守

▽◎

松平大隅守殿

留守居中

(本文書ハ「旧記雜錄追録」一九七三号文書ト同文ナリ)

1110 御檄令拜閱候、

公方様倍御機嫌好被成御座、目出度被存之由、尤之儀候、
將又、今度首尾能御暇就國元到着、以使者、羅紗十間并

御樽肴被獻之候、右之通遂披露候之處、御前江使者被召出、入念候段、御喜色[◎]之、御事候、恐々謹言、

七月廿三日

阿部豊後守

忠秋(花押)

松平伊豆守

信綱(花押)

酒井雅樂頭

忠清(花押)

松平大隅守殿

▽◎

松平大隅守殿

酒井雅^(梁頭)

奈平伊豆^(守)

阿部豊後^(守)

△

(本文書ハ、「旧記雜錄追録」一六四三号文書ト同文ナリ)

1111

「御文庫拾三番箱五拾卷中」

御札令拜見候、公方様弥御機嫌能[◎]被^く御座候間、可御心安候、將又、去御嘉定御祝之節、同名薩摩守着座被仰

付候儀相達、忝被存候由、得其意候、依之、被差越使者候、入念候趣可及、臺聽候、恐々謹言、

八月廿三日

松平和泉守

乘壽[◎](花押)

松平伊豆守

信綱[◎](花押)

松平大隅守殿

▽◎

松平大隅守殿

松平伊豆守

松平和泉守

△

1112

「御文庫廿一番箱五拾四卷中」

今度歸國御禮之使者佐多丹波、進上物持參、明廿八日四時以前、御城江罷出候様可申渡候、以上、

八月廿七日

稻美濃

松平大隅守殿

留守居中

「封面二」

松平大隅守殿

留守居中

1116

「御文庫拾三番箱五拾二卷中」

明廿日、東叡山 御佛殿御參詣候、不及供奉候間、可被
得其意候、還御以後爲伺御機嫌登城之儀、是亦被致無用、
翌日出仕尤候、恐々謹言、

九月十九日

阿部豊後守 忠秋◎(花押)

松平和泉守 乘壽◎(花押)

松平伊豆守 松平伊豆守

松平伊豆守

松平大隅守殿

乘壽◎(花押)

松平伊豆守 信綱◎(花押)

信綱◎(花押)

▽◎

松平大隅守殿

松平伊豆守

松平和泉守

阿部豊後守

△

1117 明朝日御玄楮付而、御禮無之候間、不及登城候、恐々謹
言、

九月廿九日

阿部豊後守 忠秋◎(花押)

松平伊豆守 信綱◎(花押)

松平伊豆守 松平大隅守殿

松平大隅守殿

松平大隅守殿

信綱◎(花押)

酒井雅樂頭 忠清◎(花押)

忠清◎(花押)

▽◎

松平大隅守殿

酒井雅樂頭

松平伊豆守

松平和泉守

阿部豊後守

△

▽○

松平大隅守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

△

1118 「十三番箱五十卷中」

御札令拜見候、去比以上使、息薩摩守、御鷹之雲雀拜領之儀相達、忝被存之由、得其意候、依之、爲御禮被差越使者候、入念候之段、及臺聞候、恐々謹言、

九月十二日

松平和泉守

乘壽〔判〕
◎〔花押〕

松平伊豆守

信綱〔判〕
◎〔花押〕

松平大隅守殿

▽○

松平大隅守殿

松平伊豆守

松平和泉守

△

1119 「十三番箱五拾卷中」

御札令拜見候、公方様弥御機嫌能被成御座候間、可御

心安候、將又、息薩摩守、湯治御暇被遣之趣相達、忝之

由、得其意候、依之、爲御禮被差越使者候、入念候段、

及臺聞候、恐々謹言、

十月朔日

阿部豊後守

忠秋〔判〕
◎〔花押〕

松平和泉守

乘壽〔判〕
◎〔花押〕

松平伊豆守

信綱〔判〕
◎〔花押〕

松平大隅守殿

▽○

松平大隅守殿

松平伊豆守

松平和泉守

阿部豊後守

△

1120 「廿一番箱五拾四卷中」

重陽之御内書可相渡候間、明日四時分、留守居一人御城江可參候、以上、

1122

〔御文庫拾三番箱五拾二卷中〕

明廿日、東叡山 御佛殿雖御參詣候、不及供奉候間、可



松平大隅守様

人々御中

義興

宗對馬守

1123

〔御文庫廿三番箱廿三卷中写〕

御札令拜見候、公方様御機嫌之御様跡爲可被相伺之被
差越使者候、益御勇健之御事候間、可御心安候、隨而御
道服五、并御肴一種被獻之候、右之趣遂披露候處、入念

1121

〔御文庫拾三番箱五拾三卷中〕

一筆致啓上候、今日者於殿中、得貴意大慶存候、然者

御約束仕候朝鮮貂皮五枚致進覽候、恐惶謹言、

十一月朔日

義興〔判〕

〔封面二〕

松平大隅守殿

留守居中

〔本文書ハ、旧記雜録追録一〕一三四八号文書ト同文ナリ

十月廿四日

松平大隅守殿

留守居中

稻美濃

被得其意候、還御以後爲伺 御機嫌、登城之儀、是又
被致延引、翌日御出仕尤候、恐々謹言、

十一月十九日

阿部豊後守

忠秋〔判〕

松平伊豆守

信綱〔判〕

酒井雅樂頭

忠清〔判〕

松平大隅守殿

▽◎

阿部豊後守

松平大隅守殿

松平伊豆守

酒井雅樂頭

△

候段、御喜色之御儀候、次參勤之儀付而、別紙之通承届候、如御定、四月中參府尤候、猶使者可令演說候、恐々謹言、

十一月六日

松平大隅守殿

稻葉美濃守

阿部豊後守

酒井雅樂頭

▽◎

松平大隅守殿

酒井雅樂頭

阿部豊後守

稻葉美濃守

(本文書ハ、「旧記雜錄追録」九九三号文書ト同文ナリ)

1124 「御文庫拾三番箱五拾卷中」

御札令拜見候、公方様御機嫌之御様躰爲可被相伺被差越使者候、益御勇健之御事候間、可被御心易候、將又、御着一種被獻之候、遂披露候之處、一段之仕合候、恐々

謹言、

十一月十日

松平大隅守殿

阿部豊後守 ◎〔花押〕

忠秋〔判〕

松平和泉守 ◎〔花押〕

乘壽〔判〕

松平伊豆守 ◎〔花押〕

信綱〔判〕

▽◎

松平大隅守殿

松平伊豆守

松平和泉守

阿部豊後守

1125 御札令拜見候、去夏國元到着付而、爲御禮被差越使者候之處、彼使者時服拜領之儀、忝之旨得其意候、入念示預之趣可及 御聽候、恐々謹言、

十一月廿三日

阿部豊後守 ◎〔花押〕

忠秋〔判〕

松平和泉守

1126

〔御文庫廿三番箱廿三卷中亨〕

御札令拜見候、

公方様益御機嫌能被成御座、珍重之由尤之事候、將又、
參勤時分之儀、以使者被相伺之候、紙面之通、及 高聞
候處、其方者來年四月中國許發足、同氏修理大夫者、先
達而可致參府之旨、被仰出候、可被得其意候、委曲使者
可令演說候、恐々謹言、

十一月廿日

板倉内膳正◎(花押)
重矩判

松平大隅守殿

乘壽判◎(花押)

松平伊豆守
信綱判◎(花押)

▽◎

松平大隅守殿

松平伊豆守

奈平和泉守

阿部豊後守

△

1127

〔廿一番箱五十四卷中〕

大隅守殿江、御鷹之鶴被道之候間、請取候、留守居一人、
今七時分私宅江可參候、以上、

十一月四日

久世廣之判
大和

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一四六〇号文書ト同文ナリ〕

松平大隅守殿

土屋但馬守判◎(花押)
數直判

久世大和守判◎(花押)
廣之判

稻葉美濃守判◎(花押)
正則判

▽◎

松平大隅守殿

稻葉美濃守

久世大和守

土屋但馬守

板倉内膳正

△

松平大隅守殿

留守居中

松平大隅守殿

留守居中

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一三五二号文書ト同文ナリ〕

1128 「御文庫廿一番箱五拾四卷中」

御鷹之鶴、大隅守拜領候、可相渡候間、留守居一人、只今私宅江可參候、以上、

十一月廿三日

土(土屋敷直)但馬

松平大隅守殿

留守居中

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一五六七号文書ト同文ナリ〕

1129 御卓二脚并御肴一種、被獻之候、首尾好遂披露候、恐々謹言、

十一月廿六日

信之(花押)判

松平日向守

松平大隅守殿

信之

〔本文書ハ「旧記雜錄追録」一九四四号文書ト同文ナリ〕

1130 「十三番箱五十三卷中」

於東叡山、寶樹院殿御一周忌之御法事有之付而、明朝日御禮無之候間、不及登城候、恐々謹言、

十一月晦日

阿部豊後守(花押)忠秋判

松平伊豆守(花押)信綱判

松平大隅守殿

∇

松平大隅守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

△

1131 「十三番箱五十二卷中」

一筆致啓達候、今度日光江琉球人就參詣、御登山被成候由、日光御門跡聞食、寒天之時分別而御大儀千萬被思召

候、隨而輕少之至御座候得共、甘干壹箱被進之候、此等之趣相意得可申入旨御座候、恐惶謹言、

十二月十二日

六角李頭(廣賢カ)
判(花押)

松平大隅守様

1132 「御文庫拾三番箱五拾卷中」

御札令拜見候、公方様御機嫌能被成御座、目出度被存候、弥御様躰被承度付而、被差越使者候、益御平安御事候間、可御心易候、將又、御羽織五并御肴一箱、被獻之候、遂披露候之處、一段仕合候、恐々謹言、

十二月十六日

阿部豊後守
忠秋(花押)
判

松平和泉守
乘壽(花押)
判

松平伊豆守
信綱(花押)
判

松平大隅守殿

▽◎

松平大隅守殿

松平和泉守

阿部豊後守

△

1133 「十五番箱七十六卷中」

口上之覺

御感狀・或御書・或御褒美、先祖江被下候趣、并家來之者ニ茂其品於有之者、委細書付、可被差出候、已上、

正月廿二日

堀田下總守(正仲)
阿部豊後守(正武)

松平大隅守殿

海外書類

附
錄
舊
記
雜
錄
卷
廿
五

1134

〔在御文庫二番箱中〕

朝鮮國禮曹佐郎黃

致誠

〔朱印〕

奉復

日本國日向・大隅・薩摩三州太守島津藤原朝臣武久

足下

書來得審、

迪吉開慰、所

獻禮物謹稟、

堂上轉

啓收了、將土宜正布拾伍匹并

給賜白苧布貳匹、付回使、帷

領留、餘冀

自玉、不宣、

萬曆十九年七月日

〔天正十九年二當ル〕
禮曹佐郎黃

致誠

〔朱印〕

奉

復

朝鮮國禮曹佐郎黃

致誠

謹封
〔朱印〕

日本國日向大隅薩摩三州太守藤原朝臣武久 足下

1135

〔在御文庫二番箱中〕

回文

〔朱印〕

武生許豫還、接得

日本薩摩州修理大夫藤原義久來文、文中意趣甚好、有

愛厚我、且見爾國君臣、思與我

天朝、欵好情通、良是美意、但聞、關白平秀吉屢聲言、

內犯動衆興師、此豈成欵好之道、要得欵好、必須休兵

息民、輸誠效順、

表請納欵、方是華夷正理、若只造船徵兵、東侵西削、耗

財殘命、有挾而求、必神怒人怨、如之何能成欵好也、

不思我堂堂、

天朝

主聖臣良、如日中天正當全盛世界、國富兵強、軍雄馬壯、

安若磐石、爾國君臣、豈不聞知乎、吾知爾義久及幸侃

并左右用事諸臣、俱有英烈正氣忠愛、關白又知崇重我

中國、且各有智謀、諳曉時勢、可以忠言婉勸關白、享福

傳位、世守陸拾陸州、養賢安國、揚名萬世、最是長策、

而關白亦素是剛直之主、必將爾聽爾、又得真心報主之

道也、茲因爾有文來、我富有文答、乃彼此講好之禮、

不敢疎失、爲此、不憚萬里跋涉積誠、特遣巡海守備劉

可賢・軍門贊畫姚士榮・名色把總許豫・伍應廉等、及

原在薩摩州差使人張昂、同往敬復、幸祈體亮母忽、

〔文祿三年〕
〔萬曆貳拾貳年〕
〔陸月〕

欵差提督軍務兼巡撫福建地方都察院右僉都御史許（字遠）回文

（本文書ハ「旧記雜錄後編二」一三三五号文書ト同文ナリ）

1136

〔在御文庫二番箱中〕

檄文

〔朱印〕

欵差提督軍務兼巡撫福建地方都察院右僉都御史許（字遠） 檄告

大閣先生關白知道、我久聞、

先生掌握兵柄、大名若雷、大福若山、儘海外無雙之品

也、統率陸拾陸州山河赤子、豈非英雄豪傑者所爲、我

天朝、自

洪武皇帝開國以來、計貳百餘年、雖

主聖臣良、無異唐虞三代世界、而一念懷柔遠人之道、實

惓々懋々、無一日息也、茲者、舊年有爾薩摩州修理大

夫藤原義久、將文書壹通、付我武生許豫、同本州通（事）

張昂、賣到福建交送與我、我誦其文中、意趣甚好、且

稱爾國君臣、思與我

天朝歎好、我思此樣、文意必出于

先生高妙、則知平昔謠傳、爾國屢欲興兵內犯、率皆奸

徒勾誘邀利者、倡爲此說、以污

先生美名、遺累◎成◎德、今當不辯而破矣、似此安享天

年、靜回造化、而

天地神明必保佑

先生積善之報、理當

天賜貴子貴孫、世濟大位而揚名萬禩也、吾今特遣守備劉

可賢・軍門贊畫姚士榮・名色把總許豫・伍應廉・同原

在薩摩州差使人張昂、同臺文前來回答、義久因思

先生在主日本、且久瞻仰風采、乃謹具檄文壹通、附

候、

鈞座、幸惟照諒是禱、

大明萬曆貳拾貳年陸月「朱印」十二 日檄文

(本文書ハ、「日記雜錄後編二」一三三六号文書ト同文ナリ)

1137 「在御文庫二番箱中」

傳令晉州

卞元柳光文趙石宋千乞尹永守河達朴崔有命令、呂鄭秋命鄭得營鄭億明魯內部乞鄭守等

汝矣等、處有 旨據、無遺出來、亦再傳令、而傳之者

(采)未傳、爲手諭汝矣、徒視而不應、爲臥手諭、一未見回答、

故又送傳令爲去手、今去黃允祥、言聽我國人書等、已無

遺率來爲去、如中州有褒啓重賞◎爲事、是昆母視尋常、火迫

私行爲手矣、若不出來、爲手諭良置、晉州及泗川等賊、

幾許留屯、是如從實告目爲弥、汝等當永倉卒之間、勢不

得已、陷於賊中、仍此衣食、姑留其居、爲手諭良置、無

異於探席穴、是沙餘良 天兵已爲大到、水陸並進、蕩掃

之時、難免玉石俱焚之速、是去等、近日達兩川、水所阻、

時未私兵、爲是昆汝等、先幾出來以保其身、豈不樂乎、

汝等本非他國之人、實是我國之民、雖在彼陣、心實爲國、

則賊之形止、多寡虛實、已詳細通示、若有可擊之勢、則

汝等盡心內應、或夜擊、或襲攻、以成奇功、則汝等當受

無窮之賞、是昆汝等誰畏而不出耶、道則目前與汝等、橐

弓同鄉知舊之情、萬無深推之理、是弥本州牧使、是喻良置、不連道令、是昆亦無詰究之端、千萬勿疑爲手矣、再々如此申諭者、皆出於誠心、是沙餘良 天兵未到之前、斯速出來、緣由取今去人、一々言聽、則可知其實、是弥汝等同心賊中、戰馬已十分周旋多數出來、則其功亦大、必蒙其賞爲深、天將欲先出汝等、然後亂事爲計、爲去等、此時不出、則終見死亡、是昆速爲身謀出來爲手矣、天兵亂事時、則道亦必爲先鋒、雖見汝等之面目、何暇及救耶、汝等更審思之、與其遷延來免池魚之殃、孰若早出保身耶、凡此賊中形勢、已詳探出來、有可爲之勢、則天兵未到之前、道亦當與汝等合力、攻陷賊陣、則非徒有光於道、實是汝等皆受功臣之職、永傳後孫、是昆時哉時哉、不可先也、若天兵已到之後、則千萬軍中、何顯已功耶、如其不然、則火速出來、與我同事、汝等所知、賊中虛實、山川夷險、道路遠近、已詳細探報、天兵亂事之時、與汝等合勢先鋒、乘便指導、則道亦一以爲天將前稱美、汝等之村勇、一以爲上達明廷、得蒙重賞爲手事、是昆此皆眞

實至當之言是喻、況弥金海居李石、奴去壬辰年投入賊中、賊中之事、已一々告目爲集、以緣由上達、至於守門、將除授之、則出來、即受褒賞如舊安居、爲去等如此事、汝等尙不聞耶、大槩蔚山失捕清正之後、天朝皇上下怒、決策親征已駐遼東、令十二諸國軍兵、三百餘萬、大到于本道、左右全羅、忠清等道、千里瀰漫、山野震動、叱兮不喻、糧餉億萬、峙如山積、是去等姑待草長、休軍養馬、爲有如乎、近來乘機亂事爲手矣、定三大將各率百萬師、分三道左右挾擊、赤地蕩滅勢如雷電霹靂、無遺噍類、隻輪不返、是昆汝等亦未聞如此天威耶、道段一道、主將以萬、無容欺先信之理、爲昆賊中凡事、已一々告目爲手矣、汝等出來之計、預先奇州、則領入率來道、以各別帶率、惟其所願、或爲軍官、或爲戰士、或爲牙兵、任意從事、期於成功爲手事、是昆到傳令、即時亂行、毋致迷悞者、

戊戌五月初七日

「慶長三年」當ル

節度使判

（本文書ハ、「日記雜錄後編三」四〇二号文書ト同文ナリ）

「在御文庫二番箱中」

論劄

天朝宣諭倭將、尔今侵害朝鮮、棲身於叢林峻嶺、晝夜勞苦、食用不敷、且尔家中、田地都邑、蕩然盡奪、子女又爲所質、而夫妻子母、經年不得一面歡聚、苦不可言、我今

天朝兵馬多來、水陸夾攻、進無生門、退無歸路、不知何時休息、終必死亡而後已、我知尔等、皆出於威勢所逼、恐尔內變、陷尔等於死地、不若乘我天兵來攻、放尔一條生路、揚帆渡海、免受刑戮、歸亦有名、豈非明哲見機之上策、故特差役、使尔等知之、如欲休兵息戰、保身保家、可差的當通事來講、如不聽宣諭、或有他圖別議、亦速回報、我有天兵百萬在此、何難於征勦、但念尔無辜、今雖出沒擄掠、實出於勢不得已、非其本心、故不忍加誅、特此諭之、



「在御文庫二番箱中」

劄一兄

〔本文書ハ「旧記雜錄後編三」四三八号文書ト同文ナリ〕

萬曆貳拾陸年柒月
〔慶長三年三箇月〕^{◎廿五}〔朱書〕

〔日典史龍涯與友理書〕

慶長八年五月吉日、朝鮮人等、謹百拜上書于閣下、伏以、愚等聞、舉竿求魚者、不惜香餌、設陷謀虎者、不愛美肉、古之帝王、欲闢土地、朝諸侯、跨四海、撫萬姓者、不以兵甲之費、忘後日之大功也、大抵、天予不取、反受其咎、時至不行、當有後悔、是以、蛟龍得慶雲而不起、則未免池中之老、猛虎遇蹇兔而不逐、則難逃林下之飢也、愚等見、嚴霜一降、草木已枯、則雖以烏鵲之輕、必能動其枝而隕其葉也、怒濤一衝、堆岸已傾、則〔能〕^{◎雖}以螻蟻之微、必能穿其穴而崩其沙、今也、朝鮮一國、極爲衰廢、積年兵戈、民粟蕩破、兵法所謂乘虛、故事半功

倍、惟此時爲然、

素書曰、涓々不塞、將爲江河、熒々不救、炎々奈可、
兩葉不截、必用斧斤、若使朝鮮、釀成強富、則雖倍

大閤樣之勇、莫能窺也、

蓋、日本之強、

天下之難敵也、西通大明、東振南蠻、南動琉球、而樞

威不足於朝鮮者、獨何歟、十年屯師、無寸地之得、

大閤一薨、捲旗爭退、彼朝鮮兒童走卒、今必東向而長

笑矣、前有 大閤之雄、而能示威於天下、後無

內府樣之名、而乃失權於諸侯、則將必爲貴國之恥也、故

愚等之如是請兵者、非徒爲我也、爲貴國也、昔、唐太

◎(平也)

宗、欲征蕃國、問李靖可以爲將者、靖對、曰何史那社

甫 執失思力、契苾荷力、皆蕃臣之知兵者也、其山川

道路、蕃情逆順、部落數種、歷々可知、望陛下、任之

勿疑、太宗笑曰、蕃人皆爲朕役使、以其人、攻其國、

中國之勢也、遂以爲將、卒定蕃地、想其時也、滿朝臣

子、豈無三人之能者、而靖勸以委任者、意其能料敵制

勝、都在其人也、

三略曰、謀及負薪、功乃可述、孫子曰、知彼知己、勝

乃不殆、知天知地、勝乃可全、朝鮮之讖曰、辰巳聖人

出、午未樂堂々、又云、漢陽過二百年則、必爲他人所

都、此愚等之知天也、行軍結陣、所過所向、山川險阻、

昭列目前、此愚等之知地也、朝鮮之王、素非王派也、

貪虐無厭、生民塗炭、故叛逆連起、干戈相尋而、鄭汝

立李夢鶴等、俛起阡陌、召集僕隸、斬木爲兵、舉竿爲

旗、唱義一呼、英雄雲集、三百餘城、幾爲所吞、謀既

疎拙、卒死人手、而士皆嘆惜、至以涕泣、其後壬辰之

年、聞貴國舉兵而渡、莫不引領東望曰、彼必拯我於水

火之中也、爭棄弓矢、無意防禦故、攻城取都、如入無

人之境、而彼見、殺戮如麻、劫掠如虎、皆始攘臂圖敵、

無有屈服、當此之時、如以貴國之將、不殺民之父兄、

不害民之子弟、不毀其宗廟、不遷其重器、則朝鮮之國、

今必爲貴國之土地也、今則、賦役甚重、民多陷溺、曷

喪嘆極、嘔吟思聖、若大旱之望雲霓故、飢者之食、渴

者之飲、固不待乎瞬息矣、此愚等之知彼也、朝鮮之人、

愚而多鈍、怯而善退、炮鼓一驚、望風奔潰、而到此之人、薰習精氣、效學銃志、可以此一、能敵彼十也、此愚等之知此也、

願以萬餘之衆、欲取萬乘之國者、無他、將欲不血刃而謀制敵也、誅其一而愛其萬也、行仁義而得民心也、除其舊苛而流我新政也、誠如是也、◎故民之悅之、猶解倒懸也、民之歸之、由水之就下、而全慶二道、不待月而爲我之所有也、雖然、兵、死地也、而不可輕言也、得一萬則、可以直擣三韓也、得不盈萬則、亦足以吞據漢羅也、漠羅之國、在於朝鮮西南百里之外、而其地又不過百餘里也、龍飛之馬、凌雲之鷹、千珍萬寶、不可勝數也、得寸圖尺、釋遠謀近者、兵家之道、故臨機應變、都在於愚等之籌畫也、伏願、閣下、俯聽愚等之言、收許朝鮮之人、其糧食器械船軸等物、從我所請、翼輔王孫、唾掌西向則、天、不欲使愚等、有爲乎則、夏未可期、如欲使愚等、有爲乎則、當今之日、捨愚等、其誰也、

昔、秦民之厭亂也、勝廣一叫、戍卒之中、而函谷響應、漢人之怨莽也、光武獨奮孤軍之末、而諸侯影從、苟能順天人、合龜筮、而起則、柔能制剛、弱能勝強也、況彼朝鮮之國、君既易代、臣又結惡、忠良竄逐、姦佞登進、上助桀以爲虐、下凌民以利己故、若見愚等、戴王孫而渡則、必皆鼓舞而相賀曰、先王之孫也、不可失也、扶老携幼、以迎愚等、謂若去虎口而歸慈母也、夏同拾芥、力易摧枯、抑何異於決江河以溉熯火、臨不測以擠欲墜耶、◎平出愚等之請伐者、固非慕利僥倖也、將欲誅暴救亂也、昔、袁紹不起則、漢家五族忠賢之禁、不除、劉裕不興則、晉室藩鎮強臣之患、不息、◎今古朱溫不來則、唐世宦官宮妾之亂、不止也、時有◎今古人無新舊也、夫、知其事之可成、而爲謀則、其謀必成、不知其事之不可成、而爲謀則、其謀必敗、愚等、誠知謀之可成故、以此書、明告於閣下、伏望閣下、留意焉、昔、越王出見怒蛙、乃爲之式曰、爲真有氣也、古之英君、將欲有爲於天下者、雖見微物、尙起感也、矧此舍

五倫、吞七書、運籌帷幄之中、決勝千里之外者乎、

愚等聞、昏亡則齒寒、塔重則堂高、苟能成夏則、成事

之功、在於愚等、成功之本、在於閣下、德不可忘、

恩不可負、歲々聘幣之禮、年々和睦之信、自今而始、

後當繼通也、橫述西北、長作藩籬則、

閣下高枕肆志、國自堅固矣、子と孫と、繼と承と、雖欲

不長、其可得乎、謹百拜以

聞「以下切テナシ」

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」一八一五号文書ト同文ナリ)

「在御文庫二番箱中」

三月三日、朝鮮人等、百拜上書于

御前、伏以、我等聞、積土成山、風雨興焉、積水成淵、

蛟龍生焉、是以、毛羽集而沈舟、叢薪聚而折軸、昔、

少康有衆一旅、卒復夏禹之績、高宗得馬一匹、終繼宋

祖之業、古之英主、有爲天下者、在謀淺深、不在多少

也、

大抵、上有其主、下無其臣、不可以舉大事也、下有其

臣、上無其主、亦不足與成大功也、故、趙之程嬰、輔

逃匿之孤武而能踐其位、晉之子推、衛饑餒之重耳而能

返其國、古之良臣、建業宇內者、繫時得失、不擊衆寡

也、我等所言、雖似迂遠、事之利害、謀之成敗、計既

積年、思已累日、豈可以無實之事、輕達於御前乎、

蓋兵者、不可以輕發也、朝鮮之強、古之難當也、只恃

國衆、妄犯敵土者、謂之驕兵、兵驕者、敗故、唐太宗

之威、徒中矢而歸、漢武帝之雄、必重幣而後降、

征無道、救亂誅暴者、謂之義兵、兵義者、王故、成湯

以七十里、爲政於天下文王以百里、無敵於四海、

由此觀之、以燕伐燕、以暴易暴者、雖舉天下而動、無

益於成功也、以直治曲、以順服逆者、雖制一挺而起、

能挫堅強也、

今之可憤者、朝鮮之王、素以不辟、流毒一邦、浚民肌

骨、易喪之嘆斯極、來蘇之望方急矣、仁主之不作、未

有疎於此時也、生民之憔悴於虐政、未有甚於此時也、

飢者易爲食、渴者易爲飲也、事半古人、功必倍也、
彼李龜生者、先王之直孫也、請收我國被俘之衆、數得
一萬則、翊戴王孫、渡入高麗、假日本之威聲、行我等
之奇計、除舊苛法、施新仁政則、民之悅之、猶解倒懸
也、民之歸之、猶水就下也而舉欣欣然鼓舞而相賀曰、
吾王之孫也、不可失也、箪食壺漿、爭迎我師、全慶二
道、不血刃而坐得矣、

夫如是則、成事之功、在於我等、成功之本、在於御
前、德不可忘、恩不可負也、◎禮年歲聘幣之「年々」年和睦
之信、自今而始、後當繼通也、若以薩摩之力、獨難謀
事則、願達◎合領內府様、終始勉圖、千萬幸甚々々、謂予
不信、有彼天日、謹百拜頓首、

〔本文書ハ「旧記雜録後編三」一〇六〇号文書ト同ナリ〕

1141 「在御文庫二番箱中」

暹邏國握浮勝、不戢鈞祿、高望君藍字、奉◎平出日本搦子馬
國王麾下、船主五官遇風、飄泊大泥、被難逃入暹邏港時、

以鄉親來托、報王、蒙王思見、貴國素存天地之量、常懷
柔遠之心、凡四隣興販者、咸優恤有方、正欲着人往來貿
易、結爲伯仲之邦、茲逢有人到此、大稱夙心、且此人忠
厚、力量能堪重任、可備船送回、使他得年年來此處、經
商永通兩國之好、遵照外、即備船送五官回、今冬幸念王
德意、着船復來連繹不斷、永通和好、一時無可爲貢、聊
具黃檀香、觀音佛一身、活麝一隻、少伸、贊敬、笑納、
不勝感激、瞻仰之至

萬曆丙午年四月

日書

〔慶長十一年丙午ニ當レリ〕

1142 「在御文庫二番箱中」 「家久公御譜中年間不知ニ在リ」

以上

預御使札、忝拜見申上候、仍御領江此方船中之者流着申
上候處ニ、別而御厚情、拾壹人送り被下候、必々此方ヨ
リ以壹人御禮可申上候、恐惶謹言、

おらんたかひたん
しやこうへ

(元和六年)

三月五日

(重禮)

三原諸右衛門様

(貞昌)

伊勢兵部少輔様

(忠政)

喜入攝津進様

尊答

御記録奉行

〔上包〕

御記録奉行江相渡書付一通

〔右一通〕

進上 御奉行中様

おらんたかひたん
しやかかうへ

〔御文庫廿三番箱巻巻中〕

〔御文書御添書 二拾一通〕

1143 掛物一幅

僧觀覽与書出す

頼朝卿御判有

右者、去年於江戸、名越右膳被相求、進上之候處、御記録所江可納置旨 御意候、依之、此節右掛物渡置之條、至後年、堅固可有格護候、以上、

享保九年辰正月日

嶋津内膳

久兵〔判〕

1144

頼朝公御筆

覺

御掛物 一幅

右此節被相下置候間、屹與可被致格護置候、仍而如斯候、以上、

寛政五年丑正月八日

谷村孫右衛門〇〔印〕

西恰之介〇〔印〕

御國元

黒田嘉右衛門殿
御記録奉行

〔右一通〕

1145 頼朝公御筆掛物

一幅

右者、昨十七日古筆了意宅江私持參仕、御家江御傳來之御筆與者、〔關字〕御判形之模様等、少く相替候様ニ茂相見得候趣を以、眞僞相究給度旨申達候處、了意得與致拜見、

賴朝公御筆相違無御坐候、間々墨筆新敷見得候所茂御坐候得共、是者相損候所を繕ひ爲申ニ而可有之候、全殊 賴朝公御筆者、假名者眞字與者御模様相替候 御手ニ而御坐候、此御掛物、決而僞物ニ而者無之、御親筆無疑物ニ御坐候段、承届申候間、此段申上候、以上、

子十二月十八日

兒玉喜藤太

〔右一通〕

1146 建武四年十二月廿日

在御判形

嶋津大夫判官殿

右

一年號ハ建武欵、第三十七代孝徳元ニ大化年號始ルヨリ

已後、武ノ字有之年號ナシ、建武四年丁丑ハ、延元二年タリトイヘドモ、後醍醐吉野帝ニテ用之玉フ歟、

一御判形ハ尊氏ノ御判歟、正慶二年癸酉、京都ノ六原・鎌倉攻亡シ、北條高時自害ス、故ニ曆應元年ニ尊氏ヲ被任征夷大將軍、建武四年ハ其前ノ年ナリ、

一嶋津大夫判官殿ハ、五代貞久法名道鑑ノ二男六代氏久法名齡岳ノ兄三郎左衛門尉大夫判官宗久、法名久阿ノ御事歟、然ラハ宗久十六歲時ノ御書ナルベシ、

〔右一通〕

1147

一右朝鮮國禮曹佐郎黃致誠奉復、日隅薩三州太守島津藤原朝臣武久公書簡、筆跡・料紙・朱印等、爲彼國之物事、無疑候、雖然、武久者 忠昌公初之御實名、今書簡之年號を以考候得者、非無疑、

一忠昌公者寛正四年五月三日御誕生ニ而、永正五年二月十五日之夜、御年四拾六ニ而御逝去、

一大明神宗王之萬曆十九年者、日本之天正十九年ニ相當

候、然者、永正五年より八十四年後ニ而候、大明之年
號を以考見候而者、忠昌公ニ而無之候、

一大明之萬曆十九年者、吾義久公之御治世ニ相當候、
然者義之字を武ニ書違候か、左茂候ハ、時代致符合
候得共、此方より被遣候書之返簡ニ而候得者、當所之
實名彼方名書違申寄之事ニ而無之候、合點不行事候、
一得與按候ニ、忠昌公御治世之始、朝鮮王別ニ僭號を萬
曆與、先達而建たるなるへし、仍上件之數條、爲後考
書記置者也、

寶永五年戊子四月廿八日

〔右一通〕

肥後二右衛門

田中五右衛門

1148 昨日者預御尋、寛々得貴慮、大慶奉存候、然者、其節御
見せ被成候東求院殿御詠歌之一紙、則准后御方入御覽
候處、無〔御〕紛御眞跡之由仰候、右致返進候、且又御五
代御官位等之儀、別紙書付進申候、御落手可被下候、以

上、

二月十一日

中川石見守

追而今一件、治部大輔申合、猶否自是御しらせ可申
入候、左馬頭へも對話之節、御物語趣可申傳候、以
上、

遍詢様

〔右一通〕

1149

尾州御寺
尊壽院

右之隠居京都江居住
界如院僧正

右薩州御家ニ付、近衛龍山様御詠歌三首之御謹書一枚、
右隠居より遍詢方江もらひ申候本書ニ而〔者〕無之、御草
案之留之様ニ相見得、御眞筆之儀茂不相知候付、諸大夫
中川石見守へ申遣、准后様入御覽候處、近衛東求院様
御詠歌御眞跡無紛由候、御家ニ御本書ハ可有之候得共、
若御取添被差置候ハ、御用相立可申儀と奉存候付、私

迄見せ申候、御用相立候ハ、遍詢江もらひ置、幸奉存候由ニ而、石見守書狀別紙相添、使僧薩州之禪外と申傳を以、右之趣遍詢より被申越候、以上、

二月十四日

遍詢様

中川石見守

〔右一通〕

1150 大坂江罷在候伏見屋作兵衛・同金兵衛與申唐物屋、以前

より私爲存者ニ而御座候、此間於大坂、旅宿へ參申候ハ、薩摩守様御先祖様江、太閤様御代五奉行より之御感狀之扣敷與相見得候もの、致所持候へ共、拂先も無之、徒ニ差置候間、私江くれへき由を申持來候、依之見申候處、於朝鮮國御戰功ニ付而、御感狀之扣かと相見得候、何れ之筋ニ而も、右式之物他所江有之候儀、不好事與考候故、私江くれ候様ニ與申聞せ、此節持下、先日其御元江入御内見ニ候付而、御記錄奉行江御見せ候處、此御感

狀之御正書ハ無之、寫迄有之候由申候由、依之右段と弟子丸與次右衛門を以奉得 御内意、右御感狀備 御内覽候處、是者御重寶ニ可罷成與被 思召候間、御記錄所へ納置可申旨、昨日與次右衛門を以被 仰出候間、則差出申候條、御記錄所江納置候様ニ可被仰渡候、以上、

亥十月廿八日

嶋津帶刀

佐多豊前殿

〔包紙〕
嶋津帶刀殿覺書壹通

五大老御感狀ニ相付書付

〔右一通〕

1151 寫

御記錄奉行へ

一知行目錄三通

あちやち
満尾越中

池田與助

右之通宛書有之候付、段々相糺候得共、右之者共子孫又ハ何故ニ差出置候儀、不相知候條、御記錄所へ致格護置候様申渡、可相渡候、

一古系圖一通

右何者之系圖、何故ニ差出置候儀、不相知候條、是又右同斷、可致格護置旨申渡、可相渡候、

右之通可申渡候、以上、

七月杳

「封紙」


享保六年丑七月三日

一知行目錄三通 あちやち 満尾越中 池田与助 江宛書有之

一古系圖壹通

「右一通」
但何某系圖共不相知候、

1152 右之懷紙者、十六代之 大守三位法印龍伯公之御詠歌ニ

而、御家老平田越前宗親以自筆被書置候、龍伯公御事、三位法印御紋任候、雖然、口 宣無之故、爲後證可納置官庫之旨、依佐多豊前殿御下知如件、

御記錄所

寶永四年丁亥

十月廿八日

肥後(盛季)二右衛門(花押)判
市來早左衛門(宗年)判
田中五右衛門(國明)判

「右一通」

1153 黃門様より福崎左衛門太夫殿江銀子御借用被成候節之御

借狀壹通、上原五郎左衛門致所持、先年差出置候、最早

御用有之間敷候間、捨可申哉之由、達 貴聞候處、御記

錄方江納置可然候、前々者、右式ニ而御借銀を茂被成候

儀、有之候與、以來御子孫様ニ茂被遊御存知筋、可然哉

與被 思食之旨、 御意候條、御藏江可納置者也、

元祿四年辛未二月三日

「右一通」

佐多豊前(久遠)

覺

御懸物 一幅

貴書令拜讀候早與御書出

義弘公 秀頼公江之御返翰

右者 義弘公御直書、長州之者致所持居候を、肥後熊

本商人境定之丞、親代買取取置候由ニ而、此節御當地江
持來候處、鯨嶋吉左衛門取入差出候付、御用相成、去

ル卯年、從

家久公同様之 御返翰、

宰相様御用相成、御記錄所江被相下置候、御掛物一

緒ニ、御記錄所格護被仰付候條、至後年鹿抹之取扱無
之様、屹與可被取計候、以上、

但表粧入付之箱御用相成候儘ニ而被相下候、

嘉永四年

亥十二月廿八日

豎山武兵衛(利武)〇「印」

御記錄奉行

「右一通」

覺

御懸物 一幅

不寄存處從

秀頼様被成下御書、先以忝奉存候與、御書出有之、

右者

中納言家久公御筆ニ候處、天保十三寅年

齋興公御參府之節、大坂御留守居勤高崎金之進より、御

内々入 御覽候者、元來大坂御城内襖江張付有之候を、

張替之節何様之譯合を以、大坂詰長州之御留守居手ニ入

候哉、於 此御方様者、格別之御寶物可有御座候付、御

用相成候者、可差上旨咄合有之、依而金之進貫請置候由

ニ而、差出候處、御用相成、表裝被仕立置候様、同人江

被仰置、同十四卯年 御下國之節、被遊 御持下、弥

思召之譯被爲 在、御記錄所江被相下候條、後年鹿抹無

之様、格護可有之候、以上、

天保十五年辰正月廿一日

碓山將曹〇「印」

御記錄奉行

「右一通」

1156

口上扣

御掛物 一幅

義弘公御筆

右者去月末、肥後熊本之商人境定之丞與申者、九州間屋
和田覺左衛門所江持越居申候付、間屋方 御品柄手廣取
噉不仕様申聞候處、早速荷作仕筈之所〔江〕參掛、右噉承、
乍恐大切成御品柄與拜見仕、直〔受〕〔請〕申候、依之乍恐
差上度奉存候、尤此 御書前方者長州江卷物ニ而持居候
を、右定之丞親代貳拾年以前相求、太切ニ格護仕居、此
節御掛物ニ仕候由御座候、

十一月

鮫島嘉左衛門

「右一通」

1157

一寛永三年之秋、
秀忠公〔平出〕・家光公御上洛、
家久公〔平出〕御
家久公權中納言從三位ニ御敘任、
供奉、八月十九日

此日依

勅命、寮之御馬御拜領、

一近衛信尋公御法名應山、元和九年關白、正保二年御出
家、實ニ後陽成帝第四之御子、近衛信尹公之御養子、

一後水尾帝御事、後陽成帝之御子ニ而、應山公與ハ御兄
弟ニ而候、

後水尾院勅答御震翰近衛應山公御書

「右一通」

1158

覺

一普光院御所より琉球國御給之御文書一箱并御昇進之
儀、被遊 秀忠様より御内書壹ツ、寛永十八年、從
公義御系圖之儀被仰渡、嶋津彈正江被仰付、於私宅相
しらへ候節、右御文書御納戸より相請取、彈正相果候
以後返上之首尾不相知候ニ付而、大膳殿左衛門家相續
之内、其御沙汰爲被仰渡由候得共、其首尾不相知候間、
得與相札、右御文書有之候ハ、可差出旨承知仕候、

一右之趣左衛門并役人共ニ茂申聞候處、右躰之儀存たる

者無御座候、依之嶋津彦太夫存罷居儀茂可有之與存、相尋申候處、成程存罷在候、先年田中五右衛門殿御記録奉行御勤之内、右之御沙汰彦太夫江被仰聞候故、右御文書其外御文書、彈正死後返上仕、吳國座筆者辨官新右衛門殿より、其節此方中抑伊東孫左衛門殿宛書之請取有之候付而、右請取田中五右衛門殿江、彦太夫より於御屋形被相渡、請取被置候、彈正より差出置候請取、今以御記録所江有之候儀、彦太夫存不申候付而、右請取申下候儀者、存寄不申候、辨官新右衛門殿請取、彦太夫より五右衛門殿江被相渡候、請取者取置不申候旨、彦太夫被申候、

右之趣御尋ニ付、此段申上候、以上、

〔朱力キ〕
〔元文四年〕 未八月四日

〔右一通〕

嶋津左衛門内

阿多仲兵衛

1159

覺

一萬治二年二月六日、御納戸方出候箱改申候刻、嶋津彈正殿、寛永十八年御納戸方御書物被成御借用候、請取有之候、堀四郎左衛門殿ニ而、御老中懸御目候へハ、我々兩人前々大膳殿役人を呼候て、于今於御格護者、可有返上由、可申入由、被仰聞候付而、即川上弥太夫被參候間申渡、彈正殿受取之寫相渡候事、

一同二月七日、大膳殿方以弥太夫被仰候ハ、昨日申入候御書物之儀、委被聞召候、大膳殿ハ其時之様子無御存候、家中之者共ニ被成〔御〕^①〔尋〕^②候へ共、存たる者無之候、大事成御書物之儀ニ候間、大方ニしてハ有之間敷候、靜ニ御見せ被成候而、様子可被仰之通承候、即四郎左衛門殿ニ而、鎌田源左衛門殿へ申入候事、

一右返事トして、源左衛門殿被仰候ハ、若前々御返上にて請取を御取返不被成事も可有之候、併堅御書物ニ而候間、靜ニ御見せ被成御尤候、其段弥太夫へ申渡候事、一同年五月廿二日、堀四郎左衛門殿ヲ以御老中へ申上候

ハ、前々如申上候、普光院御所方琉球御給之書物并
秀忠様之御内書一ツ、彈正殿御納戸方被爲申請候、返
上之儀、大膳殿へ去ル二月申入候得共、于今返上無之
候通申入候御返事ニ、即堀四郎左衛門殿ヲ以御老中
大膳殿へ被仰候、又御納戸ニも可被仰候間、左様ニ心
得申候様ニ與兩人へ承候事、
此書物之儀、大膳殿役人河上弥太夫へ申渡候、御老中
御下知ニ付、如此ニ候、

萬治二年亥

二月六日

〔表紙〕

古今

御支族列

附 錄 舊 記 雜 錄 卷 廿 六

〔五冊ノ内〕

御支族一列次第不同

〔貼紙〕
「御支族一列
他家文書」

一 山田氏

一 全支流

一 伊集院氏

一 全支流日置氏古垣氏春成氏福山

氏

一 全麥生田氏

一 伊集院元巢記

一 若狹島津氏

一 越前島津之族知覽氏

一 全宇宿氏

一 全宮里氏

一 阿蘇谷氏

一 町田氏阿多

一 越前島津氏

一 左衛門督歲久宛書翰

一 伊作家一流文書

一 他家文書

一 薩州家吉利寺山大田大野西川

1160

「山田氏系圖」

忠繼

式部少輔

二代太守大隅忠時初忠義一男、雖然不續家督者、生他腹之

故也、

薩摩國中賜牛屎院地頭職矣、

同國谷山郡賜山田村・上別符村等地頭職、而居住山田、

由是號山田也、

越中國フスマヘノ保、為勳功賞賜於 將軍家也、於後年

者、欲以上保界嫡子太郎三郎、以下保界二男福壽丸者也、

「山田氏系圖」
六代

久興

虎王丸 四郎 右京亮 出羽守 入道名玄威、

延文四年己亥九月廿六日誕生、

忠繁

王大丸 式部彥七

氏久公與澁谷氏鬪而退之路、山引合戰之時、與本

田彌七俱遂戰死也、

忠尚

入道聖榮、

「山田氏支流系圖」

忠房

式部三郎太郎

上總介師久築高江峯城、以令忠房等守件城、為入來院彈

正少弼重門所陷當城、于時遂戰死畢、

「山田氏譜中」

「正文在山田七郎右衛門久通」

三春之御慶、猶重疊、抑 御屋形當所申良[㊦]入御候、

仍明日自是直ニ可有御渡海候間、御馬まハシ申候、一宿

飼口番等之事、可被仰付候、慶事、恐と謹言、

三月八日

經安(花押242)

山田殿へ

御宿所

村田肥前守

經安

「山田忠尚譜中」

「在山田七郎右衛門久通」

又長門介殿出陣之由、此方にも聞得候へ共、分明ニハ

無候、伊東衆之合戰ニ興有時宜共申候、誠ニ計略かと

存候、然共世間ニ申候雜説ニより候之間、不審千萬ニ

候、此方無音ニ罷過候、御無心元候、但御意ニ被懸候

間、御免可有候、其方憑候之外無余儀候、自然之時ハ

可申入候、預御助候者可畏入候、

御狀委細ニ致披見候、如仰伊東衆飫肥へ打出、如前と陣取候、江州之難儀不申及候、尤か様之御左右、可被申候分ニ、長尾之御番之由承候間、遅と仕候、今度者前よりも指寄陣取候、日々ニ城秀候、「本マ、」去十日大手犬馬場之下江之城戸ニ着候て、既ニ城戸取可退候處ニ、向會防候程ニ、又一手大龍寺之内より切上候所を、征矢鷹侯ニて仕候間、殊外之大手負ニ成候て引退候、少々牆越ニ太刀打共申候、又同十二日水手より責上候を、身命を捨防候程ニ、是も殊外之手負ニ成候て、

「朱カキ」
「自此興欠」

1165

「山田氏系圖」

忠尚

九代
忠豊

四郎 式部少輔 河内守 安藝守 母西谷讀岐守

久信女也、

1166

「正文在山田七郎右衛門久通」

夫よりの御狀くハしく見申候、これニもうけ給候へハ、ほん所領候とて申され候、是こそさいわい此事候、御はんほうたい候て、しんしやくなく大かくの御判おとなニ御目ニ御かけ候へく候、ことにきもつきの兼重のときのちはつ、高氏の時御はん、「京 都」きやうとより貞久、しきふ儲三郎所御下、其もんしよをももちて候、今度之次ニ所領を給候ハす、あまりニうまれかへリニ罷成候、せめてハ今さふらへニ御なり候へかすと存候、くハしくよく御見ひらき候へく候、ふるき御はんをもたしなミもちて候ハ、かやうの時ため候、いそきく御さううけ給候へく候、恐と謹言、

三月二日

(山田忠尚)
しやうゑい(花押)
362

河内殿

しやうゑい

「上カキ」
山田河内守殿

聖榮

1167 「山田氏系圖」
十二代

久武

又七郎 民部少輔 次郎右衛門尉

永祿三年庚申正月廿四日誕生、

忠時無可續家統之子故、為猶子、連續彼家、實上總

介忠通子也、

1168 「正文在山田七郎右衛門久通」

急度令啓入候、仍從 御前可申之旨候、子細者、御産之

弓被遊候御當家之日記御所持之由、被聞食付候、到其儀

者、有御 上覽度由候、早々御持參可為肝要候、御延引

有ましく候、猶期後普之時候、恐々謹言、

天正年間

三月一日

經定(花押240)

村田越前守

山田殿

參宿所

經定

「朱カキ」「上包」

山田殿

村田越前守

曾於郡

進

かこしま

より

1169 「正文在山田七郎右衛門久通」

高麗渡ニ付條ノ事但手火箭
百ちやうノ仕立

一こころさしにて可被參人ハ、其心さしのほとを身にか

へ可申上候事、

一御めにかゝらさる人ハ、御目にかけて候て、後日歸朝之

時御扶持を申遣へき事、

一如何とかある人なりとも令同道候て、御めにかへく

候事、もしならぬ事候ハ、永代我等同心たるへく候

事、

一火箭持候て可被參人ハ、向後其首尾一途可申立事、

一御歸朝之時、一途御扶持を可申遣事、

「伊集院氏系圖」

忠國

圖書助 長門守 法名道忍、號無等、

女子

忠貞

又太郎 號伊鹿倉、他腹、子孫記別紙、

久氏

一御扶持なく候ハ、我等知行を立衆合中ニ可遣候事、
一いつれもぎりをおもふ人に在いて者、身にかへ可得御
意候事、

右條と偽申ニをいてハ、諸軍神之御爵をかふむるへ
く候也、仍如件、

上井仲五(兼政)
(花押27)

高麗立衆中

參

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」一七七号文書ト同文ナリ)

大隅守 法名觀了、號大道、

久影

號日置美作守、子孫記別紙、

義久

號麥生田兵庫助、子孫記別紙、

忠秀

號大重彌三郎、

於加治木土器園戰死矣、子孫記別紙、

俊久

號黑葛原、初依鎮 伊豫守 子孫記別紙、

南仲和尚

伊集院廣濟寺開山

忠治

信濃守

久俊

長門守 法名賀山 子孫記別紙、

今給黎之祖謂之、於伊集院給黎也、

—女子	—久春	—真梁	—忠治	—三阿	—久光	—久義	—爲吉	—久教
太守氏久公簾中、	號東筑前守、	石屋大和尚 福昌寺開山 <small>応永元年建立於福昌寺云、時年五十歳トアリ、</small>	號吉俊、備前守 他腹、		號土橋、大和守 他腹、子孫記別紙、	號飛松、相模守 他腹、子孫記別紙、	號四本、他腹、	

—女子	—景助	—景久	—賴久	—久勝	—忠氏	—忠兼
初忠照 讚岐守 他腹、子孫記別紙、	剃髮禪衣 為圓通庵住持云々、	次郎三郎 他腹、	藏人頭 彈正少弼	太守氏久公之為婿娶小女於愚室也、	號大田、伊豫守	號松下、治部左衛門尉 大隅守 法名了永、子孫記別紙、

女子

正語上座

孝久 「徳イ」 「丸田氏譜ニハ初徳久トアリ」

助三郎 他腹、丸田之元祖也、子孫記別紙、

女子

太守久豊公後之簾中也、此女子産男子、稱出羽

守有久、大島之元祖也、

漚久

初為久 大隅守

繼久

三郎左衛門尉 上野介 子孫記別紙、

陪久

孫六 大和守 子孫記別紙、

忠俊

彦三郎 右衛門佐 子孫記別紙、

孫太郎

早世、

經久

初頼忠 久泰 彌三郎 大隅守

辰久

孫二郎 次郎左衛門尉 子孫記別紙、

崇澤

前建長寺雲夢和尚

孝久

孫太郎 孫右衛門尉 子孫記別紙、

1171

「伊集院氏系圖」

大隅守經久 筑前守久雄 兵部少輔忠増

筑前守忠能

久族

初久洪 源助 源左衛門尉 遠江守

寛永五年戊辰、筑前守忠能禪家督及系圖於久族、
所以為後嗣也、實伊集院肥前守久信入道元巢長子

也、久族無實子之可繼家統、故請 太守之連子、

以為繼子、丁此之時 太守使大老當家家督及以

太守連子為繼子之事於告伊集院門族中、在其證書、

記左、

以上

一書申入候、仍伊集院御名字家督事、松千世殿御
定之様子、御名字中へ可申渡之由 御意候間、如
其申觸候、各日出度存之由被申上候條、致披露候、
貴老被成其意得、各へ被仰談尤^ニ候、恐々謹言、

三月三日

喜入攝津守 忠政^(判)^(花押)

下野守 久元^(判)^(花押)

伊集院遠江守殿

參御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」二九〇号文書ト同文ナリ)

松千代丸

養子、實 太守中納言家久公之九男也、以寛永二

年乙丑六月十三日、生母牧源兵衛胤親女^{家久公之妾也、}

松千代丸相續於當家有年于茲矣、依 公命去當家、

而為鎌田出雲守政統之養嗣、

久朝

初久立 龜千代丸 源助 十右衛門

寛永四年丁卯十二月十八日誕生於櫻島、母同松千

代丸、

久朝者 太守家久公之十二男也、兄松千代丸^{為鎌}

田政統之養子、久朝奉 公命為後嗣云々、

「伊集院右衛門佑久昌一流系圖」

久昌

號伊集院、初久次 右衛門佐

今給黎家元祖長門守久俊之二男也、

久昌與魯笑之交二三代闕之、再可考之、

久通

右衛門兵衛 治部少輔 下野守 入道名魯笑、

轉補隅州牛根及踊等之地頭職、

天正十五年丁亥九月十二日死、

伊賀守久實

為右馬守忠將之家臣、
(頭)

八郎久英

十九歲早世、

久治

三郎兵衛 下野守 入道名抱節、

天文三年甲午生、母新納左京亮忠祐女、

太守義久公家老職、

轉補日州福島院及隅州櫻島、同高山、薩州市來、

同出水等之地頭職、

伴右衛門久元

猶子 實同氏又左衛門久寬之嫡男、

1175

「伊集院抱節譜中」

「正文在伊集院右衛門」

(島津義久墨印) (印文義久)

薩州・隅州之内を以目錄別紙在之事、今度幽齋老任御吳見被宛行候、被令領知、可被抽奉公忠節由候、恐々謹言、

九月廿七日

町田出羽守 (花押)

久倍判

抱節老

1176

「伊集院久譜中」

亡父頼久於都鄙致忠功者可勝言乎、迄熙久之代、得隱謀之聲、十代 太守忠國主催國中士卒、鳴鑿鼓來所以攻責、孔、以猛烈示其威武者、非所可當、漸矢竭弦絕、失防禦之道、而沒落遁于肥後州者也、

1177

「伊集院頼久譜中」

「正文在藤野休右衛門久昉」

三ヶ國人々、多分於御方御志候之由、度々佑被承候、罷下可申談之由被仰候、「欠」今日二日、球摩郡人吉ニ下着候了、就其一向憑存候、一途急速御張行候者、可目出候、依御返事合戦之次第、重可申談候、兼又面々御中被進候狀、案文進候、隨御左右正文をハ可進候、委細承候者頼存候、恐々謹言、

六月二日

(今川)

滿範
「張紙ニ
一色右馬頭カ」

伊集院殿
(久氏)

(本文書ハ「日記雜錄前編二」三四二号文書ト同文ナリ)

1178

「伊集院熙久譜中」

「正文在廣濟寺」

一日、妙圓寺御使節御出、御意趣の通其時こそ承分て候へ、根元・山王・諏訪の寄進と存候て、とかく申候つる、御物語ニこそ委細存知仕て候へ、いそぎ御知行可目出候、滿家へもやかにて此謂可申遣候事候、恐々謹言、

小春五日

(伊集院)
熙久(花押)

廣濟寺

新符之御方へ

(本文書ハ「日記雜錄前編二」二二九三号文書ト同文ナリ)

1179

「伊集院熙久譜中」

「正文在廣濟寺」

東堂之御一期の後ハ、順職之ことに寺家向之事、可申談候、其の間ハ、如何にも御堪忍、可目出候、心事以面拜可令申候、恐惶謹言、

極月廿九日

(伊集院)
熙久(花押)

廣濟寺へ

まゐる

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二九五号文書ト同文ナリ)

1180 「伊集院支流日置氏系圖抄」

久彰

號日置、美作守

伊集院忠國三男也、

忠嗣

德太郎 助四郎 源左衛門尉 美作守

久祿

號古垣、龜太郎 助七

久智

號春成、安千代 刑部左衛門

久次

號福山、民部少輔 無子、

1181 「伊集院支流斐生田氏系圖抄」

義久

號斐生田、兵庫頭

伊集院長門守忠國四男也、

1182 「正文在志布志野上村帶刀ニ有之」

連々申通度雖心底候、之故、乍存相過候、寔所
外候、仍其元御弓箭之趣故哉、承度候、雖初春之比

豐州以使僧忠親言上夫御國家御不知案内

承候條、親佐吉岡方迄旨趣被申入候ッ、然處、為上使成

本被差遣候條、御入魂之首尾候、御本望之儀此節候、委

細彼御可被仰達候、殊光明寺御同道候而歸國候間、不能

細筆候、心緒猶期後喜之時候、恐々謹言、

六月三日

親成(花押)

日置源六殿

斐生田兵庫守殿

御宿所

1183 「伊集院氏支流系圖」

久教 中間五代略

初忠照 讚岐守

伊集院大隅守久氏五代家督他腹長男也、

久武

犬千代 平七 刑部左衛門 天正十年生、母平

田石見女、

女子

町田伊賀久則入道石心後之妻、

天正十八年庚寅誕生 母同前、

與兄久武同奉仕于 龍伯公第三姫君奉稱國分嫁 家久

公時、補御上臈役、姫君離別後、隱居于國分、姫

君至掩糝、勤仕不怠、 家久公感其勞、賜采地六

十斛、嫁久則而後、讓其所領於忠饒、雖然、不立

女子之後、先例也、故以忠饒系久武之弟、 天和

元年辛酉七月二十六日死 法名心慶妙芳大姉、

忠饒

平左衛門久增

長菊 清兵衛 伊右衛門 實母米良權之助女、
(勝脱之)
忠受繼母之所領、為久武弟、冒伊集院、實町田伊
賀久則之二男也、寛文六年任御使役、同七年賜財
部地頭職、十一年死、年五十一云々、

1184

「伊集院忠棟譜中」

「正文有之」

態用一書候、仍内々雖及承候、且者遠方故、且者題目依
無之、申後候、心外至極候、自今以後、倍可得御意覺悟
候、御同意所仰候、隨而箸鷹一連大望存候、被懸御意候
者、可目出候、猶委曲彼者可相達候之條、不能一二候、
恐々謹言、

六月廿日

信昌判元押

伊集院殿

參御宿所

鍋嶋飛彈守直茂

「上包」(忠棟)
伊集院殿

參御宿所

信昌

1185 「全上」

「正文在蒲生衆山田孫兵衛」

遙申隔候事、本意外候、乍去、貴國當郡隔心之故如此候、

猶心緒者聊無疎義候、仍今度七嶋船被差下候、以其次、

自其許御賴之屏風・扇子令進獻候、尤然、以使節可渡進

之處、前如申、當時霍執之故、態不能其儀候、自然者聊

尔於取沙汰共候者、無疎意之段、於禁中も可被達事憑存

候、彼屏風事、狩野法眼私宅へ拙子令參入、口達候、無

其隱候、彼是能御取合所仰候、餘者期後音之時、恐惶謹

言、

八月廿四日

忠棟(判)(花押)

圓覺寺

參衣鉢閣下

1186 「写」

為音信、紅糸廿斤到來候、遠路志、悅思召候、猶石田治

部少輔可申候也、

「朱力キ」
「天正年間」十二月十八日 御朱印

伊住院(兼)(忠棟)右衛門大夫

1187 「伊集院元巢譜中」

補日州蓬原志布志之内之地頭職、且轉補隅州清水及横川等之

地頭職、而後賜日州飯野地頭職、移住飯野、

久信迄三五之歳、則手于戈與弧矢、從東西之戰場、既迄

老體、而不顧軍務之勞、有勇敢譽者其數多矣、正興現住

文之和尙、聞元巢之武功、所流布之實書一紙、以畀予、

全記左方、

決勝記運籌帷幄決勝千里言
故以此言名此書云々

原夫島津高祖忠久公者 日本右大將賴朝第三公子、而知

薩隅日三州也、尙矣於是世世臣事、我 島津氏者、有同

姓有異姓、皆是累世譜代之臣也、雖然、其家家有不肖孫

子、則爭虞芮之地、以有不君我君者甚、則不奪 邦君之

賦稅、不以為憂矣、是以一治一亂反覆相尋、然則 邦君

豈可不征伐之乎哉、雖欲鑿弓矢、而可得乎、因茲 邦君據德遊藝之暇、修治攻具砥礪兵器者、不得已也、爰有元巢者一門之同姓、而自少之時、事於 貴久 義久兩君之朝、漸迨三五之歲、親手戈矛與弧矢、從軍於東西者、匪翅一日矣、時我島津氏家臣有肝付者、久懷不臣之心、橫掠我廻之城者、三五年矣、既而又奪牛禰村、於茲為討其罪、鑾軍艦於牛禰之地、不臣之賊徒、對我義兵、爭鬪者半日、我軍鑑之士卒中其流矢者、十三人、時元巢十七歲也、在我諸軍之中執弓抽矢、射之以貫強敵臂者、數人、竟全師而歸矣、其翌年發義兵於橫川、立陷其城矣、於此之時、元巢與強敵鬪、而身中鋒刃流血漂楯矣、其後伊東不道、而掠取我飯野大河平要害、此時伊東乘勝欲侵我梅木崎村、元巢與前大善坊、共提三尺、自間道突出、敵軍寒其膽、而弃甲曳兵奔、不得劫奪我村落矣、

永祿丁卯之冬 貴久 義久兩尊君、募數萬勇士、討不臣菱刈、於其攻馬越城之時元巢與賊兵相鬪、身中兵刃矣、貴久尊君屯陣於湯之尾、有尊命、而元巢率輕勇士卒、徒

渡其河、發乘矢於賊兵軍中、此時亦有流矢中其肩矣、貴久尊君即有一戎衣之賜、較其厚恩、則太山何高、滄海何深、令此戎衣傳之孫子、孫子縱雖不肖、而豈可不蒙遺澤、而抽至忠哉、 貴久 義久兩君、親著甲冑守馬越藩籬之城、元巢時從軍焉、此時 義久尊君之舍弟兵庫頭義弘守飯野城、伊東屯陳於田原、 義弘告 兩君、令元巢從軍於飯野矣、一日有官軍之暇歸於清水私宅、於此之時、不臣肝付遣賊兵我數祢城、放兵火村村、至於上井山郭、一時焦土矣、此日隅州東西之勇士、雲集對於賊兵、賊兵平日運謀於帷幄、有權變權術者匪止一端、以故我軍漸將敗去、元巢親手于戈於數祢民居、於是、賊兵不得搖動我軍、我軍中有腦山者、斬肝付禮部之首、禮部肝付親族、而為廻城主將、於是、賊兵撓敗、輿尸而歸、我軍功成凱奏者、元巢之力也、是亦家村若狹守・黑田石見守、所得而能知也、

或時肝付率數千之賊兵、攻我數禰城、於此之時濱田民部・德持舍人、與元巢三人堅守城門、賊兵不得伺之、數禰家

臣大藏助不幸而雖中鐵炮、而賊兵不得誠其耳者、三人之力也、一日揚數千之義兵、刈廻城下之麥苗、是亦軍中之常事也、賊徒亦據嶮^⑨之固、對我義兵、義兵遂循、而不得敢進、賊兵恃險、而欲攻擊之、我軍將至覆敗、此時元巢發矢、而殪賊兵二人、而身亦中數箭、氣息奄奄、若微家村若狹守、殆至結其纒矣、賊兵氣焰如然、而其執衝我義兵、義兵亦輝軍容、終日相鬪、及夕陽而班師於我地矣、或時我義兵攻祁答院長野城、將師揚旌、威噏秋霜、於是、澁谷一黨、烏合蟻聚、而急追我軍、我軍不得已、而覆敗矣、此日元巢在其軍後、全軍、而歸矣、此時亦為流矢所中矣、元巢廿八九之年、令我官軍攻下大隅荒平要害、元巢與賊兵鬪、而身中鋒鏑、此日 義久尊君顧元巢草廬、親撫其疵、且復有一鋒之恩賜、恩賜之厚千金未以為重、萬戶未以為富、元巢頓首、血泣以陳謝、丁斯時也、薩州義虎公朝於覽府、此日隨 尊君之駕賜之弓矢、賞其軍功、當疵漸痊、於下大隅提三尺劍、執一人誠、友野甲斐守於今詳記之、甲斐亦執數人之誠、播名譽於國中矣、鎌田出

雲守為櫻島放崎主將之時、將有事於牛根二河、元巢率數人之諸士、繫船於二河渚邊、燒七八之茅屋、出雲守見中流矢、元巢與諸士力勞軍務、全帥而歸矣、其年九月晦日、屯陣於下大隅早崎、即日破濱邊要害、元巢與賊兵戰、身中流矢、歸於私宅之時、 義久尊君奇尊駕於元巢草廬、深有恩顧、獨愧未得討賊興復之効矣、是歲肝付賊徒據二河河邊、是亦牛禰與廻城之間、為通其軍糧也、時 邦君令弟左金吾為軍艦主將、將攻賊徒、我軍未整隊伍、元巢不隨一麾號令、突出而賊徒瓜潰、 義久尊君以元巢之忘其身、而赴敵兵、以為不知其宜、有放遂之命、遁在南林寺者三月矣、其忘身赴敵之一件、東鄉安房守至今詳能記焉、

元巢守日州穗北城之時、伊東之燼、長倉勘解由據石之城、將禍於我國家、此時薩隅精兵、徒渡大河、欲攻石城之固、不屑^{カクカ}脣函、所謂百二山河是也、此日 邦君從弟圖書頭、手提三尺將破城門、身中鋒鏑、我軍漸將覆敗、此時元巢與賊兵強勇者、交兵相關者、在我軍諸士之先、即斬勇士

平原左衛門之首、身雖中鋒刃、全我數百諸軍、於是坂本越後守・白坂佐渡守續元巢共交兵、而執其馘、其聲舉聳動國中矣、肥之前州有有馬者、世世住安德城、州之龍造寺與有馬有隙、是故屯陣於安德者、非一朝一夕之故、有馬請救於我 島津氏、素修隣好也、「ツカハシテ遣カ」遣六千餘騎、而救之一日賊兵將攻安德城、元巢單騎、而突然入於二千餘軍中、我軍士福崎新兵衛尉至今詳記之、是日不得攻其城者、元巢單騎之力也、匪啻我州諸軍士知之、肥之前・後州人士、所明知也、我黨有谷山播磨守・樺山刑部、有許多軍功、非筆舌之所述也、或時我諸軍據肥之後州堅志田之邊地花山、一將未定、元巢守其藩籬者、一葦矣、元巢回於私宅之後、阿蘇家臣不從我主之命、私心橫發、詐攻我花山城、城不幸而已陷矣、此時木脇刑部丞、鎌田左京亮鬪而死矣、尔來、不得運糧於堅志田、一日出我軍士於三舟之境下豐田、元巢亦率橫河數百之兵士、出挑賊兵來、此日從三舟地數百賊兵、烏合蟻聚、欲敵我兵、是亦乘花山之勝也、元巢手提三尺、直赴賊兵、賊兵一時爪潰、斬賊兵首者十三

級、此時福崎新兵衛尉、大有軍功矣、肥之後州堅志田・高佐陷之時、敵軍七百有餘隔河而交矢、元巢父子馮河、而振其勇力、源左衛門尉直前斬強敵首、此時河田大膳亮一手執三人馘、聲譽喧動六國矣、三舟・隈之莊仇於我義兵者、匪翅一日、鬱憤之餘、大揚兵旗、於是、人民之歸我義兵者、如草之偃風、商賈農夫、亦歌於市、扞於野、此時肥筑之境有田尻者、久屈於龍造寺兵、請救於我 邦君、此地有堀切・江之浦兩要害、豐州大友之黨也、此時大友家臣戶次道雪・高橋紹雲、屯陣於高良山與寶滿岳、因茲、兩要害如狐之假虎威、而猶未屬我幕下、於是、元巢爭先誅數十之賊兵、兩要害亦力盡矢竭、漸及將陷、雖然 兵庫頭義弘與諸將相議曰、窮兵黷武、先賢之所戒也、事時其中則退亦進也、先完帥而歸於肥之後州、或時有 義久尊君之命、制津守・健軍兩城兵事、一日元巢回於隅州橫河私宅、此時阿蘇家臣有光永者、時元巢之亡也、頓起賊徒來、竟陷津守・木山兩城、元巢聞賊兵蜂起、即日命駕信宿、而至津守城、斬蜂起之

將於高森城、且復、斬首數十級、源左衛門尉親手戈矛、執二人誡、童男童女、為其俘囚者、不知幾百、嗚呼、一將之殘暴、延及民間、可不戒乎、元巢在津守之日、將有事於筑紫城、是時 邦君從^(老)第圖書頭為其主將、時樺山權左金吾提三尺劍、親殲渠魁、身雖中鋒刃、不膚撓、不目逃、其勇氣浩然、聳動六國矣、此後率數千兵、十重圍岩屋城、元巢親子與北鄉讚岐守同圍一陣、一日攻岩屋城、我諸兵輝軍容、而壯麗奪目、就中宮原左近將監軍容輝日、識與不識、無不注其目矣、相良日向守勇氣衝人、諸軍之勢、如泰山壓紫卵、此日元巢力勵軍功者不一、河田大膳亮・北鄉從者福富織部佐所見明知也、元巢之黨坂本越後守終日勞軍務、手戈矛、而殺數人賊徒矣、七月十五日圍岩屋城、至於二十七日、陷其城矣、不記其年、惜矣、或時元巢戎於豐之後州切加部城之日、從同州日田郡、勇士二千餘欲攻其城、元巢率數百軍士、而單騎而突入於敵軍中、追亡逐北、斬首者七十餘級、其後我軍士去切加部、欲屯北之里、賊兵追我軍者、三里餘、此時源左衛門尉在

軍後、而賊兵不得追之、就中福崎助兵衛尉在其後、而終日勞其軍務、今住薩州和泉一庵、號山內寺者、其形僧、而其氣猛、雖空門士、能鬪而屈人之兵、所謂隨時之宜者也、此時新納武藏守・町田出羽守、在北之里、俱共相讓曰、見可而進、知難而退、帥之常也、諸軍同退於湯之浦、其晚屯於坂梨城、樺山權左金吾・弟子丸右京亮、整其部伍、不量敵、不慮勝、能無懼、而全養其勇、誰敢敵之乎、此時相良軍七有羽檄書、書曰、豐州岡之城主志賀親次率數千騎、圍兩陣於此地、於是、我諸軍欲退無路、誠危急存亡之秋也、惟坐而待亡孰焉代之、元巢前爭其先、橫赴一陣、陣爪潰矣、我諸軍六伐七伐、而止齊焉、於此之時、斬首者三百餘級、源左衛門尉亦執三人誡、從僕者鬪而死者七人矣、因茲我軍唱凱歌、然後退於肥州津守城、丁此時也 太閤殿下秀吉公欲進軍馬、我薩州、以故我諸軍左次於八代莊、我軍士宮原筑前守與義虎公從士、同守隈之莊、莊內者、皆祖肩於織內諸軍、不得已而宮原亦鬪而死矣、此日桂山城守・新納武藏守・相良日向守、共元巢率數百

之勇士、至於隈之莊城門、令我薩隅諸軍士之在隈之莊者數百人、一麾一呼、俱共同歸於八代莊關之城矣、此時松浦筑前守有叛逆心、據谷山城固、我軍攻谷山城、城不終朝而陷焉、斬逆心之徒數十人之首、且復俘數百男女矣、八木東西亦祖肩畿內諸軍、皆以為逆徒、是故我諸軍假道於求麻、全帥而歸薩州矣、

太閤殿下駐 尊駕於薩州河內泰平寺、請成於我 義久公、公出會於 殿下泰平寺、然相親輔散軍而歸洛陽矣、

太閤殿下秀吉公征伐朝鮮之初、我 兵庫頭義弘、率薩隅日三州數萬之勇士、從軍於 殿下、是時元巢雖老病日薄、而為 義弘公供奉、在朝鮮者七年矣、我日本關西士率有奪其財、而獨潤身者、有劫其人而用為僕者、或破書卷以補其衾、或裂章甫以薦其履、逆理亂常之者、豈止一人、是故、十而三四、陷身於鋒刃、以為鬼而已、元巢不一從之、無晝無夜、不離 義弘尊君之膝下、其志在見危致命、見得思義、而俟兵家之勝敗者也、尊君之在朝鮮殆乎七年、當其散軍之日也、匪翅我幕下之軍士、令日本諸將陷於賊

中、而危身者一一救之、乃載與俱歸於日本矣、尊君之威武、匪翅喧於日本、雖大明朝鮮無不偃其風者、 義弘尊君為令兄義久公之嗣子、 義弘世子有 久保公、雖嗣其位、不幸而蚤薨於朝鮮之地、然後奧州殿下家久公嗣為世子、從 貴久尊君至於 家久尊君、事於五朝者元巢也、元巢有子有孫、孫又有子、世世全君臣之義者也、千秋萬歲、萬歲千秋、

右此決勝記者為

伊集院前肥前守沙彌元巢、摺據其軍功之一二以書之、

是故不及諸將諸士之事情、觀者察焉、

慶長辛亥臘月吉辰 「慶長十六年辛亥ニアタル」

前建長見正興文之玄昌涉筆於隅州正興古寺、

1188 「若狹島津氏譜中」

若狹島津三方兵衛二郎忠經子孫、枝葉不知、其世代實數者、今已尙矣、先是、寬永年間、島津圖書頭久通、候江戶城邊之日、問件旨於若狹州之有司、有司曰、歸國之時

尋得于州郡、而後宣告報焉、其後若狹州三方郡中之民間有稱島津餘裔者、問其所由來、則持一紙之書來、而使有司披閱、有司非啻看讀其證書、全書寫以附與于久通、故記之於左方、

1189 先年より山田太郎左衛門尉方嶋津道正申給候事之儀、宗

廣御時雖有落居、一向御札明不届之由歎申之間、於口狀者不及分別之條、誓斷之儀申付候處〔本ノマ〕、山田方依有失章倉分・倉所分兩所共ニ如前候、嶋津道正跡繼嶋津八郎左衛門尉仁充行者也、年貢諸公事無解怠致其沙汰、永可有知行之狀、如件、

大永八年八月十九

内藤新兵衛尉

光廣在判

1190 ○有司有一紙之書曰、

一若州三方郡之内井崎村と申所ニ、九左衛門尉と申者御座候、此者五代以前迄ハ嶋津を名乗申候、其後おとろへ申候故、二三代は三方と名乗、井崎と名乗申候、

一道正と申ハ五代以前之人、九左衛門尉先祖也、一九左衛門尉、今程ハ高百石計之所を作仕百姓にて御座候、年比六十計ニ相見得候、子とも十人ばかり有之云、

1191 「知覽氏系圖卷末」

校見官庫所藏之越前島津之族知覽氏系圖、至知覽氏嫡流大和守久親絶後、以其事書久親之傍、又閱島津久龍家臣知覽文右衛門行通家傳之譜、島津豊後守忠廣之臣日置與市郎久義嫡子、使參河守久通為久親之嗣子、且久親父大和守忠幸者豊州家之臣也、豊州領日州梅北、以忠幸補地頭職、其後北郷家尾張守忠親讓家統於嫡男時久、相續豊州家、忠親後以梅北授與時久、是時以忠幸在職免、為北郷家之臣、至久親、繼父補梅北地頭職、今以之校訂之行通之家、為當家之宗明白也、薩州田布施士知覽勘右衛門行充・種子島久基家臣知覽孝左衛門行年、是兩家素為行通之庶族、雖然官庫之譜與所寄藏之譜交錯雜、或異實名

或異傳記齟齬多端也、因各併書為一册、以備後考而已、

1192

「宇宿氏系圖抄」

二代太守

忠時

大隅守

忠綱

忠景

四郎左衛門尉 周防守 五郎左衛門尉 大夫判官

忠宗

大夫判官 豐後守 號知覽、子孫記別紙、

忠秀

大夫判官 常陸介 號宇宿、 五郎左衛門尉

子孫略、

忠繼

1193

「宮里氏系圖抄」

忠綱

周防守 號越前島津、

忠直

三郎左衛門尉

泰忠

三郎左衛門尉 號宮里、

「末紙」 是家至久光嫡庶共斷絕

時忠

略

1194

「阿蘇谷氏系圖」

久時

大炊助

二代之 太守大隅守忠時主之六男也、

「此子孫羽月之土彦右衛門尉久光トアリ」

「子孫略」

1195

「阿多飛彈守忠清譜中」

「正文在志布志土阿多飛彈守忠縣」

南蛮船可着岸當津博多候之處、依海上怖畏、其方ニ逗留之由、注進到來候、不可然候、仍先京都へ申候了、如何

ニも被加御助成、早々此面ニ被送越候者、目出候、就其、
態遣迎船候、隨而津々浦々警固事堅申付候、可有御心得
候、恐々謹言、

(応永二十八年)

八月五日

(阿多忠清)

町田飛驒守殿

(淡川清頼)

道鎮 (花押292)

(本文書ハ「旧記雜録附録」二二六号文書ト同文ナリ)

1196

「全上」

就南蛮船事、進芥河愛阿候、委細申候哉、如何ニも早々
送給候者目出候、具嶋津方へ申候了、御無沙汰候者、不
可然候、恐々謹言、

(久惠)

(応永二十六年)

十月廿三日

(家久・忠清)

町田飛驒守殿

(淡川)

義俊 (花押293)

1197

「全上」

就南蛮船事、先日進飛脚候之處、委細御返事本望候、然
而此船于今逗留、無心元候時分、自京都兩度如被仰下候

者、早々此面へ召寄、可送進兵庫津之由候之間、重進使
者、不可有御無沙汰候、上意可有御不審候敷之間、先日
御返事共令京進候キ、委細之旨愛阿可申候、將又當職事、
義俊蒙仰之間、進狀候哉、恐々謹言、

(応永二十六年)

十月廿三日

(阿多忠清)

町田飛驒守殿

(淡川清頼)

道鎮 (花押292)

1198

「全上」

就南蛮船事、進愛阿候處、御奔走之由申候、目出度候、
但于今延引不可然候、其段嶋津方使ニ申候了、如何ニも
早々此面へ被廻候者可然候、尙遅々候者、上意可無勿躰
候、恐々謹言、

(応永二十七年)

二月十七日

(家久・忠清)

町田飛驒守殿

義俊 (花押293)

1199

「全上」

就南蛮船事、愛阿越國之處、御奔走目出候、隨而自嶋津殿使者、尙委細申候、如何ニも此船早く被遣廻候者可然候、事と連くと可申候、恐、謹言、

(応永二十七年)

二月廿三日

宗壽(花押31)

町田飛驒守殿(家久・忠清)

1200

「全上」

嶋津方使者歸國之時、委細申之處、南蛮船去月十五日可出船之由、自那弗答狀到來候、目出候、但又延引候者、其後さ右無音候、無心「無厭本マ、」元候、度と委細申之候上者、雖不可有御等閑候、尙と御奔走可然候間、態進飛脚「具」候處、嶋津方へ申候、可有御心得候、恐と謹言、

(応永二十七年)

三月廿二日

義俊(花押293)

町田飛驒守殿

1201

「阿多飛驒守忠清譜中」

「案文在志布志土阿多飛驒忠縣」

先日石塚大和入道下向候時、預御狀候條、於今恐悅至候、隨而就南蛮船事、自上方御書拜領、面目至、畏入存候、兼又被船出津致用意候刻、匠作「島津久豊」大勢にて、去月廿三日此境寄來候あひた、馳向防戰仕候「而」、仍敵方數百艘以兵船、彼船可取之由、相工候事現形候間、大驚候て、綱碇切捨、俄退出候、よて懸置候間、其外當津者共、不殘一人も退散候間、是非不及、無面目次第候、此等之趣彼使者委細令申候間、定披露可被申候哉、此趣任上意候様ニ御事傳、於身悅喜此事情、恐と謹言、

(阿多忠清)

家久 御判

卯月七日

芥河殿

(本文書ハ「日記雜錄附録」二二五号文書ト同文ナリ)

1202

「町田存松譜中」

掟

一今度普請之事大儀之段候、然者、上下共ニ普請奉行之

下知ニまかせ、精を入へき儀、可為肝要候事、

一普請奉行衆、互以熟談、精を入へき事專要たるへく候、自然、普請衆法度をそむき、難澁いたす族等於有之者、則可被致成敗候、但於日用者可有捨事、

一存松事、京都へ殘置候間、每篇彼下知次第、留守居衆可相勤事肝要候事、

右條之旨相そむく族於有之者、依輕重可處罪科者也、

九月四日

(島津義久)
龍伯(花押163)

「在町田久倍入道存松譜中」

尙以彼書狀檢地衆前ニ可被指出事ハ、無用たるへく候、如此申遣候通ハ、被申入可然候、以上、

東郷城之事、可被破却之由候歟、其謂石空殿へ申入候、

薩摩取次之事、幽齋老・石治少老にて候由、無其隱儀候、

然者去年夏之時分、幽齋老為 上使被成下向、去正月迄

滞在ニ而、置目等被相改候、其節破却させられ候、城

之事ハ暗く破却被成候、并被立置城之事ハ、如前く無吳

「町田久倍譜中」

條々

儀被召置候、其内之東郷城之儀候處、そばより彼城破却させられへき由、一向不及合黙、幾度承候ても、御詫可申覺悟候、併預破却させられ候ハて、不叶城にて候者、幽齋老・石田殿へ被仰理、彼兩人之墨付などを以承候者、不可及吳儀候歟、其外誰人承候ハ、難致得心候之由申理候、依之、寺志广守殿・長大藏殿より墨付被指遣候間、以此旨可被得其意事專一候、恐々謹言、

八月六日

龍伯(花押163)

町田出羽守殿
(久倍)

鎌田出雲守殿
(政近)

龍伯

一千臺川切ニ御檢地并刀狩上使衆於可被仕者、不及吳儀可申付事、付那答院境指出之儀、從上使前江申出候之

「町田久倍譜中」

一 欵、就知行泉^{⑧(闕字)}入組、曾而無之所ニ候、殊幽齋老去年為上使被指下、被成檢地候在所候之條、又ニ可被改事雖無得心候、疑於承者不及是非事、

一 平泉・羽月・山野同前、檢地刀狩可被申付之由、是又不可及吳儀事、

一 泉領之内山野并高城・水引境目を新儀ニ相立、雖被踏分候、互當知行分之田畠出分共、以指出之上、可為知行候間、此方之知行何程檢地候而も不苦候、刀狩之儀者諸國被仰付候間、是又不苦候、湯川八右衛門尉・町田出羽守・村田雅樂助兩三人、不及分別儀被申懸候者、以其上此方へ可申越候事、

七月十日

龍伯^{⑨(花押)}
〔御判〕

諸舟皆と着揃候之條、片時モ急可致出船之處、此荒けにてハ湊口出候する事モ中と難成由候て、徒之逗留何共迷惑不及申候、今晚モ少風やハらき候者、出船之地躰候、

然者國役之儀、各不相濟候哉、安宅三滞在中ハ、談合所へも無油斷様ニと被申候、又諸所へも其理被申越候へハ、大方はか行様ニ候つれ共、打立候以後ハ、皆緩之心持にて、彌不問候、然者、宮之城へハ自是直ニ申通候、兎角到鹿兒嶋、懇ニ相談肝要之由申遣候、又清水へモ書狀被遣候、候^(衍之)早ニ可被持せ候、巨細之段ハ自其元可被達由申候、將又出船モ遅候之條、名護屋表之仕合、必定可惡候、せめて進物にて相補儀モ欵候す覽と存候へ共、是モ當分ハ不如意迄ニ候、然時ハ談合衆、其調別而可被入精事ニ候、各如存知□諸篇六ヶ數申事、連く不相叶候へ共、國元へ一難儀ニ罷成故、有之儘申事ニ候、第一者談合衆の覺悟肝要ニ存候、其故ハ、朝ハ□參候て、自然晝ハ他行モ候之哉、晚ニハはやく歸宅候てハ、寔無甲斐始末候欵と存候、大閣様御渡海候者、某御供事ハ遁間數事にて候間、各可被入念事、向後頼入迄、恐く謹言、

五月廿一日

龍伯^{⑨(花押)}
〔御判〕

「越前島津氏譜中」

「元祖」

忠綱

四郎左衛門尉 周防守

町田出羽守殿
諸談合衆

龍伯

續古今和歌集卷第十二 戀哥二

いかさまにねてあかせとて待人の

こぬたにあるを秋風ぞ吹

續古今和歌集卷第十六 哀傷哥

おやのおもひに待けるころ

おく露をいかにしほれとふち衣

ほさぬたもとに秋のきぬらん

續拾遺和歌集卷第五 秋哥下

夜舟こく由良の湊の鹽風に

おなしとわたる秋の月影

續拾遺和歌集卷第十三 戀哥三

逢坂やわかれをとむる關ならハ

夕つけ鳥のねをもうらみし

續拾遺和歌集卷第十七 雜哥集

大かたのならひにのミやなくきめん

我身ひとつのうき世ならねと

新後撰和歌集卷第四 秋哥上

「正文在高岡士指宿十郎右衛門」

薩摩國御家人指宿平四郎忠秀與「本ニハ左近兵衛忠真トアリ」姪頼平太忠繼論申開門神

領間事、豊後三郎左衛門尉相共召決、兩方可被注申給候

也、謹言、

七月廿七日

（北条泰時）
武藏守（花押347）

豊後四郎左衛門尉殿

御返事

（本文書ハ「旧記雜録附録」四二四号文書ト同文ナリ）

「越前島津氏二代忠行三弟忠景譜中」

は、そ原いろつきぬらし山城の

いはたの小野に鹿ぞ啼なる

新後撰和歌集卷第九 釋教哥

偽のこゝろあらしとおもふこそ

たもてる法のまこと也ける

新後撰和歌集卷第十七 雜哥上

祖父忠久檢非違使にて祭主たりけることを思て

賀茂の社によみてたてまつりける

かけて祈るしるしあらせよあふひ草

かさなる跡は神も忘れし

題しらす

人そうきもとの心はかハれ共

ふるえの萩は今もさくくなり

玉葉和歌集卷第十六 雜歌三

山さとにしハしハゆめもみえさりき

なれてまとろむ峯の松風

續千載和歌集卷第八 驕旅哥

草枕露の宿とふ月影に

ほさぬ旅ねの袖やかさまし

續千載和歌集卷第十七 雜哥中

和哥の浦にまたもひろハ、玉津嶋

おなしひかりのかすにもらすな

續千載和歌集卷第十六 雜哥中

山里に世をのかれてもいか、せん

うきをわするゝこゝろならねハ

新千載和歌集卷第十七 雜哥中

おろかなる心のうちのあらましを

身のなくさめと思ふはかなさ

新拾遺和歌集卷第十九 雜哥中

世の中のうきおもうしと歎く身に

いとふ心のなとかなるらん

新續古今和歌集卷第十四 戀哥四

いかさまにうらみよとてか逢ミての

後さへ人のつれなかるらん

「御文庫三番箱宝鑑中」

雖比興候、短尺書進之候、

久不申通、無念之至候、抑一亂以來不辨之儀、過推察候、
舊好異^⑧〔于〕他事候間、此時一段預合力候者、可為喜悅候、

猶九澤軒可被申候、每年可然樣頼入候也、狀如件、

卯月廿七日〔判〕^⑨〔花押〕
〔近衛尚通公〕

嶋津又六郎殿

〔左衛門督盛久初名〕

〔本文書ハ「旧記雜錄附録」二八二号文書ト同文ナリ〕

「年間詳ナラス」

伊作家一流文書

「御文庫中伊作家文書」

就唐船歸朝之儀□度、以狀申候早、然至奥州分國着岸之
由、〔彌〕^⑩注進到來候、若雖有可扣留造意之輩、被加意見、不
日京着候様、被回調法候者、可為本望候、猶委細者蔭涼

軒可被申候也、恐々謹言、

十二月廿七日

政元〔判〕^⑪〔花押〕

嶋津河内守殿

嶋津河内守殿

政元

1211 先年渡唐船近日來朝之由、注進到來候、九州之間、特奥

州分國中儀、無相違様被加意見、早々上着候者、本望之
至候、併憑入候、恐々謹言、

六月十九日

政元〔判〕^⑫〔花押〕

嶋津加賀守殿

「正文在文庫伊作家文書」

於此方大儀等候、卒軍勢早々越國候者、喜入候、恐々謹
言、

八月廿五日

伊作大隅守殿

滿頼〔花押²⁹²〕
〔澁河右兵衛佐滿頼判〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」五六七号文書ト同文ナリ〕

1213

「正文在文庫伊作家文書」

このあひたしやうにこもりて、しんく候らん事、かへす

く おとろきおほえて候、たひく申され候せい（直巻）の事、

三條殿へさいそく申候ほどに、いそきさた候ておほせら

るへきよし、御返事候、あひかまへていま一こらへこら

へられ候へく候、東國もハヤ（春日侍従）かすかのししううたれ候て、

せいひつして候、いまもそのへんハかりにて候へハ、猶

くせいの事、さいそくしてむけらるへく候、又三郎左

衛門いとまをつよく申候へとも、たうしハことに人すく

なく候うへ、しよし御よう人にて候ほどに、ふつとかな

ふましきよし申て候、猶もおしてくたりなんとし候ハ、

かたきにしゆんして、しやうより申さるゝ事も、きゝつ

くましきよしを申ふくめて候、そのやうを心え候て、そ

れよりもよくくおほせふくめられ候へく候、それより

申さるゝ事も、三郎左衛門これに候て、はしりまハリ候

によりてこそ、さたもきうに候へハ、そなたのちからに

て候、このやう心えられ候へく候、

四月二日

左京進入道殿（宗久）

（足利尊氏）
（花押4）

（本文書ハ「旧記雜録前編」二三四九号文書ト同文ナリ）

1214

「正文在文庫伊作家文書」

（足利尊氏）
（花押4）

嶋つ（宗久）の左京しん入道・おきの入道の子とも、いまゝてこ

らへてちうをいたす事、しんへうに候、おハりのくにハ

つかさきのしやうもおとされ候ぬ、ゑちうのふもんくら

人もかう人ニまいり候ぬ、こなたさまハみなせいひつし

て候、猶くちうをいたすへし、又新田かしそくもいけ

とられ候て、きられ候ぬ、いまハいよくちからをそへ

て忠をいたすへし、きよかんあるへし、このあひたのし

んくこそ、かへすくしんへうに候へ、

潤九月十四日

▽◎

△

〔本文書ハ「旧記雜録前編」二二七号文書・二五六五号文書ト同文ナリ〕

1215 「正文在文庫」

中尾村事、八月廿八日御引付問合仕候、九月三日令御評定、無別子細、被下御下知候了、仍案文令書進候、是にての御沙汰共者、御文書等存知之分者、相沙汰仕候て、御下知申給候了、國にての御沙汰、何躰候らんと、無心本相存候、伊作庄御沙汰者、御下知下事候間、ゆゝしき御大事候、能く御了簡候て、可有御番候、如先々ニ僻義など申候はん人々、難治候事候、所務事御下知顯然ニ候に、御代官非法任之由承候事、歎存候、能く可有御斟酌候、以此旨、可有御披露候、恐々謹言、

九月廿五日

左衛門尉盛景〔本マ、シ〕
〔花押 287〕

進上 姉崎八郎右衛門入道殿

〔本文書ハ「旧記雜録前編」一〇二六号文書ト同文ナリ〕

1216 「正文在文庫」 「此文讀ミかたし」

さてもこのいたわりなんきに候て、たすかるへしともおほえす候あひた、申おき候、悉ちうのふすまへのほうの事、下ふすまへハ、たうちきやうして候へとも、とくふんも、うみやうむしつニ候うゑ、しゆこのうちニ候ける、山田と申候ける仁、いらんをなし候よし申候、上ふすまへの事ハ、ほんしゆさりわたさす候しあひた、御けうしよを申なして候也、かやうの事とも□候へとも、かいゝしきわかたうなんとも候ハす候、いよゝしやうたゐあるましく候あひた申候、いづれもく御さた候て、御ちきやう候て、こともふちし候て給候へく候、御下文の正文まいらせ候、御さいきやう候へハ、はんしたのミたてまつり候、いたわりくわきうニ候て、くハしからす候、恐々謹言、

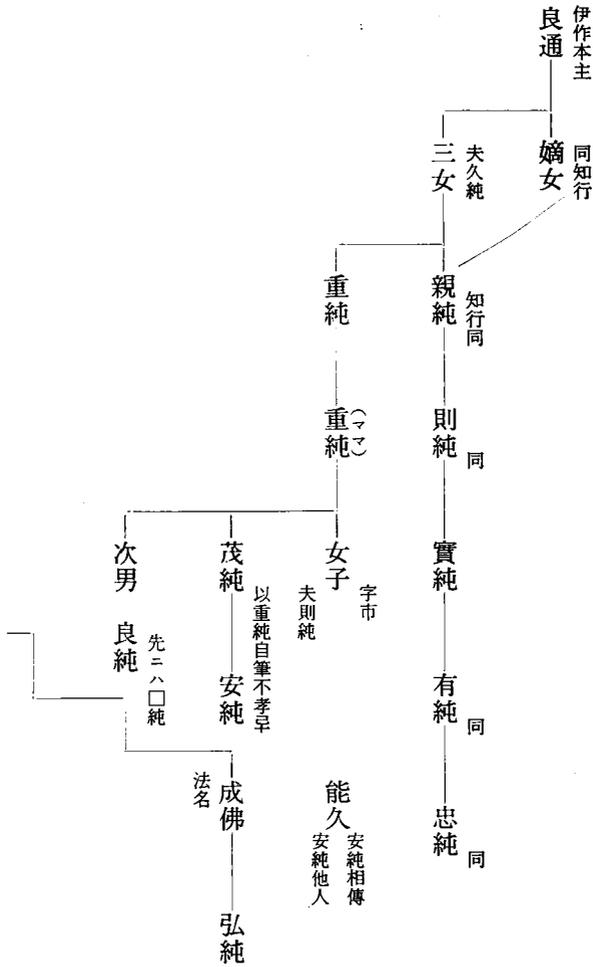
二月十九日

〔山田式部少輔〕
忠繼

伊作三郎左衛門尉

〔本文書ハ「旧記雜録前編」九六一号文書ト同文ナリ〕

「在伊作家文書中」



「伊作家文書在文庫」

伊作庄・同日置北郷所務條之事、以信宗法橋、令和與候

了、於領家御舉狀者、念可下遣宰府雜掌承信法橋之許候、

定令申沙汰候欵、可得御意候、恐々謹言、

六月十九日

行壹（花押279）

謹上 伊作日置地頭殿

御報

（本文書ハ「旧記雜錄前編」一二五八号文書ト同文ナリ）

「伊作家文書」

雖未入見參候、自小嶋入道殿、慇懃ニ蒙仰候之間、無左

右令申候、御名國司事、關東御教書正文を、六波羅殿入

見參候て、御奉行人被進 公家候之條、御沙汰法候、以

案文申沙汰、無先例候、念々請正文、御代下雖無御在京

候、以下申給候ハ、申沙汰仕候て、可被進聞書候、小

嶋入道殿御口入之上、禪門御方へ、無内外申承候之間、

一切者可存等閑候、恐々謹言、

二月一日

沙彌◎叙一

謹上 下野彦三郎左衛門尉殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編」九六六号文書ト同文ナリ）

「伊作家文書」

於加世田（久逸）河州様御討死事、言語道斷、迷惑千萬無申計候、

心中同前之由、推量申候、さ候之間、此刻菊三郎殿身上、

已後迄之校量、如何ニ共候哉、乍若輩、愚存ニハ弓矢事

ハ無本候、屋形様ニ彌御隔候てハ、無勿躰存候、其様舊

友候之間、心中分承候て、涯分可致故實候、但 屋形様

之事、被申成候、老名敷面々、宛概はかりかたく候、仍

能々御思案候て、知音之方々御談合肝要候、自然近所之

衆、ことに越前方などのくりかへ被移候てハ、何も六借

敷事、可有ど候、於于今、御年來と申、人の下にハ、

如何あるへく候哉、堅御思案候て、鎌田出雲などに返狀

か、せ候て給へく候、其様數ヶ所之手「本マ、」さつし給候、急便

候之間、そと申入候、恐々謹言、

十月十七日

忠弘（善入）
（花押276）

若〔狹守〕

三原殿

進覽

忠弘

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」一七七四号文書ト同文ナリ)

1221

「伊作家久逸文書トアリ」

契約

一雖世上如何様轉變候、無ニニ可被懸御意之由承候、我等も存其旨、聊以等閑疎略を存ましき事、

一忠續御近所と申、對我等無餘儀時者、無二無三ニ被仰談、一段可為甚深之由承候、尤簡要之子細候、然者自今以後、御大事をハ、身之大事と可存候、如此申談候之處、對忠續候而、久逸野心之時者、忠續ニ可致同心候、忠續又對久逸野心之時者、久逸ニ同心可申候、就小節不和之儀出來候ハん時者、承分某可致催促事、
一如此申談候之處、自然和譏凶害出來候者、互ニ無覆藏可申披事、

若此條々偽候者

御神名

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」一五六一号文書・一六二五号文書ト同文ナリ)

1222

「伊作家文書トアリ」

畏申入候、

抑今度山田殿為御代官上府之間、諸事御満足之躰、目出度畏入候、雖不甲斐く敷候、此後者御代官一分^{ニ可}被思食候哉、上方の御意も可然候つるか、此御方御上府故候哉、せ上躰ハ不能注御申入候、恐惶謹言、

十月廿八日

沙彌幸阿(花押280)

進上 山田太郎左衛門入道殿

沙彌幸阿

「此文書読カタン」
(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」二三二号文書ト同文ナリ)

1223

「伊作家文書中」

御名字事、聊有憚事候間、親忠と被仰候、同事候敷、

可得御意候也、

去五月十九日御狀、八月六日到來、喜承候了、多年奉及候之間、可申之旨、乍思給候、遠國之境、便風不容易、仍乍存送年月候之處、態御音信、尤本望候、就中當方御參事、殊以日出候、繪旨并御官途事、其境事者、宮將軍御注進之時、每事御沙汰候、無左右難及御沙汰候、但内々申沙汰、繪旨并御官途事、無相違候、日出候、相構面目相之樣、可被舉御癡候哉、

一御本領事者、己繪旨文章ニ、有殊功者、可被抽賞之由、被載之上者、大方者不可有子細候歟、先大方御安堵繪旨無相違候上者、重可被申之由、其沙汰候、又自餘御一族官途事も、追可被申候、石堂邊へも被仰候之間、公方へ申候、彼是傍例難義候へとも、勅許候、返々目出候、雖向後、重可奉候也、

一鎮西宮將軍に可被申狀事、奉候了、坊門と申候仁、當時兵衛督と申候、當家一門候之間、彼方へ進狀候、被遣御雜掌、委細可被仰候也、彼仁一方申沙汰事候、委

事以頼方令申候、

一此御使令對面、委細其境事奉候、又所存分、大概申合候き、可尋聞給候、御進退事者、依國躰、定可落居候歟、

一竹侍者此邊ニ細々相看申候、委事者、定其邊よりも可被申候哉、

一弓三張こふし卷二張、革十枚白革五、染革五、慥給候了、殊更弓、此

境にハ難得物候、令祕藏候、如此色々送給候條、芳志之至喜入候、悉以自愛候、其子細申合御使候了、又輕微之至、雖其憚候、邊土之式不甲斐候、折節所在分扇十本進之候、下品之至比興候、於今者細々以便宜可奉候、頼方下向、全分不辨東西之物候、未練之至、雖心〔安藤〕苦候、以舊好參申候歟、且又其境事、能々為奉定進之候、年内相構令歸參候之樣、可被仰合候、千萬難盡狀候之間、省略候、恐々謹言、

九月十五日

〔藤原〕顯方〔花押 346〕

伊作下野守殿

〔親忠〕
御返事

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一四九号文書ト同文ナリ)

1224

「伊作家文書」

「伊集院」^{「助」} いしゆゑのすけ三郎入道殿、御かたきニなり、いさく
 「庄」^{「川」} のしやうかわきたに、二三日のほどに、うち入へきよし、
 「治定か」^{「知」} 「知」^{「知」} ちやう候て、御存ちのごとく、このしやうふせい^{「候」}
 得ハ、難儀出来候ヌ^{「合」} へハ、なんきいてき候ぬと存候、御かうりよく候て、こ
 「城」^{「堅」} のしやうをかたくもち、りやうけの御ねんくをまたくし
 「仕」^{「公」} て、きやうしんつかまつり候は、おほやけ、わたくし
 「城」^{「取」} ニつけ候て、めてたく存候、このしやうを御かたきにと
 「様」^{「心」} られ候てハ、かたくの御大事に、何もなるへく候、こ
 「披」^{「露」} のやうを、御ころへ候て、御ひろうあるへく候、恐
 謹言、

九月十日

かくけん在判

かちへさへもん入道殿

御方

「此文書モ案也」

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二三三号文書ト同文ナリ)

1225

「伊作家文書中」

御札之旨、委細承候早、如仰連と可申承之由、乍相存、
 御在京之間、無其儀候之處、御下向、就公私悅入候、抑
 加世田別府御拝領、先以目出度存候、將又、使節間事、
 不甲斐候之間、雖可申辭退候、御方様御事候之間、今度
 者可隨仰候、仍御施行案文給置候了、正文者令返進候、
 巨細令申御使候了、毎事期見參之時候、恐と謹言、

九月二日

沙彌定圓 (花押294)

(本文書ハ「旧記雜録前編」二三五号文書ト同文ナリ)

1226

「在伊作家文書中」

嶋津庄内薩摩方伊作庄、同日置北郷中分事、以雜掌左衛
 門尉憲俊、致沙汰候早、於御下知者、本雜掌承信在津之
 間、可令申沙汰候、可令得其御意給候哉、恐と謹言、

八月廿六日

行壹 (花押279)

謹上 伊作庄地頭殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二三三号文書ト同文ナリ)

「在伊作家文書中」

島津庄薩摩方伊作庄・同日置北郷預所與地頭相論所務條
 々、雜掌承信於宰府令申沙汰候之處、於京都、以雜掌信
 宗與地頭代道慶、名字兩方書違和與狀候早、於御成敗之
 段者、於宰府、為本雜掌承信沙汰、賜御舉狀、可令申沙
 汰候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

(文保元年)

七月廿三日

行壹

進上 少納言法眼御房

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三五九号文書ト向文ナリ)

「在御文庫二番箱他家文書中」

陸田山口門津奈木之内、水田五反屋敷一ヶ所事、為給地
 雖進之置候、其方勸請之愛宕江可有寄進之由候、當家繁
 榮之儀、被存候、一段祝着候、乍勿論、如以前、於末代
 茂、不可有公役之儀候、為後日染筆候、恐々謹言、

「弘治三年丁巳」

七月廿日

(相良義徳) (花押)

頼房 [判]

梁瀬勝軍齋

「在御文庫二番箱他家文書中」

各如存知、江州 公方様御入洛之儀、可致馳走之段、被
 成^{◎(關字)}御下知之條、相應之忠貞不存餘儀之條、拋萬事防州
 入魂之儀、始中終雖懇望候、無其實候、剩當方窄人歷々
 令撫育、狼藉無盡期之條、參洛不任所存候、無是非候、
 於于今者、忠儀不可寄遠近候間、豐筑發向之儀申付候、
 其國各之事、到筑前國發足肝要候、右之兩國不日屬案中
 候之様、御馳走頼存候、猶眞光寺可申候、恐々謹言、

八月六日

(大志) (花押)

三原右衛門大夫殿

「在御文庫二番箱他家文書中」

為^{◎(關字)}御在陳御見舞、自南北御帷子百進上候、則令披露候
 處、御祝着候旨、被成 御朱印候、我等へ帷十送給候、
 遠路芳情祝着至候、九州過半屬御存分候、嶋津事、何様
 にも御詫次第之由、種々御詫言申上半候、何篇早速可被
 任御意候條、頓可為御助事候、委曲期其節候、恐々、

1232

「在御文庫ニ番箱他家文書卷中」

文祿貳年卯月五日

帖佐返地 内九畝廿八步餘

壹段九畝廿八步

已上

浮免

隅州加治木之内領知目錄

古川三右衛門尉先

龍口

鎌田出雲守 政近◎(花押)

町田出羽守 久倍◎(花押)

池田與介殿

1231

「在御文庫ニ番箱他家文書中」
(義久墨印) (印文義久)

卯月廿八日

「南方面カシス」
堺南北惣中

石田治部少輔 三成「判」

(慶長元年)
卯月廿三日

大明勅使一人相違候へ共、今一人之儀、早と渡海之儀、被仰遣候、就其在番衆歸朝之事、最前被仰出候通、無別條候間、被得其意、可被仰渡候、恐と謹言、

民部法印 玄以

長束大藏 正家

石田治部 三成

増田右衛門 長盛

(行長)
小西攝津守殿

1233

「写在御文庫ニ番箱他家文書中」

去廿七日之御折紙、今月二日令披見候、世上之事、不慮共不存、今更申段も事舊候へ共、信長御代 大閣◎(太)様御時、似相之致忠節候、至近年御懇之事、既奉對 秀頼様、何以可致疎略哉、今度越中關東出陣之段、内府世間為御後見之條、是又奉公ニ罷成候處、案外躰ニ候、一兩日已

前、從八條殿御使節、則德善院案内者相添下候之刻、古

今集相傳之箱、證明狀并一首

いにしへも今も替らぬ世中ニ

心の程をのこすことのは

此短冊并源氏抄箱一、廿一代集

禁裏様進上候、此外知音之衆へ草案一二帖上候、存殘事

無之、令満足候、只今手前之儀候間、兎角難申候、連々

被懸御目候、御殘多候、御奉行衆へも此通被仰上候て可

給候、恐々謹言、

(慶長五年) 九月二日

玄旨判

東條紀伊守殿 (行長)

山田勘左衛門尉殿

三好助兵衛殿 (尉) 御返報

馬場菌屋しき

高貳斛六升六合六夕

浮免

井手の上 中田一反六畦廿分 貳石三斗三升三合

上田二反七畝廿二分 四石四斗三升七合 次郎兵衛

三夕 衛

馬越 下田壹段一畦十分 壹石三斗九升 伊豆守

内セト 下田一反八畦 二石壹斗六升 休介

同所 上田一反四畦 貳斛二斗四升 源左衛門尉

同所 中田一反七畦十八步 二石四斗三升三合 同人

船くら 上島壹反廿步 壹石貳斗八升 孫右衛門尉

内セト 上島八畦廿步 壹石六升 四郎左衛門尉

同所 荒島四畦 三斗二升 次郎左衛門尉

同所 中島五畦十八步 五斗六升 同人

合田畠貳十石二斗八升五合

右之地、為新知被宛行者也、

慶長五年

比志嶋紀伊守

薩州日置之郡永吉村

新知目錄

1234 「在御文庫二番箱他家文書中」

十二月廿七日

國貞

鎌田出雲守◎(花押)
政近(判)

平田太郎左衛門尉
增宗◎(花押)
增宗(判)

圖書頭

忠長

あちや地

「在御文庫二番箱他家文書中」

幸侃老御上洛之前ニ、以條書可申渡之由、被仰付候間、
急度令啓達候、

一五斗出來之儀、被成未進候諸所ハ、不可然之由、可被
仰出之由候、◎(早)「于今」御閉目專一候、兎角一着之返札給
候者、京都へ被指上せ候事、

一殿中御番之事、御盛之月に巡來候する刻、堅可被相聞
目候、御無沙汰候ハ、申上候へと、被仰置候事、

一京衆被成歸京候之刻、六文出錢之儀、被仰渡候、未進

之由、請取衆被申候、但夫丸罷上り候ニ付、入組共
候◎(者)「ハ、」、相究候て、書付預へく候、若く不相濟候ハ
、近日ニ御閉目肝要候事、

一度被仰候銀子二分并三分出銀、此外諸出物未進御座
候者、此節迄遅引無心元候由、能く可申之旨候、さて
く早速御調儀專一たるへく候事、

一其元ニて涯分被成御狩、鹿之皮十四枚被相調候て、當
所へ可被持せ候、是又不可有御油斷、題目時分ニて候
之間、如此申候事、恐く謹言、

三月廿日

(白渡) 白次郎左◎(花押)
重綱(判)

(木脇) 木若入◎(花押)
如有(判)

(平田) 平駿入◎(花押)
宗酒(判)

桑波田越後守殿

御宿所

▽◎(花押)

△

「在御文庫二番箱他家文書中」

今度きりしたんの宗門為可弘之、從彼國南蛮人六人・日
本人三人就差渡之、於松平薩摩守領内相捕候、則長崎ニ
而遂穿鑿候處、右之趣白狀候、然者度々如被 仰出、領
分浦々彌可入念之由、上意候、存其旨、急度可被申付候、
恐々謹言、

(寛永十九年)

八月十四日

嶋津萬壽殿
(入繼)

阿部對馬守
(重次)

阿部豊後守
(忠秋)

松平伊豆守
(信綱)

「在御文庫二番箱他家文書中」

態申入候、今度赤國先々御動、無殘所被仰付、悉平均罷
成候由、御手柄無是非候、則御仕置之城々可有御普請旨、
御苦勞共候、為御見舞如此候、次 大閣様 秀頼様一段
御見堅候間、可御心安候、尙追而可申入候、恐惶謹言、

(長米大藏)
長大

(慶長二年)

十月六日

嶋又太様
(八之)

人々御中

正家(判)
(花押)

「在御文庫二番箱他家文書中」

(本文書八一八六号文書ト同文ニツキ省略ス)

為音信、紅糸口十斤到來候、遠路志、悦思召候、猶石田治

部少輔可申候也、

(天正十八年九)

十二月十八日

御朱印

本郷讚岐守殿
(北)(忠虎)

(本文書ハ「旧記雜錄附録」七六号文書ト同文ナリ)

(本文書八一八四号文書ト同文ニツキ省略ス)

「在御文庫二番箱他家文書中」

態令啓候、仍 公方様御様躰言語道斷之次第候、貴意如
何候哉、於自然之儀者、彌可申談候、尙大野右京進可申

候、恐と謹言、

(永祿八年)

五月廿日

大膳大夫義統(花押 332)

謹上 朝倉左衛門督殿

武田

謹上 朝倉左衛門督殿 大膳大夫義統

1242

前十八於敵陣切岸、(筑紫)鎮恒家中之人等勵粉骨、被疵之由、

軍勞感悦候、殊更前日岩門表、於中途親類被官戰死、不

及是非候、必取靜、至彼子孫可賀之候、雖無申迄候、此

節彌被申進、可被勵馳走事、賴存候、委細吉弘左近太夫

可申候、恐と謹言、

五月廿八日

宗麟判(花押)

(鎮恒)筑紫次郎殿

「藤州家國久譜中」

「正文在阿久根蓮華寺」

1244

改年之御吉賀千喜萬幸、不可有際限候、珍重と、幸甚と、
抑年明候者、最前之御祝言可申上候處、此境ニ依逗留候、
無其分候、如何様近日可罷越候之間、以面上心事可申承
候、次之時者可預御披露候、恐惶謹言、

正月十七日

藤原國久判

進上 侍者禪師

御中

(本文書ハ「旧記雜錄附録」九号文書ト同文ナリ)

「藤州家二代國久譜中」

明應七年戊午七月廿九日卒、年五十八、法號桂林國「八イ」

久、號保泉寺、

二代國久

延久

中務大輔 下野守 大田氏元祖也、入道名為定、

子孫記別紙、

「續久イ」忠量

彈正忠

三代
成久

初重久 字菊千代丸 三郎太郎 薩摩守

三月四日卒、法號天倫西賢、

忠貞

忠綱

駿河守 大野氏祖也、子孫記別紙、

秀久

三郎九郎 伊勢守 吉利氏祖、子孫記別紙、

「威津」
爲心

西花和尚 成應寺住持、感應寺敷、

女子

光久

又次郎 越後守 寺山氏祖、子孫記別紙、

女子

菱刈大和守重副室、

女子

佐多氏某室、

女子

御東

四代
忠興

薩摩守實久

字初千代丸 三郎太郎 薩摩守

母修理亮忠廉女也、

大永五年乙酉十月九日卒、法號隆岳興公、

女子

比丘尼松岩妙泉雪慶院

筑前守

女子

實久室、上之城妙朝

伊勢守

號西川、

女子

越後守室、

上野守

祁答院駿河守

又十郎

女子

○淨「成イ」
滿「城」寺

女子

常陸守室、

「恩イ」
法息寺

1245

「薩州家忠興譜中」

「正文在本田作左衛門宣親」

□

改年之御大慶千喜萬祥、雖申上支舊候、猶更不可有際限候、多幸々、抑就如此之御祝詞、任佳例捧慶書候、如何樣以參上、自他御満足之儀、重疊可申加候、仍五明齋本致進上候、誠萬歲不易、奉表御祝儀計候、以此旨可預御披露候、恐惶敬白、

正月十一日

進上 本田因幡守殿

薩摩守忠興(花押128)

(本文書ハ「旧記雜錄附録」二二三号文書ト同文ナリ)

1246

「薩州家系圖」

忠興ノ子

女子

「香イ」
太守忠兼初室、法號雪山了昌

五代モト
久意

初實久 三郎太郎 八郎左衛門尉 薩摩守

1247

「正文在奈良原清左衛門長」

就今度弓矢、子息三人高名之事、無比類候條々無禮之至候、何樣其方へ可罷下候之間、期面候事候、恐々謹言、

卯月九日

實久判

奈良原殿

「上包」

奈良原殿

實久

八郎左衛門尉

〔本文書ハ「旧記雜錄附録」二二〇号文書ト同文ナリ〕

1248

「正文有之」

追而自然境目隙入子細候者、以親類中申上肝要候、

何方へも從其方可被成御意見候、御奉公此時候、

勝久様就御光儀、先日東光寺為使僧進之候處、御奉公之

心底承候而、千秋萬歲、可然存候、其當概眞幸へ銘々申

入候、定而可為御悅喜候、此節之事者各自身參上專一候、

殊更其方之事者御奉公無餘儀候、御分別之前候間、不及

申候、方々御奉公之義、無餘義被申候間、我々事、來月

五日眞幸へ參上可申之覺悟候、其砌無油斷頼存候、何様

於眞幸面談可申候間、不能〔詳〕候、恐々謹言、

七月廿八日

實久〔判〕
〔花押〕

伊地知周防守殿

御宿所

〔本文書ハ「旧記雜錄附録」二二二号文書、六四〇号文書ト同文ナリ〕

1249

「薩州家系圖」

實久ノ子

女子

菱刈大和守重猛入道天眼室、

女子

祁答院義重室、

義虎

初晴久 次ニ陽久 次義利 三郎太郎 薩摩守

母成久女也、

在京之際賜 將軍家諱字、是以改陽久稱義利、又

改為義虎也、

女子

巽伯耆守妻、母川上上野守忠克女也、

女子

飯島小川某妻、

忠継

三男忠角

千三郎 左馬頭

初忠豐 號三葉、東市正 左近大夫 母川上上野

守忠克女也、

1250

「薩州家譜中」
忠清弟忠榮之子孫
久矩

領水引居住于當所矣、
有八幡大菩薩靈夢之得告、而後號三葉也、
元和七年十二月十一日死、

初久明 菊千代 長七郎 民部

承應元年壬辰四月十日誕生、母相良新右衛門長貞女、
元祿八年乙亥二月十六日死、

1251

薩摩家備前忠清弟
忠榮之末孫民部久矩子
久近

菊千代 彌市郎 伊織
延寶元年癸丑十月十六日誕生、母島津豐前久守女、
經東

鎌菊 與三左衛門

母村田與左衛門經尙女、

1252

吉利氏系圖元祖秀久二男
刑部少輔久起ノ子
女子

初嫁白坂七右衛門尉、生一男、後離別後嫁壹岐
加賀守幸則、產一女、此女嫁平田盛右衛門尉純
正、生一男、此男連續幸則之家、即壹岐源左衛
門尉幸伯也、

刑部少輔忠知 備後守久通

為村田鄉左衛門經武之養子也、
久昌
菊千代 彌市郎
元祿九年丙子九月十七日誕生、母伊東仁右衛門祐
秋女、
用
鎌菊 號岩越、
元祿十四年辛巳二月五日誕生、母同、

兵部左衛門久商

住于市來、子孫在彼地、

吉利氏系圖下總守忠張子
一女子

久在
仲四郎 久守室、

三郎九郎 山城守

元和二年丙辰十一月二日誕生、母比志島紀伊守國

貞女也、

寬永十六年己卯正月廿四日死、年廿四、

久良

初忠豐 久守 菊壽丸 仲四郎 狩野介

慶長十八年癸丑八月八日誕生、母野村大學介元綱
女、

久在早世、無繼子故妻久在之姉、而連續當家、實

義岡宮内太輔久達之長子也、

明曆三年丁酉八月九日死、

忠名

一初久村 久連 虎菊丸 三郎九郎 李右衛門

治部

正保二年乙酉二月六日誕生、母祖父忠張女、

元祿十五年壬午八月晦日死、

忠員

虎鶴丸 休二郎

延寶元年癸丑十一月七日誕生、母諏方李右衛門兼

利養女、

元祿九年丙子十月十日死、

忠儀

萬千代 仲三郎 李之助

1254

延寶九年辛酉三月十一日誕生、母同前、
兄忠員早世、故相續家督、
寶永三年丙戌七月二十三日死、

久副

初忠記 長虎 李右衛門

寶永二年乙酉五月五日誕生、母米良五郎兵衛重郷女、

「寺山氏系圖」

光久

又次郎 越後守 寺山元祖

薩摩守國久六男也、

直久

出羽守

光久依無世子為猶子、實大野駿河守忠悛法師瑚璉

二男也、

1255

谷山神前城和睦之時為質、實直久九歲也、其後
貴久主賜同所五ヶ別府、居住于夫地矣、奉 太守
之命、島津氏之朋族、永祿元年戊午十二月廿七日、
各以所領之地定稱號、故直久亦初號寺山、有其故
五ヶ別府村之内有稱寺山之符倉、是以如此也、

女子 肝付雅樂助室、

女子 三原神祇重行室、

久兼

四郎左衛門尉 入道定雲、

永祿十年丁卯生、母猿渡休覺女、

「寺山氏系圖」

三代久兼之子

女子 肝付主稅助室、夫婦共他國出奔、

女子 大寺主計助室、

四代
久豊

善四郎 出羽守

母河上彦七郎久昭女也、

寛永七年庚午十月十三日死去、

甚右衛門尉

寛永二年十月廿九日死、年廿三、

久堅

土佐守

伊集院備後守為猶子、

寛永六年七月三日於武州江戸死、年廿七、

女子 又右衛門妻、

五代
久貞

初忠昌 右近四郎左衛門 又右衛門

慶長十七年壬子五月八日誕生、母鎌田藏人政富女

久豊有一女無男子、妻一女為猶子、實佐多伯耆守

忠充三男也、

轉補薩州坊津・隅州始良等之地頭職、

元祿三年庚午十一月廿八日死、年七十九、

六代

四郎左衛門久任

七代 養子

四郎右衛門久長

慶安四年生、

寛永四年生、

八代

太郎左衛門久年

九代

十兵衛久繁

明曆三年生、

元祿六年生、

十代

源右衛門用長

元祿七年生、北郷久嘉三男、

1256

元祖 「大田氏系圖」

延久

新三郎 中務太輔 下野守 入道稱為足、

島津薩摩守用久次男、母太守忠國公女也、領地于

川邊郡、居住于當所矣、

法名物外、號道超、葬玉泉寺、

女子

島津駿河守忠綱室也、

女子

佐多伯耆守忠和室也、

昌久

中務大輔 下野守 入道稱世加、

雖居于薩摩守重久簾下、獻居城川邊於 太守忠昌、

以為昵近、居住于南郷、其後居于田布施也、

忠福

新三郎

忠聖

初忠孝 式部少輔 山城守 入道稱安心、法

號孝翁等忠、

女子 伊東院氏妻也、

女子

島津常陸守勝久妻也、

女子

忠光

筑前守 母新納氏女、

忠秀

筑前守 初號大田、法名三喜、

女子

御松

天正七年己卯誕生、母種田氏女也、

女子

西俣彦右衛門尉妻也、母同前、

又兵衛尉忠安

左近將監忠富 淡路守久存

子孫薩州川邊士也、 初號大田、

又八郎忠廣

於日州飮肥戰死、

三代
忠成

四郎三郎 中務大輔

母伊作又四郎善久弟二女也、

老父世加凡誅之後、與母堂俱屈居于阿多矣、雖然、

實久之偽謀漸既露顯、由是當 貴久公代賜加世田

之內田中門・久木野門、田布施之內大園門・中窪

門共二十町、而後應叔父 日新齋之招、移居于加

世田也、

於加世田死、法號禪翁增參、

女子 母同前、早世、

忠續

初忠弘 五郎三郎 治部左衛門 周防介 入道

太閤 母同前、

與兄忠成同時賜阿多之內宮崎、而居住于此、

女子

肝付彈正忠兼堯妻、

四代
女子

寺山出羽守直久妻、

四代
忠與

四郎三郎 治部少輔 周防介

天文六年丁酉誕生、

忠成有女子二人而無男子、故為猶子、實周防介忠

續長男也、

五代
忠好

初久成又忠綱 仙千代 四郎三郎 右近將監 吉

兵衛尉

元龜元年庚午四月廿八日於阿多生、母吉田若狹守

宗清女也、

1257

「大田氏系圖」
五代
吉兵衛忠好

初忠綱

女子

為忠角妻、忠角死後再嫁桂太郎兵衛尉忠増、産

一女也、母稅所宮内少輔篤正女也、

六代
忠角

千三郎 左馬頭

天正十八年庚寅於阿久根誕生、母栖木六郎女也、

忠綱靡翹羅奇病蟄居、有一女無繼子、故承 太守

義弘公命為猶子、妻一女連續當家、實島津薩摩守

實久之庶子三葉左近太夫忠繼入道竹庵三男也、

1258

「薩州支流大田氏系圖」
忠綱養子

左馬頭忠角 初千三郎

七代
忠服

松千代丸 四郎三郎

慶長十九年甲寅正月十四日於隅州加治木生、母忠

綱女、

寛永十四年丁丑閏三月二十九日死、年廿四、

忠正 七郎兵衛用好 庄右衛門用信

初忠昌 千代次 休兵衛 加賀右衛門

八代
久知

仙千代 四郎三郎 治部左衛門 小平次

寛永十二年乙亥九月十日生、母稅所因幡篤經女、

寛文十一年辛亥三月十日死、年三十七、

女子

深栖加右衛門政義妻、

九代
忠起 母桂民部忠秀女、

十代
用松

四郎三郎 小平次

初忠昶 平七 吉兵衛

女子
母大田筑左衛門忠興女、

元祖 「薩州庶子大野氏系圖」
忠綱

駿河守

島津薩摩守國久三男、居住加世田山田也、
法名節傳、

(二代)
忠悟

三郎二郎 駿河守 淡路守

寛文二年壬寅十二月十一日 元祿十二年戊寅五月廿

生、母同前、 五日生、母小平次久知

元祿十年丁丑十二月十六日 女、

死、年三十六、 實伊集院權右衛門盛央

彌左衛門忠宣初三郎

為外伯父桂吉兵衛忠豐猶子、

二男、

女子

伊集院權右衛門盛央妻、

女子

忠康 將右衛門尉久重

右衛門太輔「淡路守」 早世、 高山地頭也、

忠郷

三郎五郎 於吉松戰、

(三代)
忠元

三郎次郎 太郎左衛門尉 駿河守

直久

出羽守

寺山越後守光久為猶子、

女子

大野將右衛門尉久重室、

(四代)
忠宗

三郎次郎 治部少輔 駿河守

有違 太守義久主之事、而文祿元年所以誅戮於川

邊堂尾者也、法名蓮忠、

女子

新納近江守武久室、

女子

妙春

忠宗有一女無男子故、請樺山兵部大輔忠助之二男七

郎久高為猶子、妻一女、已產二女之後、文祿元年嚴

親忠宗既被凡誅、由是久高亦屈居于寺院矣、于時

又一郎久保主、朝鮮國渡楫之時、徵久高於屈居、去

大野、如元為樺山、加供奉列也、

○匪啻嚴親凡誅之會大變、與久高亦已所離別、寡婦無

告者、不得父母之居生國、而歎歎綿々赴上方、在京

師者五ヶ年、其後辭京師歸生國、居川邊者二ヶ年也、

○先是所產生之二女、長嫁本田伊豫守親正、次嫁島津

下總守常久矣、

○慶長十年乙巳猛秋、島津豐後守忠朝少女為 太守質

赴上方矣、丁此之時、有 惟新尊君之命日、當國婦

人無知上方風俗者、妙春數年在京都、所以能知美風

也、今從所質宜赴上都矣、妙春報曰、數年罕籠寡婦

何得供奉乎哉、固辭迄再三矣、雖然不許曰、今度為

供奉抽忠貞、則宜亡父忠宗之立後嗣、由是隨 君命

勤局之役、遂上都也、

○經年月之後、所質之女子嫁 松平隱岐守殿、住遠江

州掛川、漸已產男子、夫婦膠漆之交也、於茲乎得歸

國免矣、

○既歸生國、斯不違前約、新賜二百石領地、故撰一二

童子、而雖為繼子、不遂退去者也、妙春迨老年、而

未有繼子孔以患之、以三原左衛門佐重饒二子為猶子

也、再所興起當家者、偏妙春之所致也、

寬永十五年戊寅五月二十三日死去、年七十六、法號

俊玉妙春大姉、

久行

初久行 久近 藤次 藤四郎 內記

母鎌田藏人政富女也、

妙春為猶子、實三原左衛門佐重饒二男也、

正保四年、久行補薩州鶴田地頭職、

慶安二年五月、轉鶴田賜隅州山田之地頭職、

明曆三年丁酉十月朔日死、年三十六、

—女子

禪山權左衛門久清妻、

母禪山安藝守久守女也、

—女子

久明妻、

母和田讚岐政貞女也、

—久明

初久嘉 久木 助之進 源右衛門 隼人 通眞

寬永九年壬申十一月二十八日誕生、母妾、

久行依無世子為猶子、實新納右門衛久詮之二男也、

轉任奏者番・京都藏奉行・用人等之役、

薩州坊泊・吉田・串木野・百引・羽月・日州松山
等地頭云々、

—女子

新納主殿忠鎮妻、

母三原左衛門重饒女也、

—天亡二人

—久矩

萬五郎 權之丞 隼人 七郎太夫

元祿元年戊辰十月二十五日生、母薩州高江士羽月

彌六兵衛元重女也、

實島津備前久達三男也、為養子、

1260

「薩州庶子西川氏系圖」

—女子 菱刈大和守重副妻、

—女子 佐多氏某室、

—女子 御東

薩州家四代
忠興

字初千代丸 三郎太郎 薩摩守

母修理亮忠廉女也、

— 女子

比丘尼 松岩妙泉雪慶院

— 筑前守

— 女子

實久室 上之城妙朝

— 元祖
久興

紀伊守 伊勢守 母同忠興、

— 女子

越後守室、

— 久任

平三郎 三郎兵衛 上野守 母同忠興、

— 祁答院駿河守

— 男女四人 略

忠則 — 子孫多シ、略

平三郎 源右衛門 號西川、

請家號左京亮久守號西川為庶族、

〔二代〕
忠陽

初忠直 伊勢守

天文七年戊戌誕生、

天正九年辛巳八月二十日於肥後國水俣戰死、年四

十四、于時藤川萬兵衛尉・石塚八左衛門尉・八郎

右衛門亦戰死也、法號貴山慶富、

— 女子二人

— 女子

西川源右衛門尉忠則妻、

〔三代〕
久守

號西川、稻菊 佐平次 左京亮 入道名素伯、

天正七年己卯九月二十六日生、母妾、

萬治二年己亥八月八日死、年八十一、法號明窓素
伯居士、

四代
久吉

稻菊 新右衛門

慶長十二年丁未十月廿三日生、母大村士赤崎甚左
衛門姉、寛文元年辛丑閏八月七日死、年五十五、

久當 子孫多シ 略

初頼益 菊千代 十左衛門

元和三年丁巳六月十三日生、母同、

男女二人 略

五代
久憲

六大夫 用應

稻助 六太夫

寛永六年己巳二月十日生、母島津圖書忠長家臣兒島

四郎兵衛高繼女也、去鶴田為出水士也、

寶永七年庚寅八月三日死、年八十五、

(表紙)

御支族列

附錄
舊記雜錄
卷廿七

1261
新納氏正統系圖

時久

號新納、四郎左衛門尉 近江守 入道名祐齋、妻

田原氏女、

四代 太守下野守忠宗四男也、

時久爲守護代、或在相州鎌倉、或在京師勞軍務者、

1262

非一朝一夕之故、既爲 將軍家尊氏卿之代、畿內郊

外鬪亂之際、擲一命抽軍忠、于時 將軍家感其軍功、

匪啻昇數多之重器、號兩島津、許守護之裝束、且復

補日州新納院地頭職、因茲號新納、共以記左方、

御太刀一振片シノギ冶工
山之内藤源次・御太刀一振冶工備
前長光・文書一箱

・安部貞任之繪一流、尊氏卿賜之、白弓袋・白笠〔筆力〕

袋及花氈鞍、蓋同爲號兩島津之證據、所以赦免也、

〔建武二年十二月十一日・全三年卯月一日ノ書各其年月ニ在リ、略ス〕

「寫在新納喜右衛門久盛」

日向國新納院地頭職事、嶋津四郎〔時久〕拜領之處、濫妨之

由、其聞候、殊忠之仁候、無爲可被沙汰付候、恐々

謹言、

八月廿四日

武藏權守師直

在判

謹上 島山修理亮殿〔直題〕

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八二七号文書ト同文ナリ)

「寫在新納喜右衛門久盛」

鳴津四郎申候、日向國新色院事、任先例、無煩之樣、可被懸御意候、且此仁軍忠候、隨而當參奉公事候之間、如此令申候、恐々謹言、

十二月廿一日

武藏權守師直在判

謹上 畠山修理亮七郎殿(直類)

〔本文書ハ、「旧記雜錄前編」一八二八号文書ト同文ナリ〕

「寫在新納喜右衛門久盛」

其後御在國之躰、何樣候哉、無心元存候、抑◎(改行)嶋津四郎所領日向國新納院内宮頸村事、爲當院内先地頭等知行候之處、今度始御代官違亂之由被申候、彼仁殊更於京都申承子細候、其上自執事度々被成施行候狀、何樣にも可被止御違亂候哉、次領家職事、同任先地頭例、無子細之樣沙汰候者、悦入候、尙々無異他子細候之間、如此令申候、諸事急速計御沙汰候者爲悦候、心事期後信候、恐々謹言、

十二月廿三日

沙彌明眼在判

謹上 畠山修理亮七郎殿

〔本文書ハ、「旧記雜錄前編」一八二九号文書ト同文ナリ〕

爲守護之代上京師、經年月不在之際、日向州御家人有畠山修理亮直顯者、屬右兵衛佐直多尊氏卿之三男他腹之旗下、圍我之新城、所以攻責、數月、而後沒落者也、

「貞和五年八月十二日ノ件ハ其年間ニ記セリ、略ス」

法名道宏、號宗綱、

久有

號西谷、四郎九郎、子孫記別紙矣、

二代實久

修理亮 越後守 妻肝付氏女也、

「應安六年三月一日義原軍ノ件ハ其年月ニ記ス」

鎮西探題、澁川右兵衛佐滿頼、到肥之後州二見、而留滯之際、太守元久公之爲名代、到二見、公

私之了簡、見聞之人莫不美談者矣、且復有犬追物、實久亦有射手之列、引日目上一尺八寸、其下共及二尺、故矢取之小童等、戲稱之曰、島津之黑傘、暨後年、亦謳歌之云云、

法名道宗、號心傳、

將監

爲元久主之名代、發肥後州屬 將軍方、於白川途戰死、

久吉

號大崎、他腹、子孫記別紙矣、

久顯

號惡四郎、八郎三郎 子孫記別紙矣、妻佐伯氏女也、

三代
忠臣

初久臣 越後守 近江守 妻北郷氏女、

〔應永十九年・廿年ノ文書、其年月ニ記ス〕

文安六年、^巳巳即寶徳二月廿五日卒、法名道能、號智海、

氏豐

又次郎 遠江守 子孫記別紙、

女子

飢肥某室、

四代ノリ
忠治

修理亮 妻野邊氏女、

寶徳二年庚午三月廿一日卒、法名道東、號照山、

女子

太守陸奥守忠國簾中、

忠匡

四郎三郎 子孫記別楮者也、

女子

肝付河内守兼元室、河内守兼忠母、

忠次

又六郎

僧

女子

山田河内守母、

女子

末弘氏母、

忠時

周防守「因幡守イ」 子孫記別楮矣、

ノリ「又六郎イ」
書久

治部少輔

四郎九郎

◎忠時
「忠時」「イ、忠時」

忠基

右衛門兵衛尉

「張紙アリ」
治部少輔書久二男右衛門兵衛尉トアリ、然ハ子ニ

系リタルハ誤カ、

女子

五代
忠續
新納四郎三郎忠匡室、

近江守

妻ハ◎(關守) 陸奥守忠國第三女也、

救仁院即志希志也

之外賜飲肥、居于此者二十九年也、
文明十八年丙午、易飲肥於末吉・財部・救仁郷大即

崎達原也 賜之、知件之諸所者、共四十一年也、

延徳元年己酉九月廿日卒、法名道欣、號笑翁、

是久

四郎太郎 駿河守 他腹也、子孫記別紙矣、

女子

他腹、

忠明

三郎左衛門尉

兄忠續依無世子、爲猶子也、

了山和尙

六代
忠明

三郎左衛門尉 越前守 近江守

兄忠續無世子、故爲猶子矣、

當代之文書所以未泯盡者、僉以記左方矣、

〔應永十四年霜月廿四日ノ書其年月ニ記セリ、略ス〕

〔正文在新納三河忠徳入道楚行〕

誠二春之御慶珎重幸甚、更ニ不可有盡期候、萬福千祥、抑就如此之御慶〔從〕^{⑤預}御賀書候、大悅候、當春諸事御満足之由承及、御同前大慶候、如何様近日可參會候間、以面拜、益御祝儀可加申候、萬吉、恐々謹言、

〔文明年間〕
二月十三日 國久〔花押306〕

謹上 新納越前守殿

〔忠明〕
御返報

〔前書之追而書也〕
追而申候、

爲祝儀五明一本給候、日出候、自是も扇子一本進之候、

仍其方御越之由日出候、明日罷立候間、やかて可參

會候、當參之御方何も若衆にて候間、以參會候事何

とやらん御座候はん、察存候、我々もひとりものた

るへく候哉、御參之由承候て、満足申候、御同前察

存候、我々犬見物人衆參候へと、舊冬にかくしく

仰候間、不似合なから用意申候、其さま是非御した

く肝要之由、仰候へと申へく候、内々御用意候へく

候、我等に三御まさり候之間、こしのいたく御座候

らん事、察存候、重而恐々謹言、

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」一五八号文書ト同文ナリ〕

明應三年寅甲七月廿七日卒、法名光忠、號義圓、

七代
忠武

四郎 近江守 妻北郷尾張守數久女也、

當代陷梅北・百引・平房之三城、所以領知也、

當代之文書、所存悉記左矣、

大永元年辛巳霜月十七日卒、法名忠新、號鷹山、

忠時 女子

新四郎 道號了心、

源四郎

早世、

三郎四郎 僧

他腹、

於莊內末吉切腹、崇其靈於末吉、號幻亭大明神、

女子

新納左京亮忠祐室、

八代
忠勝

初忠家 四郎 彈正忠 近江守 入道稱栖嵐齋、

延德三年辛亥誕生、妻伊東大和守尹祐女、

定居於敦仁院志布志 而大崎・松山・末吉・恆吉

・高隈市成・牛根・垂水共所以領知、而新納氏之

繁榮有此時矣、

1267

川上左衛門尉義久法師道安者、弓馬之達人也、由是預島津氏累世所以傳來之書、許容弟子隨器量授其書矣、故忠家亦請傳習之、于時老父忠武、先是有流十二卷記於授受道安、可相續之旨、得一紙之免狀、又請蹴鞠傳習之書於京師、而賜東征齋免狀、且復隣國諸侯、及同僚贈書簡、答書亦裁焉、天文之始、遊行上人來于志布志留滯之際、興行于歌之會、丁此之時薩隅日諸所悉以雖經歷、無企歌會之人也、又小笠原刑部少輔光清、有詣鶴戶明神之聲、遣价使於其地、所以請待志布志、而抑留二箇年之際、傳習弓馬之術、張行犬追物於一家、由是請待當時之 太守陸奧守忠昌張行犬追物迄再三矣、是以 太守乘佳興加檢見、百事盡美麗、貴賤驚耳目也、其文書等所存、悉以記左方矣、

「正文在新納又左衛門久正」

當家犬追物一流、愚老相傳之處、依新納忠家懇望、

雖悉相續候、以前忠武不殘存分申達候、可有談合旨
肝要候、然者眞實成志人候之者、可被傳授事可然候、
仍爲後代、染短筆進之者也、恐々謹言、

六月一日

(川上義久)
嶋津道安入道(花押275)

新納四郎殿進覽候

上包

新納四郎殿

進之候

嶋津道安入道

「正文在新納三河忠徳入道楚弓」

尙々有合候間、散々候へ共、是之料紙に書申候、

それよりのハ返し進之候、

蹴鞠條と斟酌雖不被淺候、類ニ御懇望別而御執心之

間、當時可用立分少々書付進之候、聊以外見有間敷

候、殊拙子染(◎)「惡」筆候間、見得ましく候、被成御推

量可有一覽候、心緒猶期面謁候、かしく、

自都

東征齋

「上番」「張紙」「忠勝欵」
新四(◎)もし

まいる

「正文在新納三河忠徳入道楚弓」
大周和尙下向候、別而信仰條於自然之儀者、無疎略、
令馳走者、可為神妙候也、

二月三日

(花押367)

新納近江守殿

「全上」

御先祖政親之御代者、毎々雖得御意候、自然中絶、

頗失本意候、自今以後者可申入覺悟候、仍太刀一腰

作一文字金覆輪令進獻候、表御祝儀計候、以此旨可預御披露

候、恐惶謹言、

霜月廿三日

近江守忠勝在判

大友殿「朱力平」
「修理大夫義石」

人々御中

「案文在新納三河忠徳入道楚弓」

御先祖政親様之御代者、毎々雖被得御意候、自然中

絶、頗非本意令存候、於自今以後者、爲(◎)被申入、

若輩被進使節候、御執持奉憑候、恐々謹言、

霜月廿三日

歳信在判

本庄殿

人々御中

中野

「上書」
本庄殿

歳信

「正文全上」

寔近代者自他御不通之條、非本意之由、被存之折節、御音問祝着之段、以直書被申候、自今以後者、倍可被申通之由候、玆重候、仍厚板一端青地被懸御意候、畏入候、必以使節可被申述之由候間、旁期其時令省略候、恐惶謹言、

十二月十三日

親榮[㊤]〔花押〕

江州

參 貴報

本庄新左衛門尉

「上カキ」
江州

參 貴報

親榮

「正文全上」

誠近代御不通、自他慮外候折節、御音問之段、祝着之由候、委細直申述候、自今以後者、彌御深重之儀、尤以玆重候、必以使節可被申之由、猶飯福寺可有演說之條、先不能一二候、恐々謹言、

十二月十三日

親榮[㊤]〔花押〕

中野安房守殿

御報

本庄新左衛門尉

「上書」

中野安房守殿

御報

親榮

「正文全上」

雖未申通候、光臺寺歸洛之間、一筆令啓候、不圖令下國遂向顔度願望迄候、仍海德寺之[㊤]〔ナシ〕事無主之由候、被添御詞新候故、被相居候者、可然候、數代御信

心之事候之間、不可有相違存候、旁彼口上申含候、
穴賢々、南無阿彌陀佛、

九月六日

他阿彌道佛

嶋津近江守殿

「寫在新納三河忠徳入道楚弓」

一時久日向國新納之高城に居住、在名に(よカ)さつて新納

とかふす、其留主に彼所者伊東うはいとり候、此

時貞久様為御代在京、

其後薩摩國高江を貞久公より被下住す、其以後救

仁院知行、彼所を御所卷之節、時久依被抽忠勲、

從 尊氏將軍直ニ被成御判所也、

一笠袋蔽覆之儀も、右之刻尊氏將軍新納之家ニ御免

候事、

一長光之御太刀拜受候之事、

一此時從 御屋形様ハ御賀札を、諸一家より最前ニ

被下候事、

一年頭出仕之刻、御内之御門を御開候之事、

一八朔太刀諸一家より初ニ御請取候之事、

一弓袋代者、小笠原光清、鷓戸就參詣御下向之刻、

御免候事、

一くま抑之むち、同犬打むち之事、

一あかうるしの引目事、

一あわせ之事、

忠勝一代之事
右四ヶ條者一代たるへき之事、

「正文全上」

追而ゑんひ之儀、何もゆるし申儀にて候之間、承

候て相誘認可遣候、

去年罷下候之砌不懸御目候者、無曲存候、其後無音

相過候、心外候、仍今度至太陽寺、御傳言之儀具承

候、精敷者彼方可被達候之條、不能重言候、將又先

年ゑんひの本之儀承候之間、進之候ツ、夫ハ落髮候

て、聽而現俗之時之本にて候、落髮之ま、にて候時

者、別のゑんひにて候、御用候ハ、可承候、從此方誘可遣候、段子などにては仕候、其時分急候て理を不申候、爲御存知候、恐く謹言、

九月二日 晴長〔判〕〔花押〕

晴嵐齋 御宿所

小笠原

晴嵐齋〔上書〕 御宿所 晴長

當代十二ヶ年之間不怠政道、而天文二年癸巳十二月十六日禪世務於忠重、爲隱居身實四十三歳、同九年庚子三月二日落髮、稱齋於栖嵐、五十歳、

憑繪師之有其名者寫己之影、而後扣前永平照山和尚之禪關、而請立號贊之贈焉、和尚既許諾矣、天文十六年丁未二月十五日書寫、以賜之也、其贊記左、

前永平照山叟贊之

于時天文十六年丁未仲春十五日

誰知一手展開裏 提起雲門念七禪
眞面當頭正與偏 中門端的徹那邊
門之一數者夢云々

公案破却一兮拈得七仰之瞻之預洞關偏正不墮有無之
杭、因識得一則之、于茲 鳳林道儀庵主〔通和曹洞之玄〕

▽〔以〕 鳳林道儀庵主 在影〔朱力キ〕

恭以島津之後胤新納江州太守道儀庵主者、天分精爽、而有俊人之風規、祿位高官、德澤蘭馥、文經武緯、威風草偃、謂其柔則温和、而如兇羅綿、謂其剛則直義、而似南賓鐵、吁蓋世之賢良冠一時者乎、加之理積善之名門、早學作佛觀現世之不實、便解修心、誠是眞俗不二之禪侶也、一日、就豫需雅稱書于鳳林之〔以〕二字、〔似〕應其請賦于伽陀一章、以證德儀乎云爾、
聖代時清寶宇中丸苞禽羽宿青桐二株、嫩桂成隣處枝
葉蔭涼揚祖風 前贈永平青林老納書旃、

天文七年戊戌三月廿六日、降島津豐後守忠朝、去志
布志到飢肥矣、委曲記忠茂譜中也、天文十八年己酉
二月八日卒、享年五十九、法名儀道、號鳳林、
久秋

後忠安 次郎五郎 左兵衛尉 他腹、
同姓上野介忠尊、依無世子為猶子也、

女子

島津右馬頭忠廣室、早世、母北鄉尾張守女也、

忠郷

「閨イ」

新三郎 式部太輔 宇宿腹、子孫記別紙、

天文十年九月三日於山東戰死、

時宗

他腹、早世、

九代
忠茂

初忠重 四郎 永正七年庚午生、母伊東大和守

伊祐第二之女、妻島津薩摩守忠興第三之女也、

永祿四年辛酉十一月廿日卒、年五十二、法名芳林、
號梅屋、

忠常

孫四郎 母同前、子孫記別紙、

天文十一年九月三日於日州山東戰死、法號日山喜

杲カウ

忠賢

四郎次郎 左馬頭

女子 伊東權頭室、

權頭死別之後、在佐土原、稱綱馬場、伊東氏沒

落之時、島津左衛門督歲久之為妾、在鶴田產一

女也、

聖道

女子

還俗而後稱如心齋忠明、

十代
武久

四郎 近江守

享祿三庚寅歲於志布志生、

去日當山而移薩州平泉、踵賜于日州富田居有年于

茲、

天正年間不記何年以十月十九日卒于富田、法名良宅、

號天祐、

季久

四郎五郎 右衛門尉

村田越前守經定之猶子、

女子

十一代 樺山太郎三郎規久室、

忠眞

四郎

永祿七年甲子誕生于日當山、母大野駿河守忠元女、

○從嚴父移平泉、又移富田、

忠眞少而才藝超世、遂二十歲而發狂病矣、嗚呼天

衷斯人者乎耶、

天正十五年當于 關白秀吉公征西之時、日州過半

為公領、故忠眞去于富田來末吉胥處、其後移谷山

水樽、又姑移住莊內薄木野、而後住于菱刈市山、

又從而居于伊集院福山、終於踊三體堂之食邑卒、

于時寬永十四年七月十八日卒、年七十三、法名玄

龍、道號臥雲、

十二代
久元

始忠在 新八郎 近江守

忠眞無嗣故、慶長四年春為養子、而相續于家、實

島津圖書頭忠長入道紹益之二男也、

補百次薩州地頭職、

〔慶長四年・五年ハ別記アリ、略ス〕

慶長八年癸卯十二月移居眞幸院末永村、同十四年

賜馬越地頭職徙之、由是改替末永采邑、於馬越・

大口・曾木之内給焉、

慶長十四年、久元之兄河內守忠倍先父而卒、故久元辭當家而繼實父忠長之家、故翌年六月二十六日去馬越移宮城、

十三代
忠影

又助 近江守

久元辭當家、故連續之、實島津備前守忠清子也、忠清者島津薩摩守義虎之三男也、長兄又太郎忠辰、於朝鮮遠秀吉公之命、而見沒收乎所領、忠清以兄之故被預小西行長在肥後州、有年關原役行長死後歸于薩矣、忠清妻于肥後土著吉久右衛門續能之女、生一女一男也、女、太守光久公之御母、男即忠影也。

○慶長九年甲辰誕生、

忠影食采地千二百五十石千石在菱刈郡市山、二百五十石者散在、鹿兒島郡川上村、吉野村・西田村且桑、而後令減諸士各所領之地四分之一原郡吉松之內、

收公、當此時忠影全領九百四十三斛五百二十石在于伊集院福山、其餘在栗野羽月・日當山之內嘉例川等

或時忠影列犬迫物射手捍領鞍馬一匹所敷之鞍、號武藏鞍・短刀

一腰、

忠影不幸短命而、以寬永五年戊辰十二月二十九日

卒、年二十五、法諱宗智、號大鑑、

十四代
久辰

千代菊 四郎 近江 四郎左衛門 又改近江、入道名達心齋、

嚴父沒後寬永六己巳歲正月二十日生、母同氏右衛門佐久詮女、妻同氏刑部忠秀女、而後離別、久辰始生、則 太守黃門家久公枉 尊駕、見之於產室、賀之曰、亡父之後無相違、即賜焉母宜令孤長、謹莫怠云云、

光久公之母堂者久辰之伯母也、以故 家久公殊憐久辰、在襁褓之中奉近昵乎 公之膝下數回也、寬永十一年 太守公之領國齊正經界、而改替於諸士之采地焉、久辰豫蒙 國命云有所欲之地告之矣、僉曰一所之地者カラス爪有城、今才雖食一村不可無城也、夫隅州踊之內三代堂村者雖不田地多、而有萩之峯城之可矣、以請之地、故變換伊集院之內福山村、

大口之内市比野村、以賜三代堂村高六百斛之地也餘高、二百斛於飯野之内領、其地方東西三十二町四十間南北四十四町三十間、總準一所拜受之地、

正德三年癸巳十月八日死、年八十五、

—女子
十五代
久珍 山田彌九郎有英妻、

德千代 四郎 四郎左衛門 美作 市正

寬文五年乙巳十月廿八日生、

貞享五年九月二十三日 太守網貴公以久珍補横目

頭役今大、目附

元祿十年六月十日補家老職、

同十三年三月十五日 網貴公參府于江都登關字柳營

之時、久珍供奉而奉見 將軍家、獻上御太刀・馬

代・御衣服等矣、

寶永七年庚寅二月十日死、年四十六、

—女子

五代勝左衛門友昌妻、他腹、

十六代
—久邦

滿千代 發千代 助四郎 四郎左衛門

元祿六年癸酉五月十七日生、母高崎權太夫能冬女、

—久基

彌次郎 又作 孫四郎

元祿七年甲戌七月十三日生、母同前、

爲島津備前忠清之後嗣、

—女子

島津玄蕃忠直室、忠直死去之後歸家、

—女子

母妾腹、

新納氏庶流系圖

1277

忠郷

新三郎 式部大輔 宇宿腹、

新納家七代家督近江守忠武之二男也、

天文十年辛丑九月二日於山東戰死、法名竹翁道松、

忠衡

新三郎 式部大輔

永祿七年甲子七月十七日於福島院桂原戰死、法名

匡壁忠衡、

忠朝

源八郎 式部少輔

新納紀伊守久景依無世子連續夫跡者也、

忠賴

新三郎 佐左衛門尉

天正十七年己丑十一月八日生、母春山元稱熊谷越中直

定妹、

忠衡之一子式部少輔忠朝連續久景之跡、因茲忠衡

之跡將斷絕、是以連續夫跡、實式部少輔忠朝之二

男也、

萬治二年己亥七月七日死、年七十一、

久建

初久春 龜千代 次兵衛 次郎兵衛

寬永十年癸酉生、母隅州國分土黑川新五兵衛女、

寶永五年戊子四月十五日死、年七十六、

女子

母同前、

幸子 光久公、生女子三人、

女子

母同前、

女子

阿多郡伊作之士篠原宗右衛門政辰妻、

母同前、

久長

初久州 中 久澄 源五郎 紀伊之介 源八

九左衛門

正保四年丁亥二月十九日生、母同前、

寬文五年奉 鈞命、爲町田七郎左衛門忠弘之猶

子號町田紀伊之介、在於彼家經十餘年、延寶四

年有故、違變町田家、歸本氏、

元祿十六年癸未十二月廿九日死、年五十七、

女子 三原總兵衛種峯妻、

母宇宿若狹守久廣女、

時祐

初忠顯 源五郎 源左衛門

延寶六年戊午十月二十二日生、母同、

久清

松千代 「本マ、」
前後

貞享元年甲子八月十四日生、母同前、

寶永二年乙酉十二月六日死、年二十二、

時庸

初久寬 忠見 新三郎 次兵衛 太右衛門

萬治四年 即寬文元年也 辛丑五月十二日生、母鹿兒島郡吉

田之士、武仁右衛門盛秀女、

女子 德永善左衛門親商妻、

母同前、

政賢

江兵衛 伊右衛門

寬文十年庚戌十月二十三日生、母同前、

爲篠原七之丞政壽之養子、

新三郎

母伊集院休左衛門俊亮女、

元祿三年庚午九月六日夭亡、

時用

初忠雄 龜千代 次兵衛

元祿五年壬申二月廿二日生、母同前、

時香

初忠廣 宗八

元祿八年乙亥二月六日生、母同前、

時春

佐之助

元祿十一年戊寅四月十二日生、母同前、

與右衛門

天亡、母同前、

時胤

善八郎

寶永六年己丑八月二十五日生、母同前、

〔新納庶流系圖〕

忠常

安千代丸 孫四郎 母伊東大和守尹祐女也、

新納八代家督近江守忠勝之二男也、

天文十年辛丑九月三日於日州山東火柱戰死、

忠充

初忠職 安千代丸 四郎左衛門 栖雲齋

母島津備中守忠秋女也、

當家之文書不泯所存記左方矣、

〔正文在新納三河忠徳入道楚弓〕

返と鞍之事畏入候、拙者致覺悟者、其方へ召置候、

同前候歟、殊自市來も所望候哉、つれもさし馳さ

れ候て、此方之一書相またせられ候よし、一懇之

至候、

好便之條、令啓入候、仍而本所之鞍大望之由申候處、

可罷任盡意之由承候、尤目出存候、如何様近日中可

進使者候之間、先く御案内申事候、乍萬端申度急候

之條、不能一二候事候、恐く謹言、

五月一日 武久(花押340)

新納四郎左衛門尉殿

御宿所

同名近江守

「上書」
新納四郎左衛門尉殿

御宿所

武久

「正文在新納三河忠徳入道楚弓」

猶く於鹿之屋伊もし御見參共満足候、又とも父子共ニ御越候へなど、候ハ、能候事候、日記等御談合專一候、八月者鹿へ可致祇候候之間、猶く頼存候由、伊右衛もしへ可申候條、如何様く時越能罷成由候、次之肥州番衆無何事罷歸、目出候、長田へ御傳言申聞せ由候、兼く一中風無尔候之由承、笑止までにて候、一途之御療治專一候、來月來く月之間にハ必御越之儀共候へかし、日記共尋申度候、又御息之儀彼是談合申由候、又忠眞拙子めいづれも御傳筆かしこ入候よし申せにて候、如中御氣分之由不承候て、兎角申さす候、驚入候、先く御心得頼存候、内よりも申され候、隨而者長光之刀之事、従方く仰之儀共候哉、數年拙子ニ可

預候之由仰候而、於御違篇者各家く可爲瑕瑾候之條、非是非候、

仰之様者、從四月脚氣出合候て、漸此十日計被助杖、家中步行申候、さ様之儀被聞召付候て、預御札候、寔御懇志之至候、將亦御身上之事、去正月鹿兒嶋へ拙者祇候申候砌、同名右衛門兵衛尉殿以秀敷頼存候、其御返事と候てハ、涯分可被添御心候之由、伊右衛もし被仰候、其後雖申通度候、依無便候申後候、殊更芦北口一途之御行候ハ、所領等之取沙汰可有之候、其砌一入可致調達候事候、恐く謹言、

六月廿六日

武久〔判〕
〔花押〕

同近江守

「上カキ」
新納四郎左衛門尉殿

御返報

武久

「正文在新納三河忠徳入道楚弓」

猶く判形之儀承候條、任仰候、

累年長光之事致堅束候之處、今度令安堵候、大慶不
過之候、然者為其御禮、領地一町令進覽候、當時者
如此、向後者小法上契約申候條、可有格護候之間、
吳儀有間敷候、猶三左衛門尉可被申候之條、閣筆候、
佳事 恐々謹言、

菊月六日

武久(花押³⁴)

新納四郎左衛門尉殿

御返報

「上書」

同近江守

新納四郎左衛門尉殿

御返報

武久

「正文在新納三河忠徳入道楚弓」

「宗俊ノコト也」

御次男契約申候條、徳坊地之門之事、永代可進旨、

違篇有間敷者也、仍狀如件、

菊月六日

近江守武久(花押³⁵)

新納四郎左衛門尉殿

「上力キ」

新納

新納四郎左衛門尉殿

近江守武久

「正文在新納三河忠徳入道楚弓」

如仰先日者為御禮、新三郎殿御參上候、則取成申候、
就左様之儀預御札候、忝畏入存候、隨而岩川御領地
之事、於彌々可為御満足之條、是又不及申候、將亦
其堺御辛勞之儀、從是奉察候、併期面上之時候、恐
々謹言、

八月十一日

忠倉(花押²⁶)

新納四郎左衛門尉殿

御返報

「上書」

新納四郎左衛門尉殿

御返報

忠倉

「天文十一年十二月十五日ノ一書ハ其年月ニ記ス、略ス」

天正十二年甲申七月六日於日州梅北死、

—女子 新納美作守教久妻、

—女子 北郷讚岐守忠虎妻、

—久徳

初忠陸 安千代 孫四郎 四郎右衛門 三河守

入道名楚弓、

永祿十一年戊辰二月二十七日生於日州福島、母日

置周防助久達女、

明曆三年丁酉八月廿一日死、年九十、

—久和

小法師宗俊 母同前、

久和自早歲薙髮為真言宗、及壯年還俗而奉仕于

太守家久公、

寛永十五年戊寅七月廿日死、

—忠興

初忠成 治助 茂左衛門 彌兵衛 武左衛門

寛永元年甲子三月六日生、母新納助右衛門女、

宗俊依無世子為猶子、實新納彌兵衛久篤長子也、

貞享二年二月任琉球國在當職、

同三年七月廿四日於琉球國死、年六十四、

—男三人、女三人 「略ス」

武左衛門時郷 宗右衛門時赴

延寶四年生、 元祿十三年生、

—久篤

孫四郎 民部左衛門 彌兵衛

慶長六年辛丑生、母新納民部太夫女、

新納助右衛門猶子、

—忠村

安千代 愛徳 四郎右衛門

元和五年己未六月二日生、母同前、

元祿二年己巳閏正月四日死、

久壽

松千代 五左衛門

寬永十六年己卯十一月二十三日生、母隅州鹿屋土

三浦幾右衛門義信女、

寶永七年庚寅閏八月十日死、年七十二、

久現

善次郎 八兵衛 宗祝

正保三年丙戌十一月十五日生、母同前、

寶永四年丁亥二月十五日死、六十二、

時起

初忠起 鐵牛 傳右衛門 平内

萬治元年戊戌七月五日生、母同前、

女子

母伊集院休右衛門久能女、

時之

初忠寬 八十郎 八兵衛

貞享元年甲子十二月六日生、母同前、

彦六

天亡 母同前、

女子 母同前、

時長 平七

元祿七年甲戌十二月七日生、母同前、

久治

初久當 松千代 孫四郎 四郎右衛門

寬文九年己酉正月廿八日生、母島津將監久當家臣

久保半右衛門之直女、

寶永四年丁亥八月九日死、年三十九、

時苗

初久年 善次郎 李右衛門

寬文十三即延寶元年也癸丑八月八日生、母同前、

時香

初久珍 甚五郎 源右衛門

延寶七年己未十月十四日生、母同前、

時方

時相

安千代 八之丞 四郎次郎

元祿十二年己卯八月廿九日生、母中西金兵衛秀延

女、

父久治不家督蚤死、故時相直連續祖父久壽之跡、

時峯

愛德

元祿十五年壬午九月二十一日生、母同前、

1284

新納氏支流系圖

久有

號西谷四郎九郎、他腹、

元祖近江守時久長男、越後守實久兄也、

久信

四郎九郎 讚岐守

忠成

四郎九郎 讚岐守

忠利 女子二人

宮内少輔

女子

女子

文龜三年癸亥六月五日死、

比丘尼

法常院

女子二人

忠俊

四郎九郎 越中守

慈養

律僧

宮内太輔

久堅

八郎四郎 右京亮 出雲守

志布志没落之時出奔、

八郎四郎

宮内少輔○北郷Ⓢ爲家臣、

女子 北郷右衛門兵衛尉室、

忠城

四郎九郎 式部大夫 讚岐守 松山城主也、

享祿元年五月一日、於莊内中郷凉水父子共戰死、

僧 他腹、

忠吉

又五郎 五郎左衛門尉 武藏守

天文十年於志和知戰死、

忠鎮

四郎九郎

享祿元年五月一日、於凉水與父俱戰死、

女子

島津山城守忠聖室、

女子

初太郎

松山没落之時出奔、

僧

巨山寺

1285

新納氏支流系圖

久吉

號大崎八郎三郎、尾張守

新納家二代家嫡越後守實久他腹之長男也、

久吉應嚴親實久之命、居住大崎城、故少時號大崎、

久秀

初忠秀 又五郎 將監

長祿三年己卯七月三日、於三俣小山戰死也、

七郎右衛門⑤尉

忠直

播摩守

忠安

出羽守 高隈之主也、

當家志布志落去之時、父子共出奔、

尾張守

女子

北郷出羽守久藏妻、

播磨守

初住高隈之際、姉嫁北郷出羽守久藏、依其緣由北郷氏為家臣居住梶山、子孫於今在都城、

久利

右馬助

女子

久綿

初久乘 次右衛門尉

隨北郷長千代丸移祢答院、自彼地為北郷作

左衛門尉三久從軍渡朝鮮國、於夫地戰死、

年二十五、

女子

都之城久保田越右衛門妻、

久盛

新左衛門 母都之城轟木淡路秀利女、
寛文八年九月八日死、

久知

文四郎 母都之城久保田越右衛門女、
寛文十二年七月廿六日死、

女子

都之城財部權兵衛盛政妻、母同前、

時勝

初久遠 三左衛門 分左衛門

正徳四年免許新納之家號、二男以下可致改
家號於邦永也、云々、

女子

都之城家臣高橋休右衛門充廣妻、
母都之城家臣立山孫兵衛利次女、

久次

四郎助

寛文十二年九月十日生、母同前、
貞亨三年十二月十三日死、

女子

時明妻、母同上、

時明

初久長 太兵衛

延寶八年三月二十三日生、母隅州福山土平原
左近兵衛重賢女、

時勝一子四郎助久次早世而無嗣、故爲養子、
實都之城家臣野邊彈右衛門盛世之二男也、

民部太輔

根占七郎重武之娶自女、居住根占、豊後發向之
時、重武爲軍代赴其國於朝日嶽遂戰死、

忠長

右馬助 伊勢守

平房城主也、當家志布志落去之時、近江守忠勝之爲扈從居其所、

忠源

又五郎 尾張守

忠通

新左衛門

忠泰

丹波守

夏井城主也、丁陷夫①城之之時父子共戰死也、

久貴

初忠知 清左衛門尉 越後守

照山

幸善寺住持、永平東堂、

忠藏

初忠慶 藤四郎 但馬守 民部少輔

當代為北鄉讚岐守忠相家臣、子孫在都之城、

永祿十一年二月二十一日、北鄉時久為援島津

豐後守忠親、遣兵於飲肥、時伊東氏遮之戰于

篠ヶ峯、北鄉家軍不利而一族家臣鬪死者多、

此時民部少輔亦遂戰死、法名義舜善忠、

久家

女子

久持

越後守 齋名加竹、

久清

甚右衛門 七郎右衛門

陽傳

都之城龍峯寺住持、

女子

都之城財部左之助妻、

久尚

源左衛門 母村田式部少輔經房女、

相續於南郷之家、

女子 都之城北郷新左衛門久滿妻、母同前、

久佳

初久繩 或久住 新三郎 甚右衛門 母同

前、

慶安二年五月二十一日死、

女子

母都之城家臣龜澤彦兵衛秀信女、

女子

母同前、

時房

初久通 次兵衛 平左衛門

寬永六年五月十日生、母都之城家臣龜澤彦兵

衛秀信女、

久佳無世子、以故爲養子、實都之城家臣大峯

喜兵衛兼元之嫡男也、

正德四年八月七日死、

久次 吉次郎

延寶四年八月十九日生、母日州高原土高橋助

六女、

元祿三年七月廿五日死、

女子

時喜妻、母同前、

女子 母同前、

時喜

初久廩 吉彌 六左衛門

延寬七年十一月廿三日生、母都城家臣本田佐

渡介親廣女、

時房一子早世、以故爲養子、實都之城北郷平
右衛門久敬之二男也、

時以

孫八

元祿十三年十月六日生、母時房女、

時用

號邦永甚五、

寶永五年正月十六日生、

忠持

宮内太輔

忠虛

或忠康 丹波守 無子孫、

忠親

越後守

忠真

播摩守

女子

又八

出羽守

又七

女子

忠弘

右馬頭 伊勢守

天文十年九月三日於山東戰死、

忠友

初久利 尾張守

梅北城主也、

享祿元年五月一日於莊内冷水戰死、

忠征

又五郎 河内守 尾張守 山田腹、

大崎城主也、

弘治元年九月五日於日州目井戰死也、

忠照

河内守

弘治元年九月五日目井之沒落之時、與父忠征俱戰死、

彦四郎

忠照依無世子為猶子、連續夫跡也、

北鄉氏為家臣、今無子孫、

忠氏

又四郎 安藝守 入道名永看、

恆吉城主也、

天文七年戊戌七月二十六日、宗領近江守忠勝沒落

志布志時、忠氏因妻女之緣、隨身肝屬河内守兼續

入道省鈞、而後為大崎地頭、

天正四年丙子十月朔日、永看與藥丸孤雲・肝屬兵

部、共將肝屬家之士卒、師飲肥南鄉、戰不利遂戰

死、法名永看居士、

忠盈

又八郎 狩野介

於飲肥南鄉與兄忠氏俱遂戰死、年三十、
女子

大始良總職富田大藏房妻、

忠成

外記 入道名自看、

若年時為伊集院右衛門大夫忠棟入道幸侃之臣、

幸侃誅戮之後經三ヶ年而、為島津又四郎忠仍之

臣、子孫在垂水、

志布志大慈寺現在龍雲和尚、患忠盜戰死無其後、而欲立後嗣、達之於新納氏家督乃拙齋遊甫等之老舊、所以使忠成爲彼跡、實富山大藏房長男也、若年事幸侃、則稱父姓富山、壯年事忠仍、則冒養父之姓新納也、

慶安五年壬辰即承應元年也六月二十五日死、年七十八、

忠春

才十郎 才兵衛

元祿五年壬申十一月二十三日死、年八十四、

女子

垂水關屋掃部左衛門妻、

時清

號邦永、初忠伯 市介 道醉

明曆二年丙申十月二日生、母垂水榎山源右衛門

重次女、

忠春依無嗣子爲養子、實垂水榎山喜介重種嫡男也、

時之

初久序 才十郎

天和三年七月二十八日生、母垂水川井田休右衛門女、

時秀

仙兵衛

元祿五年五月二日生、母同前、

市介

寶永六年十二月十一日生、母垂水川井田新兵衛女、

忠家

又八郎 勘解由次官

太守義久公賜新恩地、且補恆吉地頭職、

天正十四年丙戌十二月七日、攻豐後俊光城之時、

遂戰死矣、

女子

日州莊內梅北上柱大宮司梅北刑部少輔兼陸妻、

忠鎮

初忠氏 孫七郎 利兵衛 善兵衛 入道名宗看、

忠家依無世子爲猶子、實梅北刑部少輔兼陸之長男

也、

忠氏幼稚之時、新納武州入道拙齋養育之、至壯年

爲大口土居住夫地、

寬永十七年庚辰八月十四日死、

忠知

初忠昌 孫七郎 勘解由 覺右衛門

慶長十二年丁未誕生、母大口土丸田筑後祐次女、

天和三年癸亥七月二日死、

忠致

初久眞 忠眞 虎千代 七左衛門

寬永三年丙寅生、母大口土上井肥後兼陸女、

寶永二年乙酉正月十一日死、

重好

長三郎 母同前、

爲大口土市來清左衛門家次之養子、

女子

母同前、

時方

初忠豐 忠弥 勘七 七郎右衛門

慶安四年辛卯十一月二十五日生、母大口土久保筑

右衛門之清女、

女子 鹿兒島土谷山六左衛門忠高妻、

新納氏支流系圖

久顯

號惡四郎、八郎三郎

二代家督越後守實久二男、母肝付氏女、妻佐伯氏女也、

雖為嫡男、有故去志布志、先往肝付、後適佐伯居于此矣、○有其故於佐伯被誅戮也、法號道山玄顯
○三男忠臣為家督、於茲久顯惡靈惱當家者類也、由是崇其靈先稱荒人神、後號江林大明神、

忠泰

十郎 兵部大輔 越後守 母佐伯氏女、

若年之時為僧、從佐伯下向于志布志、在大慈寺之際、依 太守氏久公之命、還俗改黑衣、以為十郎忠泰、且復補三保・高城地頭職、賜新恩六十町之地、居住于三保也、

〔永正十六年九月重陽日ノ一書ハ、其年月ニ載セ置也、〕文明

女子 大口士貴島彌兵衛妻、

忠次

勘兵衛

延寶七年己未生、母大口士橫山榮右衛門秀字女、

天和三年癸亥十月廿七日死、

忠朝

與七郎

貞享元年甲子六月廿七日生、母同前、

寶永三年丙戌九月廿六日死、

時住

初忠兼 十右衛門

元祿八年乙亥十月三日生、母隅州栗野土田上十郎

兵衛雅秋女、

時成

與八郎

元祿十二年己卯七月十九日生、母同前、

元年十二月八日死、年八十一、

忠通

十郎四郎 太郎左衛門尉 他腹、

忠房

十郎四郎 山城守

忠近

十郎四郎 中務少輔 早世、

女子 早世、

忠親

十郎三郎 刑部少輔 知覽腹、

此家之家督相續、而三保・高城之地頭也、

明應三年甲寅六月十二日、於志和池野頸戰死、

女子

久次

又十郎 八郎左衛門尉

忠雄

又十郎 十郎左衛門尉

弘治二年丙辰六月二十日戰死、

女子

山下某妻、

女子

忠厚

十郎四郎 十郎左衛門尉

天文十年九月三日於山東戰死矣、

女子

孝（時）^{（備）}

十郎 十郎左衛門尉 常陸守

母同前、子孫記別緒、

忠成

又十郎 左衛門尉 他腹、

子孫記別楮、

女子

新納伊勢守友義妻、

女子

孝久

十郎 兵部太輔 越後守

母肝屬氏女、○八月廿六日於橫川死、

信久

十郎次郎 母同前、子孫記別紙、

久明

十郎四郎 刑部 將監 子孫記別紙、

出家

三俣院石山寺住持、

女子

川上上野介母、

女子二人

忠堯

十郎 母肝屬越前守女也、

十一月十九日於橫川死、

其阿

曾於郡念佛寺七代住持、母朝倉氏女、

真乘書記

母同忠堯、

重阿

曾於郡念佛寺八代住持、他腹、

女子二人

忠誠

十郎 治部少輔 越後守

永正七年庚午生、母大寺壹岐守安勝女、

此代初爲 貴久公之旗下、

永祿六年癸亥九月三日、於鹿兒島死、年五十四、
女子

忠包

十郎 兵部左衛尉 越後守

母敷根備中守頼愛女也、

補隅州始羅郡山田・薩州隈之等地頭職、

「正文在新納喜右衛門久盛」

(本文書ハ一八二号文書ト同文ニツキ省略ス)

文祿元年壬辰八月二十日死、

女子

中野四郎左衛門家信妻、

教久

十郎 兵部左衛門尉 狩野助 孫右衛門尉 入

道名昨少、母深野越後守義弘女也、

補日州野尻之地頭職、

奉 義弘公之嚴命航朝鮮國、在陣有年、此時所賜
之貴翰記左、

「正文在新納喜右衛門久盛」

(本文書ハ一八〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

「正文在新納喜右衛門久盛」

今月中ニ參陳可仕^①之旨申聞候へ共、此表御働此砌

者相延之由到來候間、先^②令^③延引、内々出陣用意仕

候て、時分可相待候、自^④是^⑤可^⑥進^⑦候條、其節無油

斷可渡海候、謹言、

三月八日

義弘^⑧〔御判〕

新納狩野介殿

(本文書ハ一旧記雜錄後編三三二一六号文書ト同文ナリ)

元和九年癸亥六月十四日死、

女子

弟子丸越後守宗益妻、

久景

十郎 越後守

天正二年甲戌誕生、母新納四郎左衛門忠充女、

久景自早歲奉仕 義弘公、其志不淺、公感之書

誓盟之辭賜貴翰爲家珍、及晚年奉仕 家久公、恩

遇不少矣、

〔正文在新納喜右衛門久盛〕

連々別而奉公可仕之旨申上候、其首尾于今無相違之

由聞得候、誠以神妙之至、萬々賴母數存候、諸神八

幡向後不可有忘失候也、

十一月十九日

義弘Ⓢ(花押)〔御判〕

新納十郎殿

〔本文書へ「日記雜錄後編三」三二七頁文書ト同文ナリ〕

寛永十一年甲戌九月朔日、於隅州加治木死、年六

十一、

忠利

九郎次郎 内匠 孫右衛門

爲南郷淡路守忠重之養子、

女子 伊勢八右衛門貞侶妻、

母伊地知肥前重辰入道正繁女、

女子

鎌田傳左衛門政康妻、

母同前、

久方

松千代 十郎 休左衛門

元和二年丙辰生、母同前、

久方壯年而發狂病、故不續家、

萬治三年庚子三月十三日死、年四十五、

潭映

早年而出家、雖然多病、不遂其功、早世、

久行

初久盛 伊勢松 甚兵衛 喜右衛門

元和五年己未六月十四日生、母同前、

兄久方爲狂人、故慶安元年相續家督、奉謁 太守

光久公云々、

寶永二年乙酉六月十六日死、年八十七、

女子 有川總右衛門貞清妻、

母桂八左衛門忠守女、

女子 鎌田了右衛門政恆妻、

母鮫島氏女、

女子

母同前

久規

長松 十郎

延寶八年庚申七月九日生、母山本氏女、

元祿八年乙亥十二月十一日死、年十六、

時有

初久雅 松助 十郎

元祿八年乙亥九月十四日生、母同前、

兄久規早世、故久雅爲嫡子、

寶永三年三月十五日爲謝繼目相續之辱、奉見 太

守吉貴公云々、

時陽

初久堂 總太郎 喜右衛門

元祿七年甲戌六月二十六日生、母久行女、

久堂實有川總右衛門貞清之嫡子也、奉訴爲久行之

二男、時寶永二年十一月十七日、肝屬主殿久兼以

黑葛原源左衛門忠以、傳 高命日、如願宜爲久行

之二男、故冒新納氏矣、

越後守忠泰四男

孝晴

十郎 十郎左衛門尉 常陸

母知覽氏女、

忠苗

民部少輔 常陸 入道名道久、妻島津伯耆守忠

衡入道卜波義岡先祖息女、

〔天文八年閏六月十七日市來城云々、其年月ニ記ス略ス〕

市來城退去之後、有 日新公之命曰、屬我致忠功者昇日置九十町、吾答曰、事二君非士道、堅辭之矣、於茲乎教左兵衛尉尙久扶持吾、故爲尙久之臣也、子孫在宮之城、

賢久

十郎右衛門兵衛尉 加賀守

忠秀

八郎右衛門兵衛尉 加賀守

將監

爲柏原周防助猶子、

忠清

八郎 喜兵衛 無子孫、

忠通

民部少輔 於隅州清水戰死、

九郎 於馬越戰死、

又四郎

越前守 入道名拙心、

大永四年甲申生、

慶長十二年丁未十一月十六日死、年八十四、

— 女子 鹿兒島土肥後又右衛門妻、

— 女子 宮之城平田六郎兵衛宗吉妻、

— 久清

鶴四郎 越前守 九郎右衛門 入道名松山、

天正九年辛巳生、母薩州吉田土邊牟木關付左衛門

女、

拙心依無世子爲猶子、實宮之城桑畑刑部少輔子也、

寬文四年甲辰十月七日死、年八十二、

— 忠成

五郎 安左衛門

慶長十八年癸丑生、母薩州高城土小田原六郎左衛

門女、

忠成恐冒新納氏、而少時號大崎、シハラフ雖然其後得家嫡

近江久辰之免許、如元冒新納者也、

貞享五年即元祿元年也戊辰九月二十二日死、年七十八、

— 忠政

五郎 孫九郎 安兵衛 入道名堪全、

寬永十九年壬午九月廿日生、母宮之城顯娃五左衛

門女、

— 忠朝

虎熊 孫右衛門 孝左衛門

慶安四年辛卯八月十日生、

正德三年癸巳正月七日死、年六十四、

— 女子

宮之城家臣日高覺右衛門義家妻、

母同前、

— 女子

宮之城作田市郎左衛門清信妻、

母餅田氏女、

— 忠明

半平 安右衛門 九郎右衛門

延寶五年丁巳十一月八日生、母同前、

相續家兄新納安兵衛忠政之家、

女子

宮之城大炭四郎兵衛友次妻、母同前、

時盈

號邦永、孫四郎 留兵衛

元祿二年己巳七月十五日生、母同前、

兄忠明相續家兄忠政之家、以故時盈繼父之跡、

○受家嫡之令避新納氏、號〔拜〕永、

忠寄

吉五郎 孫九郎 彌三左衛門

寬文四年甲辰四月廿八日生、母宮之城家臣滿尾貞

左衛門貞則女、

寬永五年戊子七月二十三日死、

女子

宮之城滿尾次左衛門貞基妻、

女子 宮之城有馬七郎兵衛純斬妻、

母宮之城內山市左衛門盛種女、

忠次

虎之助 早世 母同前、

時庸

初忠〔時〕^明 半平 安右衛門 九郎右衛門

延寶五年丁巳十一月八日生、母餅田氏女、

忠政嗣子彌三左衛門忠寄不家督而死、於是家將斷

絕、以故時庸攜一子相續忠政之家、實新納孝左衛

門忠朝之嫡男也、

此家 相模守忠良入道日新公所附與島津左兵衛尉

尙久也、以故於時庸家、嫡子代代如元冒新納氏、

至二男以下之家、自今以後可稱家號於邦永、正德

四年之秋家嫡四郎左衛門久邦受令傳焉、

時易

五郎八

元祿十三年庚辰二月二十日生、母宮之城稻富源左衛門長行女、

女子

母同前、

〔新納支流系圖〕
越後守忠泰五男
忠成

又十郎 左衛門尉 他腹、

久季

又十郎 早世、

女子

忠長

四郎次郎 傳左衛門尉 因幡守

當家志布志沒落之時兄弟出奔、爲守護方昵近也、

二郎九郎

兵部左衛門尉 ○於長野戰死、

城助

助五郎 民部少輔

日州綾居住、此子孫斷絶、

久延

曲左衛門尉 藏人 因幡守

居住于大崎矣、

僧

加世田淨福寺十代住持、

久行

四郎五郎 傳左衛門尉 藏人 李右衛門 入道

名一步、母新納氏女也、

自大崎移帖佐、又移居加治木也、

奉仕 惟新公勤御使役人也、今御用

慶長十六年辛亥於加治木死、

女子 中馬筑後妻、

母新納右衛門入道一珪齋女也、

久濟

次兵衛（尉） 母同前、

爲長井氏猶子、連續彼家、

久加

甚吉 狩野助 織部佐

兄久濟爲長井氏之猶子、以故連續父之家也、

慶安二年己丑正月廿二日死、

女子 島津兵庫久住家臣法元內藏助妻、

久秀

貞右衛門尉

辭長井氏、再爲新納氏、

延寶三年乙卯十月十一日死、

久商

次郎右衛門

寬永十九年壬午九月五日生、母蒲生土金子千左

衛門女也、

元祿五年壬申二月十日死、

久準

初久武 安左衛門 孫右衛門

正保四年丁亥五月九日生、母同前、

元祿九年丙子五月廿八日死、

女子

池田治左衛門兼武妻、母同前、

時富

初久富 木工之助 孫右衛門

延寶八年庚申五月三日生、母櫻島土有村勝兵衛

女、

時玄

初久門 軍八 權兵衛

貞享元年甲子九月十二日生、母同前、

傳助

依咎被誅矣、

時明

初久明 傳次郎 次左衛門 貞右衛門

延寶七年己未九月十七日生、母妾腹、

僧

長熊 號積瑞、早世、

時貞

初久信 彥之進 次兵衛

元祿十五年壬午六月八日生、母鎌田藤四郎政純

家臣川畑彌兵衛篤滿女也、

女子

母同前、

久重

千代龜 狩野助

母中馬新左衛門入道了意女也、

正保三年丙戌四月八日死、

久政

木工右衛門 母同前、

寬文五年乙巳五月十五日死、

女子

關次郎兵衛妻、

女子

野田省庵宗伸妻、

女子

種子島爲兵衛時壽妻、

久隆

甚吉 傳左衛門 市郎右衛門

寛永九年壬申十二月二十二日生、母和田圓覺院義

信女也、

正徳二年壬辰八月十二日死、

新左衛門

早世、

男子

千代龜 早世 母西村分左衛門昌親入道中山女、

時喜

初久富 虎助 次右衛門 長右衛門

寛文十一年辛亥八月二十八日生、母同前、

女子

母同前、

時安

初久道 分右衛門

延寶六年戊午正月三日生、母同前、

久長

甚吉 早世、

女子

母伊集院休左衛門俊民入道庭山女也、

1293

「新納氏支流系圖」
刑部少輔忠親二男
信久

十郎次郎 肝屬腹、

久雪

兵部左衛門 若狹 母山田氏女、

妻者肝屬越前守兼演家臣前田佐渡盛治入道德嚴之
女也、以故久雪依妻女之縁由倚頼肝屬氏、居住于

隅州溝邊、爲肝屬氏家臣、

女子 樺山氏妻、

女子 伊地知氏妻、

久林

十郎四郎 刑部少輔 三河守

母肝屬氏家臣前田佐渡盛治入道德嚴女、○仕肝屬
彈正兼寬、爲溝邊之地頭、

久信

十郎四郎 刑部少輔 十右衛門尉 三河守

元龜元年庚午生、母内尾寺愛甲氏女、
文祿四年從肝屬氏移居薩州喜入、
元和二年丙辰十月十三日死、年四十七、

久宥

新助 五郎左衛門 入道名無心、

天正五年丁丑生、母同前、肝屬氏家臣也、
萬治三年庚子五月二十二日死、年八十四、

久棟

小兵衛 民部左衛門

慶長九年甲辰八月十三日生、

久宥依無世子爲猶子、實三河守久信二男、
貞享三年丙寅十月二十二日死、年八十三、

久行

小兵衛 五郎左衛門 彌左衛門 入道名宗伯、

寬永元年甲子正月二十三日生、母肝屬氏家臣前
田民部盛繼女、
正德元年辛卯七月十五日死、年八十八、
久次

十兵衛 母同前、

爲肝屬氏家臣肝屬九郎兵衛兼兵之猶子、

女子

肝屬氏家臣稅所藤右衛門爲往妻、

母肝屬氏家臣中馬因幡重方女、

女子

肝屬氏家臣安樂主馬兼儀妻、

母同前、

時惟

初久茂 彌十郎 平内 五郎左衛門 彌左衛門

寛文三年癸卯二月十二日生、母伊勢氏家臣蓑田七左衛門頼弘女、此家依令避新納氏、號邦永、

—女子

伊勢氏家臣大津武兵衛與昌妻、母肝屬氏家臣安樂主馬兼儀女、

—女子

新納三左衛門時興妻、

—時苗

初久伯 新助

元祿十年丁丑三月八日生、母同前、

時昭

彌助

元祿十四年辛巳十月十五日生、母同前、

—女子 肝屬氏家臣肝屬九郎兵衛兼兵妻、

母隅州加治木土宮路氏女、

—久明

萬千代 右衛門 十右衛門 入道名宗清、

慶長五年庚子正月九日生、母同前、

天和二年壬戌正月朔日死、年八十四、

—久棟

叔父久宥依無世子爲猶子、

母同前、

—女子

加治木土宮路舍人妻、

母同前、

久重

萬千代 十郎四郎 慶右衛門 滿右衛門 十左衛門

元和四年戊午七月十九日生、母肝屬氏家臣志志目

對馬義延女、

延寶九年即天和元年也辛酉三月十三日死、年六十四、

女子 母同前、

女子

肝屬氏家臣日高新左衛門爲里妻、

母同前、

久治

初久朝 萬吉 友之進 傳左衛門 五太夫

慶安四年辛卯二月十三日生、母北郷作左衛門久嘉

家臣藤井覺兵衛氏喜女、

元祿七年甲戌七月十三日死、年四十四、

時宏

初久武 十助 左太夫 一角 助右衛門

明曆元年乙未十月二日生、母同前、

此家受令避新納氏、號邦永、

女子 肝屬氏家臣志志目源左衛門義陳妻、

母同前、

時豫

初久富 萬之助 左太夫

元祿四年辛未八月廿一日生、母肝屬氏家臣長濱伊

左衛門重繼女、

女子

母同前、

時永

十助

元祿十三年庚辰九月十五日生、母同前、

女子 肝屬氏家臣八木良右衛門昌芳妻、

母肝屬氏家臣中村六左衛門家純女、

時興

初久芳 十郎四郎 十郎二郎 五後之助 典膳

十右衛門 三左衛門

貞享二年乙丑十一月七日生、母同前、

此家之先祖若狹久雪爲肝屬氏家臣、而爲溝邊地頭、

忠勤無紛、以故正德四年之秋家嫡四郎左衛門久邦

傳令曰、於時興家嫡子代代免許新納氏、至二男以

下者以邦永可爲家號矣、

女子 肝屬氏家臣日高善五左衛門爲陽妻、

母同前、

「新納氏支流系圖」

刑部少輔忠親三男

久明

十郎四郎 將監 刑部左衛門

於串良戰死、

久

十郎四郎 新右衛門

忠充

狩野介

爲日置周防介忠頭之猶、

於日州飢肥新山戰死、

忠職

或忠誠 十郎四郎 新右衛門 入道名意月、

先爲島津豐後守之臣、其後爲伊集院右衛門大夫忠

棟入道幸侃之臣、

「天文十八年十一月六日忠職在判ノ文書其年月ニ載セタリ」

忠晴

十郎四郎 民部少輔

忠泰

源次郎 覺內 治部少輔

爲日置狩野介忠元之猶子、

女子

祁答院左京亮妻、

忠長

十郎四郎 一力坊

元和五年五月廿六日死、

女子

日置越後守忠昌妻、

忠饒

玄蕃 覺內 善左衛門

慶長十三年五月廿七日生、母民部少輔忠晴女、

忠長依無世子爲猶子、實日置越後守忠昌之長男也、

島津兵庫頭忠朗之家臣、而子孫在隅州加治木、

延寶六年戊午十一月八日死、

忠成

清左衛門

忠成實日置越後守忠昌之三男也、與兄忠饒俱受

新納一力坊忠長之撫育、故冒新納氏、以是其後

得家嫡近江久辰之免許、而後樹家於忠長之二男

矣、

爲日州松山士之時、蒙 太守家久公之尊命、附

屬于島津市正忠廣、

寬永十九年壬午十月二十六日死、

時昭

初忠昭 清左衛門

寬永十一年甲戌十月生、母日州福島之住橫山萬

壽房女、

忠昭爲松山士之時、寬文八年、以同所士山田治

右衛門弟勘左衛門、於松山爲名跡之養子、自己

爲島津市正忠廣之臣、其後元祿九年十一月十九日、依願爲薩州郡山之土、

時重

號邦永、初忠重 覺左衛門

寬永十九年壬午七月十九日生、母同、

從父忠成仕于島津市正忠廣、

正德四年之冬改邦永云々、

女子

鎌田藤四郎家臣富岡源右衛門妻、

母鎌田藤四郎家臣竹之内仙兵衛實幸女、

時兼

初忠將 萬右衛門 勘兵衛

元祿五年壬申正月十九日生、母同前、

島津助之丞久白家臣也、

時方

初忠長 勘左衛門

實松山土山田治右衛門弟也、寬文八年爲忠昭名

跡之養子相續當家、

時英

初忠清 清左衛門

寬文九年己酉三月十三日生、母喜入家之臣桑

畑早左衛門女、

實忠昭之猶子而薩州郡山土也、

出家

時模

初忠峯 熊千代

元祿十五年壬午八月廿七日生、母伊集院士有馬

覺兵衛女、

時員

初忠伊 七郎

寶永六年己丑四月十五日生、母同前、

時滿

初忠利 德助 志摩之介 治左衛門

明曆四年戊戌二月生、母池田吉右衛門女、

寶松永治左衛門隅次之二男、爲忠良之養子、

時賢

初忠方 彌八左衛門 武右衛門

寬永十二年壬子二月二十三日生、母石塚源左衛

門政次女、

勘左衛門忠良之實子也、忠良於松山以忠利爲養

子、忠良隱居故、時賢與父俱爲家嫡、市正久珍

之屬士住于隅州高山、

時遠

初忠治 與八之丞

貞享四年丁卯九月六日生、母藤崎藏右衛門女、

○寶蓑毛源左衛門頼次之二男也、爲時滿之養子、
日州松山士也、

時宣

初忠里 德千代 德助

元祿十三年己卯七月十二日生、母妾、

時滿之實子也、

時知

初忠之 德兵衛

寶永三年丙戌正月九日生、母同前、

女子 加治木之臣白尾甚平妻、

母加治木之臣法元次郎左衛門女、

時常

號邦永 初忠置 市兵衛 善左衛門

正保二年乙酉三月二十日誕生、母同前、

島津兵庫久住之家臣而任加治木、

正德四年八月改邦永云々、

忠致

市右衛門 早右衛門 善右衛門
承應三年十一月十六日生、母同前、
爲加治木之臣日置藤左衛門之養子、

女子 加治木之臣林覺左衛門妻、

母加治木之臣岩崎覺左衛門女、

時殊

初忠茂 十郎四郎 十兵衛

元祿元年戊辰十一月十九日生、母同前、

時謀

初忠濟 內藏之丞 藤右衛門

元祿四年辛未十月二日生、母同前、

爲叔父日置善右衛門忠致之養子、

新納氏支流系圖

氏豊

遠江守

二代越後守實久四男、三代近江守忠臣次弟也、

仲久

遠江守 法名道秀、

女子

忠尊

又次郎 上野介

女子 山田宮内少輔室、

女子

左兵衛尉室、

忠安

初久秋 二郎五郎 左兵衛尉

上野介忠◎兼◎依無男子爲猶子、妻第二女、連續當

家、實七代家督近江守忠武二男也、

享祿元年戊子五月朔日、於冷水遂戰死矣、

女子

廻某室、

久厚

又次郎 治部少輔 播磨守

女子

新納又五郎康久室、

久友

次郎五郎 市右衛門尉 母三浦某女也、

久道

源十郎 小右衛門尉 大藏

天正十四年丙戌生、

慶安二年己丑六月九日死、年六十四、

久智

久四郎 入道名宗心、

寛文十年庚戌十月廿七日死、

久宣

久右衛門

久智無嗣、養久宣爲子、實瀬戸山甚之丞良正之

二男也、

延寶九年辛酉正月二日死、

時門

初久行 久富 彌四郎 三左衛門 久右衛門

萬治元年戊戌十二月二十七日生、母稻津半左衛

門女、

時員

初久國 久武 長次郎 甚助 平左衛門

九八

寛文三年癸卯七月四日生、母同、

久重

久四郎薙髮爲浮屠氏名放牛、

女子

吉井圓右衛門妻、

時滿

松之丞

元祿十五年壬午正月八日生、母伊東清次郎祐利

入道慶碩女、

女子

時薰

初久治 久四郎 十兵衛

元祿三年庚午八月三日生、母上野喜兵衛女、

時

三左衛門

元祿七年甲戌正月二十五日生、母同、

女子 貴島藤七兵衛妻、

母東郷五右衛門重政女、

久盛

千次郎 小右衛門 大藏 入道名一醉、

慶長十七年壬子八月十一日生、母同、

貞享四年丁卯十二月十一日死、年七十六、

秀安

彌太右衛門

元和四年甲子八月二十五日生、母同、

爲鬼塚勝右衛門之養子、

女子

伊東平右衛門妻、

女子 山本勘兵衛親道妻、

女子 向井主馬友說妻、

母愛甲源左衛門季廉女、

女子 有河喜左衛門貞說妻、

母同前、

久紀

初久寬 源十郎 小右衛門 大藏 市右衛門

慶安三年庚寅十月十七日生、

正德三年癸巳二月三日死、年六十四、

女子 土岐彦右衛門賴堅妻、

母同前、

女子 伊東刑部左衛門祐平妻、

母同前、

女子

林甚五兵衛道基妻、

母篠原總右衛門政辰女、

女子

新納左京忠倚妻、

時美

初久芳 仙次郎 治右衛門

元祿二年己巳五月十三日生、母同、

此家小番家格云々、

女子

時意

初久年 源十郎 源右衛門 善平

元祿七年甲戌十月十三日生、母同前、

久次

梅千代 仙左衛門

元祿十一年戊寅三月二十五日生、母同、

爲法元三左衛門盛信之養子、

時

次郎五郎

寶永五年戊子十二月二十九日生、母山田四郎兵衛

有壽女、

時

源十郎

正徳三年癸巳正月二十五日生、母同、